

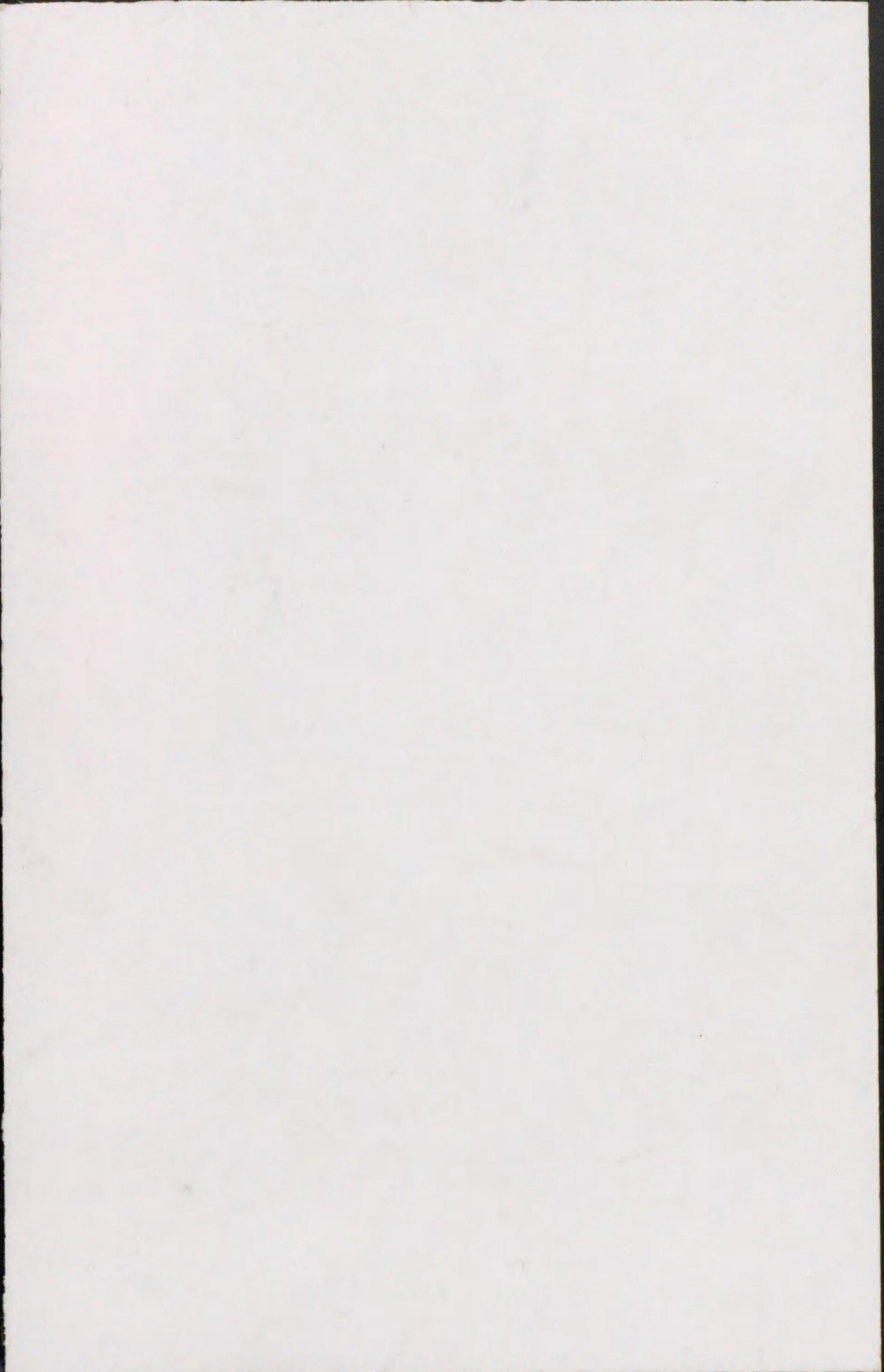
595-93



1200501527258

595
3

口
複
写





本書は四十五年記者生活の体験を
記述せしものなり
第一——第四号のみは新に稿を起せり
その第五七以下は舊稿を補正す
松島新聞に送致せしものなり

納本



四十五年記者生活



柏軒 松井廣吉著

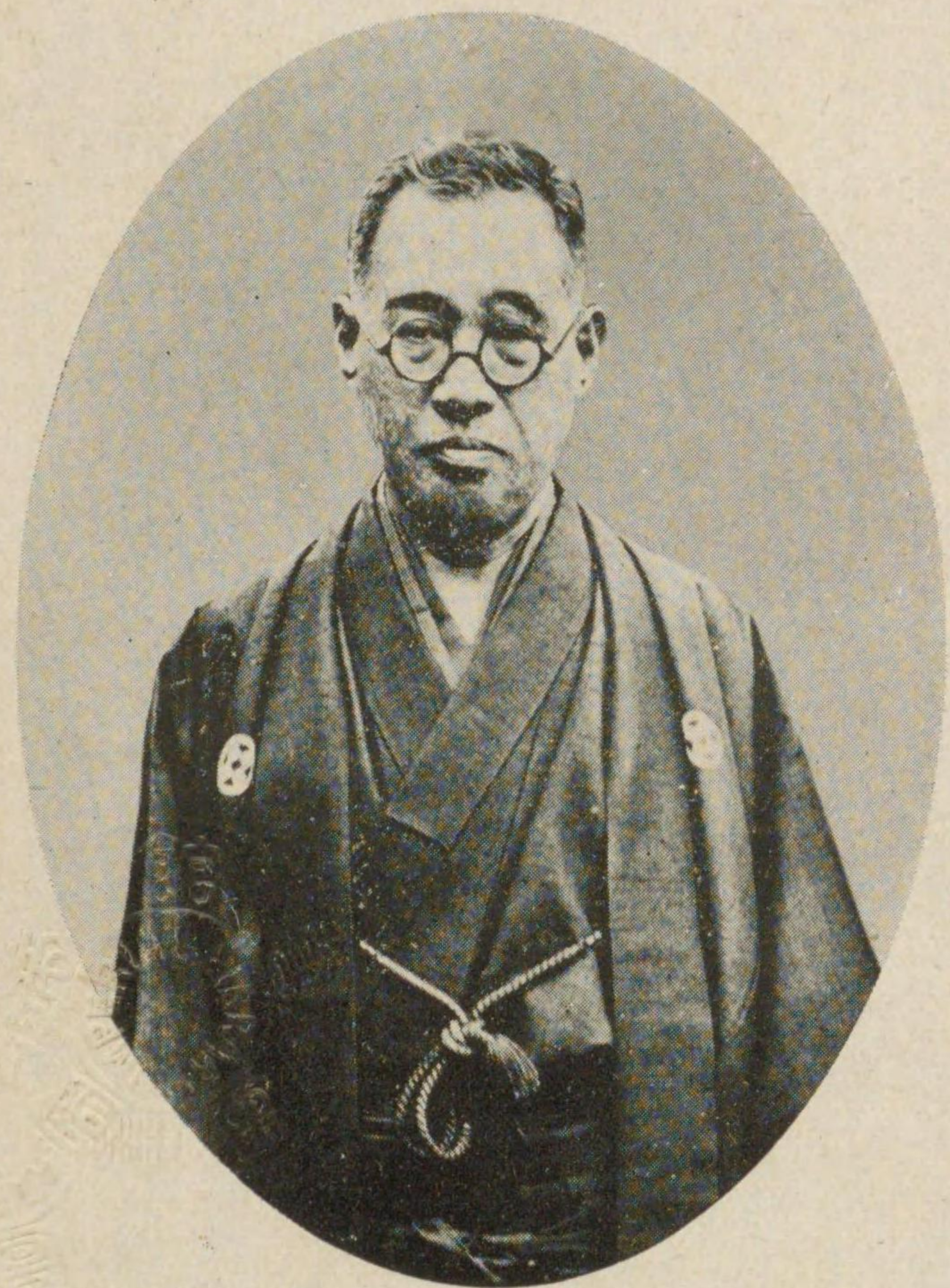
東京 博文館藏版

借者 松井廣吉著

四十五年記者生活

納本

東京 博文館藏版



者 著

自序

明治十六年初冬、始めて新聞記者生活に入て以來、今茲、昭和四年(明治から通算すれば六十二年)まで實に足掛け四十七年だ、此間曾て記者生活を離れたことが無い、魯鈍移ることを知らず、常に貧苦に呻吟すること人の嗤ひを招くこと多いであらう、去れど顧みて懐へば亦笑ふべく怒るべきことも少くないから、大正十五年冬(昭和元年)記して地方讀者の覽に供すると共に、兒孫にも貽し讀ましむべく、次々に興味を主として、「四十五年の記者生活思出記」と題して松陽新報に掲げた處、更に冊子とすべく、企畫された方があり、殊に舊臘余が老記者たるの故を以て金杯の恩賜を忝くするや、其祝賀記念として豫約出版をしようといふ余に承諾を求められた人もあつたが、寧ろ中央に於てするが宜からうとの勧めもあるまゝ、茲に博文館に請ふて公刊することゝした。

或は新聞の内幕、記者の内情、其他側面裏面史として、將た各種人物の或る批評として、徹せぬ所もあり、聊か觸れた所もあり、畢竟老朽記者の無秩序な思ひ出の筆録だ、素より有識者の嘲を招くに過ぎまいけれど、然かもまた鶏肋捨て難い情なきを得ぬ、仍て新聞既載のものを修補して、元の九十七節を百二十三節に増した、殊に山本内閣倒壊からは全く新たに起草したのだ。

余の處女出版たる日本内閣論が博文館から出されたのは、明治二十三年二月で、今から正さしく四

十年前だ、且余が記者生活に入つた初歩は實に博文館を創設して今日に至つて居られる大橋氏の越佐毎日新聞であつたから、今や本書も亦博文館の手に於てすることは、蓋し大に宿縁ありと申すべきだ
 想ふに余の記者生活は更に五十年となり五十年以上となるか豫測し能はぬけれど、述作は恐らくは之
 が最後のものであらう、然らば則ち博文館に縁つて始めあり終ありで、余の満悦は此上もない。

昭和己巳六月二十五日夜半青燈下に

柏 軒 生 記

目次

第一 記者生活の初歩……………二	文運進歩へ奉仕、版權條例の創定……………三
新聞との機縁、先師の感化……………二	學者との情誼、大藏大臣を出す……………三
子供記者、驚いた妻の勧め……………六	杉浦重剛先生、酉の町見物珍話……………四
論文で苦勞、錢湯や雪隠でも……………九	廣津柳浪方で井で洗面、幸田露伴氏の一喝聲
大橋翁の筆禍入獄、長岡士族のエラサ……………二	村井弦齋氏、四人で酒一斗を平ぐ……………四
遊獵と狗肉、暢氣な無責任振り……………五	第五 大橋佐平翁……………五
饒舌の御稽古、柳原伯愛妓の追分節……………九	勤王家で崇佛家、夫人の機轉で襲撃を免
第二 博文館の創立……………三	かる……………三
發祥地は本郷弓町、大家論集……………三	下けられぬ頭、大橋圖書館……………五
初度の大成功、物價の安さ……………六	賢夫人松子刀自、その陰徳……………五
第三 雪國の特色……………三	第六 大橋新太郎氏……………三
雁木造、珍な藝妓姿……………三	兩親の美點繼承、獨立の眞骨頭……………三
第四 博文館時代……………三	實業界乗出の腕前、アームストロング社……………三

長と會談……………六
 最高點で議會へ、大震災で感銘……………六
 和田豐治氏、二世澁澤……………七
 須磨子夫人、入道の茶人……………七

第七 中央新聞時代……………七

入社始末、我政治思想……………七
 珍記者揃ひ、外米は高價……………八
 天ブラ十三人前、寺崎廣業畫伯……………八
 議員のニツクネーム製造、安廣伴一郎氏……………八
 三井の素ッ葉抜き、珍營業部長……………九
 情死未遂、其實験實話……………九
 質物は養老物、實に多士濟々……………七

第八 日清戰役……………一〇

新聞で旅順を攻略、ブカク／＼宣傳の元祖……………一〇
 遅塚麗水氏の艶聞、鯛の活き作り……………一〇

第九 大岡硯海先生……………一六

西郷侯を一喝す、その潔癖……………一六
 新聞講談の元祖、風俗壞亂で弱る……………一六
 萬朝報發行前、黒岩氏と交渉……………一七
 狩野芳厓の名畫、池上秀畝氏を妹婿……………一七
 晩酌が祟つて腦溢血、原敬氏の苦心……………一七

第十 新聞紙の使命……………一四

意思疎通が第一、遊米中の一挿話……………一四
 第十一 品川子爵……………一四

第十六 伊藤春畝公……………一七

質素な御馳走、初對面で好感情……………一四
 煙草盆を抛らる、癩癩玉の破裂……………一四
 トコトンヤレ節、其死面……………一五
 第十二 西郷侯爵……………一五
 南洲と柏軒、活た達磨さん……………一五
 難有さに大粒の涙、從軍記者優待……………一五
 第十三 勝海舟伯……………一五
 お恵みは平等に四拾錢、日本人の漢文は
 ダメ……………一五
 第十六 伊藤春畝公……………一七
 威海衛還附の眞意、公の揮毫……………一七
 皇太子殿下の御事、その天成の健康……………一七
 水揚物語、附たり井上侯の半面……………一七
 新氣樂のお金、またはれ一の女豪傑……………一八
 善光寺詣、尼公代理の尼美人……………一八
 長野の据風呂問題、公の四天王……………一八
 自分丈けが書生風、野村子の黃夢庵……………一八

第十七 從軍の一端……………一九

第十四 矢野次郎先生……………一九
 飄逸で親切で大人望家、タッタ壹圓札貳枚……………一九
 第十五 益田孝男……………一九
 朝吹英二翁の珍妙談、百萬圓など夢想も
 出來ぬ……………一九
 後進誘掖の好意、碧雲臺は恩賜物……………一九
 第十八 萬朝報時代……………二〇
 戰爭の悲惨を痛感、死が恐しくなる……………二〇
 芝罘を迂回、富田幸次郎氏の放屁攻め……………二〇
 新聞記者遭難、英國兵の贅澤……………一九
 太活砲臺内の汚穢、判らず屋の由比參謀……………一九
 盜泉を飲まぬ意味、露兵の不人望……………一九
 新聞記者遭難、英國兵の贅澤……………一九
 戰爭の悲惨を痛感、死が恐しくなる……………二〇
 芝罘を迂回、富田幸次郎氏の放屁攻め……………二〇

大隈侯の舊邸、珍奇な家屋……………二〇六
 天城と圓城寺、記者の技量……………二〇九
 内村鑑三先生、附たり山縣斯波兩氏……………二二三
 公正無私の一哲人……………二二四
 女記者事件、涙香先生の濡衣……………二二七
 舊藩主の爲貴族院議員推薦失敗……………二三〇
 初度の焼打迄、余の媾和主義……………二三三
 中央公論との關係……………二三五
 大谷光瑞師……………二三八
 出征軍人の家庭……………二三三
 悲慘な夜景……………二三四
 悽愴な内相官邸前……………二三七
 第十九 黒岩涙香氏……………二四一
 新聞界の一人傑、異常な讀書家……………二四二
 徹底性の凝り家、後の禿頭……………二四四
 夫人身受の珍事、貞節な夫人……………二四七
 第二十 明治大帝崩御……………二五〇
 群衆の祈禱、富人の忠誠……………二五〇
 御質素な御病室、大浦子泣く……………二五二
 第二十一 明治大帝御事蹟……………二五五
 英國を吞ませ玉ふ、コンノート親王神威に打たる……………二五五
 銀鈴の御聲、乗馬の御名人……………二五八
 京都が御氣に入り、征露役には御泰然……………二六〇
 第二十二 やまと新聞時代……………二六三
 大浦子と初對面、笹川潔氏の跡受け……………二六三
 松下軍治氏、極めて情誼に厚い……………二六五
 諸事豪壯で行く……………二六六
 衆議院に出る時……………二七一
 活動寫眞利用の元祖……………二七四

賭碁賭將棋の強……………二七七
 罪のない悪戯……………二八一
 第二十三 幸徳秋水……………二八四
 社會主義者たりし経路、その孝心……………二八五
 銀屏に友禪縮緬の夜具、菅野ちか子……………二八六
 大逆事件の真相、悲むべき母の自刃……………二八九
 第二十四 枯川と紫山……………二九三
 義兄弟一家、俳味タツブリ……………二九三
 第二十五 紅葉山人……………二九六
 その珍聞、却て女に欺かる……………二九六
 第二十六 桂公……………三〇〇
 三十年の記者生活、若槻禮次郎氏……………三〇〇
 公の不幸な死、明治大正間の第一人……………三〇三
 周圍の奇材駿足、妙な曾禰子……………三〇六
 大外交家の小村侯、秋山海軍參謀……………三〇八
 一代の奇材後藤子、人材拔擢法……………三一
 原氏等との比較……………三四
 後進の引立と援助……………三七
 最致命の内閣、反對黨の惡竦……………三〇
 薨去後に去つた逸材、附細野次郎氏……………三三
 第二十七 山縣公……………三七
 古名將の風度、疊の上で死度くない……………三七
 所謂重大事件、大正帝の仁慈と公の忠誠……………三〇
 第二十八 山本内閣倒壊……………三三
 シーメンス事件、警官の凶行……………三三
 攻撃の三段戦法、一段から二段へ……………三六
 黒岩松下の握手、宮殿下へ進謁……………三九
 最後の請願書、嚴肅なシーン……………四三
 豫算不成立で總辭職、原敬氏の潔い態度……………四六
 第二十九 大隈内閣成立……………五〇

鰻香内閣命名の元祖、大に井上侯に説く……三五
 記者團の發言權、在野黨へ挑戦……三五
 政友會と同志會と入替る、二十一ヶ條々
 約の打明け……三七

第三十 大隈内閣の成績……三六
 内閣改造、大浦子引退、森久保派を驅逐……三六
 その特種政策、憲政會の成立……三五

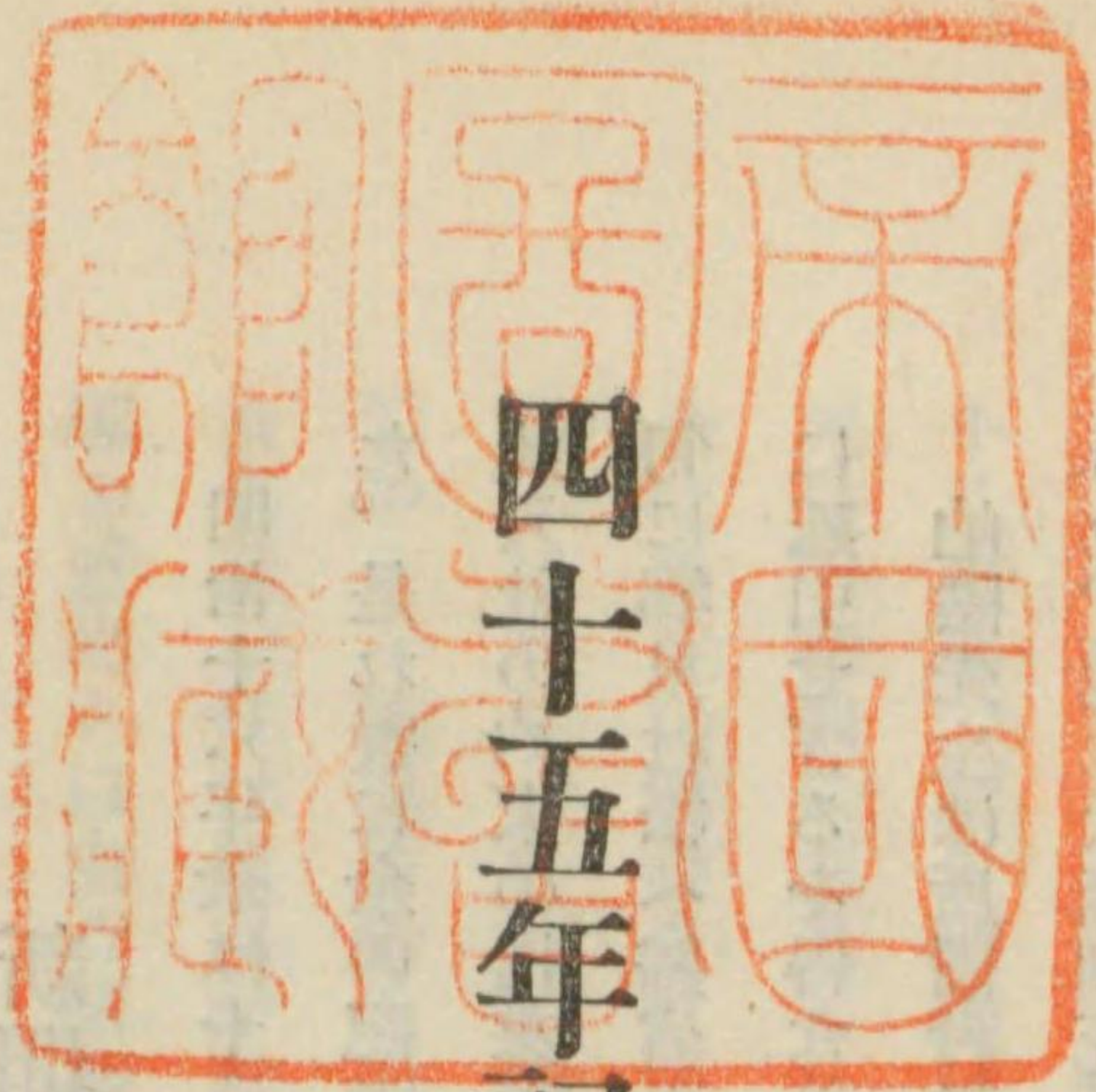
第三十一 大隈侯……三九
 附たり加藤伯、珍らしい國民葬……三九

第三十二 滿洲の詩人……三七
 余の大連時代、殖民地の詩客……三七

第三十三 山陰の詩人……三八
 剪淞吟社其他、開拓者は耐雪翁……三八
 各吟社の正副長、禪僧詩人……三六
 石見と鳥取、眞の詩人……三六

第三十四 聖徳……三九
 生れながらの名君、明治大帝の御再現……三九

(終り)



四十五年記者生活

松井柏軒

第一 記者生活の初歩

新聞との機縁、先師の感化

明治十六年余は十八歳で長岡市で發刊される越佐毎日新聞へ入社し、その論説記者たることになつた。是れ實に余の記者生活に入る初めであつて、爾來四十有六年、引續いて此生活を續けて居るが、此入社の約束の出來たのは其年六月頃余の在京當時で、余は學生として暑中休暇を少し早めて六月下旬に郷里村松へ歸省し、暫らく休養中、俄かに堀岾陰先生が逝去されたので、余の長岡行は思ひの外に延引せざるを得なかつた。

岾陰先生は所謂村松七士の一人で、即ち勤王家であり、そのため藩論に抗した廉で牢獄にまで投ぜられ、他は大抵刑死したのに、唯先生のみは不思議に死を免かれ、維新後は人材を育成するが何よりの急務であるとして、藩學の教頭松本古道先生(出雲の人)の後を承けて自彊館を主宰し、踵で小學校令の行はるゝや、更に養正塾を建て、子弟を收容された。余は小學生時代から此塾に入つたが、先生は余の餘りに腕白なるを抑へようとして、故らに其書齋の次室に置かれた、茲は塾僕の平山恒藏といふ

余より一年上の男と、塾寄宿生たる大竹甲子郎氏(代議士貫一氏の實弟で唯一の寄宿生であつた)と同居した。

余は六歳の時、祖父から今川庭訓(了俊の作)を句授されたが、父からは更めて大學の句讀を授けられ、何が何やら判らぬ中にも、論語や孟子の素讀をも教つたから、入塾後は専ら日本外史、國史略、十八史略、歴史綱鑑補などを教はり、漢詩の作法も課せられたが、先生は加藤弘之翁が翻譯して明治天皇の御前に進講したといふブルンチュリーの政治學といふ書籍を余に貸して讀ませられたのみか、余は先生の購讀され居た朝野新聞なども看ることを許されたので、茲に測らずも政治に興味を持つやうになり、自由民權論などにも頗ぶる興を持ちつゝ、上京後は更に中江兆民先生譯のルツソー民約論やら、馬場辰猪氏の天賦人權論なども讀みただけれど、尙若干の疑ひを懐きつゝ、寧ろ獨逸系の政治學説を好む傾向があつた。兎に角政治に目覺め、それから政論を好むに至つたのは、一に先生の指導と感化とに由る結果だと信ずる。

余は後に更に先生の命で、塾頭の直ぐ隣席に席を移されたが、此室は年長の人々のみで、一向惡垂れる餘地がなく、余も勢ひ讀書に耽くる外なく、毎朝家に歸つて朝食を認め、晝と晩との辨當を持參して、塾に寢泊りした。

先生に弟子の禮を執られたものに、清水義敷先生の外、奥畑義平、赤澤常容氏もあつた。先生は漢

詩と和歌とに長ぜられ、殊に詩は余勤めて之を記録し置いたから、先生の歿後、遺稿出版の際、清水先生が原稿を取捨される時など、相當の資料となつた、今遺稿中から其の若干を茲に抄出する。

金鐘兒

金鐘兒々々々、有何不平欲訴誰、切々咽露鳴不歇、通宵聞之我亦悲、驚鈍會苦縲繼厄、轉軻閱來年、半百、一旦見白日青天、衰眼生華髮毛白、西風月下難爲情、起開彫籠任汝行、窮山空谷幽棲好、勿近人間誤一生

梅花

半生春思役冰魂、忍凍千回立小園、欲寄新詩空惆悵、輕煙淡月又黃昏

聞鶯

千囀呼人不止聲、幽窓相狎甚多情、由來窮巷無絲竹、聞汝間關耳始明。

書燈

帳頂留痕幾十秋、寸光常狎讀書樓、西風夜々借君力、照看英雄千古愁。

野馬圖

歎段豈無千里志、不耐槽間奴隸鞭、好是池塘春草上、夕陽暖處自由眠。

採松茸

翠嵐颯々洗俗腸、草鞋踏遍白雲鄉、山中不患無沈麝、松茸經霜到處香。

書懷

漫把筆舌代耕耦、襪線短才羞類狗、名教豈是溫飽筌、一卷聖經糊數口。
唯合忠誠勸少年、寧須齷齪飭他邊、差吾淺拙無多得、每講魯論三五編。

夏日村居

儘醉濁醪籍草眠、薔薇花下日如年、近來頗避人間熱、管領荒村風月權。

新年小集

不須尺寸較輪贏、男子唯應要大成、濟々滿堂俊秀士、他年誰得出藍名。

○

梅ヶ枝にふりつむ時は白妙の

ゆきもかほれるものかと思ふ

御園生の松ふく風の音だにも

きみが千年をいはふなりけり

とひ來すば争で知らまし深山木の

ひとりの咲き散る花のいろ香を

久方の天のかぐ弓はは矢より

うまれ出けんやまとたましい

身のほどは憐れはかなし是も亦

おなじ浮世のひとの子なれど

我が子をはみるにつけても我親の

見ることかたき身をいかにせん

先生を南郊臥龍山に葬つた、その葬祭にも余等門人が當つたので、爲に多く時日を費やして長岡行も延引した、又先生始め二十七士の碑を建てる時も、余は先輩に命ぜられて、東京芝の愛宕下に住居された岡千仞先生の撰文を求めたが、先生の遺稿出版も余亦校正その他の任に當つた。

子供記者、驚ろいた妾の勧め

新聞には余も宿縁ありと見え、曾て新潟新聞（尾崎行雄、箕浦勝人、津田興二、吉田熹六の諸氏が相踵で主筆であつた）に投書し、それが掲載されると、余も心中聊か得意であり、父の朋友なども頻りに激賞されたものだ、爾來余は政治運動の片端にも與かり、先輩の尻馬に乗つて演説などもし、而して之を越佐毎日新聞に通信したが、當時披き封の上に新聞通信と朱書すれば悉く無税で有つた。

余の東京へ出る時、長岡へ一泊すると、大橋新太郎氏が來訪された、その父佐平翁が越佐毎日新聞の持主だから、其使命を帯びて來られたので、中々元氣であつた、東京へ出てからも余は通學の傍ら時々論文まで書いて同紙に送つた。

東京では通學以外、先輩の赤澤常容氏の計畫で時事を評論する雑誌を出したが、發行所を越山秀處有英雄の意味で越秀社と名付けた。併し社といつても實は數寄屋橋内の下宿屋の狭い一室に過ぎぬ、余は赤澤氏の意を承けて執筆し、それを加藤平四郎氏の處へ持參して削正を請けた。加藤氏は當時銀座四丁目角の朝野新聞の裏手に當る三等煉瓦の二階を借りて居られて、余が推參すると、座布団代りに赤毛布などを廣げられたものだ。

赤澤氏は國會開設の熱心な主張家で、その建白書を提出すると共に、太政官の門前で屠腹しようとなされた経歴もあり、志士として多く自由黨と親交があり、數寄屋町内の下宿屋へも小勝俊吉氏などが屢々來訪された。

斯様にして余は相當文筆に縁故もあり、爲に越佐毎日新聞へも入社し得たのだ、其長岡へ往いたのは十月に入つてからだ。

余が記者となつて間もなく、天長節に長岡市の人々が催ふす祝筵に招かれて、會場の小學校に往いた。卓子椅子を引拂ひ、薄縁を敷いて座席とし、御馳走には茶飯の握つたのと、鯖と蓮根の煮付けと

を杉の皮に包んだのに、酒が添へてあるばかりだ。余の隣席には三島億次郎翁が居合せ、種々長岡の事、殊に、戊辰頃の経緯や、士族の自奮やらを話されたので、頗ぶる印象を強めたやうだ。翁は舊藩の家老で、河井繼之助をも輔けた豪傑だが、當時は確かに郡長であられたと記憶する。

當時十八歳の余は、活版部の若い連中、殊に文選部の連中と盛んに角力を取る、勝負を賭けて、負けたものに大八車を引かせ、余はそれに乗つて意氣揚々、市中を廻つたりなどしたので、町の人々は呆れて居たといふ。

冬になると、商家の屋根から搔き落す雪が街上へ山の如く積まれるので可なり高い屋根とスレ／＼となる、余は例の角力を屋根の上でも取つたが、雪に掛けては何としたのか、仲々の猛者で、三十歳前後の連中を仲庭の積雪上へ投倒したこともある。

新聞社は裏一ノ町の角にある大橋家の裏の部家で、編輯局は其二階、活版部は階下で、文選部は編輯に續き、小供連などは大抵土藏の二階を寢所として居たが、茲でも角力を取つて、大黒柱にイヤといふ程突當つたことなども毎度であつた。

大橋家の女中が或る日余を捉へて、妾を持たぬか、宜い女を世話するからと勧めたのには、面喰つて飛び上るばかりだつた、後で聞くと女中先生、余を二十五歳の壯者と鑑定し、毎日小供と共に遊ぶよりも、一家を構へて妾でも持つが宜からうと、親切な考へから勧誘に及んだのだと判つた。

余は今こそ年よりもズツと若く見られるけれど、少時は意外に老けて見えたらしく、大八車に乗つて飛廻るのに呆れた町の人々も、實は宜い年をして途方もない人間だと思ふたからだと聞く。

多くの人々は、當時余を二十五歳位に見て居たが、唯大橋家へ出入する信濃川の船頭丈は、未だ／＼二十歳にもならずと鑑定に及んだ、額に若々しさがあるから、年齢は到底隠せるものでないといふのが彼れ船頭君の哲學であつた。

論文で苦勞、錢湯や雪隠でも

新聞社では毎日のやうに社説を書かされたから、其のため朝の八時か遅くも九時頃から執筆し始め、午後二時乃至三時頃までにヤツと一篇を書き上げる、此間は側目も振らねば、二三の同僚が傍で何か話して居ても、一切取合ふこともせなんだ。

然かもその文章を大橋佐平翁の注意で、中學校の漢學兼文章の教授であつた田中春回先生の訂正を求めることとなつたので、余は雨中でも雪中でも、毎日缺かさず午後四時過ぎから先生の歸宅を見計つて持参したが、後に先生から訂正の必要がないと殊に佐平翁に斷はられたので中止した。

日々の文章には論材がないので、平常其ればかり苦勞にして居た故か、混雜した錢湯で浴中か、尾籠な話ながら、廁でなど往々良いと思ふ考へが浮んだことも少くなかつた。

佐平翁は種々の計畫家で、夙くから北越諸名士の傳記修編を思ひ付かれ、相當材料をも蒐集し置き中には大平某といふ翁の舊友をして筆を執らせ、その若干を新聞に載せられたのもあるが、後に長子新太郎氏と相談の上、其れを余に一任された、而してその文章も今度は漢學塾を開いて居られた高橋竹之介翁の校閲を経ることとなつた。此翁は維新の志士で、精神家でもあり、維新後斷髮令が出ても仲々髻を切捨てぬので、縣令の楠本正隆（衆議院議長となつた男爵で、當時名知事の評が有つた）や、大橋一藏氏（翁と同じく維新の志士で、前原一誠に與みして入獄し、後年同じく彌彦に北越學館を開き、愛國主義で子弟を教育されたが、憲法發布の祝祭當日、東京の和田倉門内で、混雜中弱い老若を救はんとして牛車に轢かれて死去された。其孫の清藏氏は現に島根縣立太田農學校校長として令名が高い）などが翁を酒で盛り潰し、楠本さん自身缺を持て翁の髮を切つたといふ逸話もあり、門下生には公使の堀口九萬一氏等もあり、白哲美髯の堂々たる仁だが、極めて古風な學者だから、河井繼之助の傳記中、余が瑕瑜共に掩はず、赤裸々にその人物を描き出すとて、夫人の髮を擱んで引摺り廻したこゝとや、遊廓で亂暴したことなどを記した節々をば、總て故人のためその非を諱むといふ筆法で抹殺された。又本傳蒐集のため、余は屢々三島億次郎翁その他の古老を歴訪して、長岡の維新前後の事情を窺ふに於て得る所が少くなかつた。

北越名士傳は、佐平翁の名で出版された。これまで余は大橋家に寄宿して月給七圓宛貰つて居たが、名士傳の功で一圓を増加された。此頃のことであるが、大橋夫人松子刀自がシミムと余に、君も五十圓か七十圓の月給を取るやうになつたら安心だがなどは言はれたこともある、今にして想へば幾んど隔世の感なきを得ぬ。

文章では頗る苦心したけれど、實に習ふより慣れろで、追々筆の進みが早くなつて、四時間となり、三時間となり、その後は朝食前に論文を草し終り、食後からは一切の編輯をも引受けるやうになつた。殊に新聞社屋の改築中などは、夏であつた故もあらうが、拂曉四時頃に飛起き、普請場の明るい處で五時頃までに書き終つたこともある。

佐平翁は經濟には餘り上手でなかつたと見えて、新聞は餘程缺損續きで有つたらしい。然るに新太郎氏は店の片一方を小さいさく仕切つて書籍店とし、相當知識的な新刊書の外、小説類や、何でも日本紙へ活版摺りの繪入小説（多くは古い稗史で表紙は彩色で芳年などの筆と覺ゆ）などを商ふて相當に利益を得られたやうだが、その以前、東京の同人社（中村敬宇先生）の塾や、新潟の師範學校を半途退學してから、諸處を行商もされたさうで、余の郷里村松や、その町長などのことも能く知つて居られた。後に佐平翁が新潟へ支局を設けて自身それに當り、新聞經營を新太郎氏に一任されてからは、經濟方面は却つて著るしく改善されたやうだ。

余が編輯を引受けるやうになつてからも、社會部編輯と助手が二人で、而してその二人とも校正ま

で引受ける。活版部では、組み方は幾んど大部分佐平翁の次男省吾氏（後に東京堂の主人となつた）が遣つて居られた、その規模以つて察すべしだ。

校正も活字の組んだのを直接に訂正するので、誤字があると、別に活字を持って来て、ピンセットで校正者自身植替ゆるといふ原始的な方法で、後に山本萬歳といふ以前東京の朝野新聞に居た人が来て、羅紗など挿んで假摺りを作ることにしたけれど、結果が思はしくないので、矢張原始的に引戻した。

此助手兼校正の小池盛吉郎といふ仁は、後（新聞が大橋家の手を離れて）も引續いて在社し、竟に重役となり、永い間営業部長もして居られたやうだが、中々の精勤家で、余から英書を學び、リーダーを卒へてグラムマアまで上げられた程だ。

大橋翁筆禍入獄、長岡士族のエラさ

大橋佐平翁が筆禍で入獄されるといふ椿事が端なくも發生した、明治十八年新潟群馬兩縣界の清水嶺開修の工事竣り、其九月二十八日時の内務大臣山縣公が開通式に臨場するといふのを、彼の山本萬歳が無益の通路であると散々にコキ卸した、余は餘り穩かでないから一應注意はしたけれど、佐平翁が面白い、構ふものかとその儘掲載させられた處、後に長岡地方裁判所から官吏侮辱罪として告發された。

此頃は言論の取締が矢釜敷く、佐渡の或る文學士が推古女帝を孱弱と評したとて、其論文を載せた新潟日々新聞が不敬罪に問はれて大分に世間を衝動した。不敬罪では當時の新聞紙に取つて最貴重な印刷器械全部をも没收されて、實に致命傷となるからだ。

斯る場合に越佐毎日新聞が官吏侮辱（然かも大官の内務大臣を）で裁斷され、而して署名者たるため社主であり社長である佐平翁が直接處罰されたのだから、一般からも頗ぶる注目されたが、結局二三ヶ月の輕禁錮といふ體刑を受けられた。

去れば翁は春寒極めて料峭の三月に、新潟の監獄へ收容された。平生ツマヌことにも氣六ヶ敷屋の翁だけれど、斯る場合には却つて快調で、元氣で、露ほども惡びれた態度がなかつたのは、彼の論文を承認された故もあらうけれど、兎に角勇氣ある翁の本色は見上げたものだ。

斯くて五月北越では春風飈蕩最も人に佳なる好期節に出獄された翁は、中々の上機嫌であつて、獄中飲みたくて堪へられなんだ煙草を何よりも出監直後に吸ふて見たが、一二服で早や眩迷するなど、語つて居られた。

この前後に井上圓了氏が大學文科を卒業されたが、哲學專家といふので、其歸郷中、余は佐平翁の勧めで論理學や心理學の講義をも聽いた。佐平翁は又佛教にも趣味深かつたやうで、當時小千谷に居た瑜珈教師を自宅に招じて原人論、起信論などの講義を聽かれたものだ。

松島剛氏譯のスペンサーの進化論、有賀長雄博士の社會學なども、余は好んで耽讀した。それには新太郎氏が別に開いて居られた書肆があつた爲、讀書資料には頗ぶる便利で有つた。

長岡は維新の折、河井繼之助の宰配で官軍を悩まし、一旦攻落されてまた回復し（此時官軍の總大將格たる西園寺公は、柏崎の本營から遠く高田まで引揚げられたが、其際軍用地圖なども卓上に措かれたまゝであつた、但監軍の山縣公が踏止まつて大返しに返して再び城を攻められたと、後に陸軍編修の某氏から聞いた）ながら、力盡きて再び落城した程だから、其受けた兵火の洗禮は實に痛ましいもので、城跡は唯若干の壕と四周の土壁を残したのみで、後に此城跡は遊園地とされ、大弓場などがあり、余も往々射を試みたが、何の拍子か第一發で金的に中てたので、懸賞として双子縞一反を得たこともある、併し他の箭は地を迂る。上走るやで折角の名手も散々となつた。唯存外な剛弓を曳くと、舊士族の老人などが不思議がり、余の腕を見て、肱が太く、且普通人と反對に外の方へ曲つて居るので、或は此が爲めかなどと評判したこともあつた。

長岡藩主は朝敵として一切の公私財産を没收されたので、藩主と同じく困り抜いた士族連も、聊ながら秩祿公債を得たを幸ひ、毎月一戸（然かも有志）に付十錢づゝ醜出し、總計六七十圓とし、其れで舊藩主の生活を支へ、尙ほ嗣君（今貴族院で勢力のある牧野忠篤子爵）の慶應義塾に居らるゝ學資を輔けた。物價が廉で、一圓で白米幾俵（四斗五升俵）を買得た時代から、今にして考へると隔世の感なきを得ない。

當主は忠敦といひ、暢氣な貴公子で、余も小金井權三郎氏に伴はれて、一日推參したことがあつた。其時飼猫が主人公の嬰兒を引ッ搔いたから、流罪に處すべく箱に入れて信濃川へ流して遣つたなどと話し居られたが、書が御自慢で、何かといふと揮毫の扇面などを賜はつたことが一二度に止まらぬ。

士族連の感心なことは、育英の必要を夙くから認めて、窮乏中より若干の資金を出し合ひ、有爲な子弟に修學させた。今の小野塚喜平次博士（確か大工の子だと記憶する）や、小金井良精博士、日石社長の橋本圭三郎、根岸鍊次郎、波多野傳三郎の諸氏も皆其れで、彼等は業成つた後、收入の一割を會に納め、それで絶えず事業を繼續し往く約束で、東京でも其ため春秋二回會合し、併せて郷人の親睦を重ねるが例で、余も後年上京中、佐平翁に伴はれて、銀座一丁目の松田で催ふされたその會に列したこともある。

士族は勿論、商人も亦復活に銳意した、殊に商家一般に質素を主として營業に努力し、活躍の逞しい三條町の商人と競ふて努力するなど、同じ國でも新潟や新發田とは著るしい相違があつた。

遊獵と狗肉、暢氣な無責任振り

遊獵と狗肉、暢氣な無責任振り

余の特性か、其れとも年若であつた爲か、今から思うと驚く程の暢氣で無責任であつた、或る時フイと赤澤常容氏が鐵砲を肩にして來られた、當時余は表町の横丁で、林といふ篆刻家の二階に下宿し居たが、警察署で野犬狩りをしたと聞き、その肉を欲しいと申込むと、警察官も氣が利いて居て、夙くに自身達で肉を平らけつゝあつたものの、公然無料で拂ひ下けることは規則上如何といふので、余は新聞社の外勤員で松井緑といふ老人に金拾錢也を持參しやると、やがて美しい紅肉一貫匁近くを届けられたは宜いが、下宿の女將は牛肉でも鰹鱈を禁ぜぬのに、犬肉など見るからに胸が悪いとて、一切手も觸れぬから、余は餘儀なく本箱の蓋を組板とし、自ら肉をナイフで切りつつ鍋で煮た。鍋丈けはドウやら女將が始末して呉れる。

此下宿で赤澤氏と暫らく同居し、毎晩のやうに犬肉に舌鼓を拍ちつゝ盃を舉げた。或る夜餘りに酔うて、階下の厠まで往くのが面倒だとして、音のせぬやう窓際から屋根へ瀧を流して口を拭つて居ると女將から密かに抗議が來た。曰く、尿が柱を傳はつて臺所へ流れ込む、然かも其處に在る米櫃の中へ浸入した、雨とも思へば悪臭がある、ドウか其れ丈けは中止して貰ひたいとのことで、余は流石に凹垂れざるを得なんだ。

その中に櫻や菜の花が満開で、春色駘蕩となつたので、余は赤澤氏が舊藩主から借用し來つた銀象嵌入りの二連發銃を肩にし、二人で郊外へ遊獵した、その面白さに浮かれ／＼て三里餘先きの傍所村といふに行き、茲で郷人の中村某氏が小學校長をして居るその家へ泊り込み、翌日は更にその先きの見付町の矢張校長の家で泊り、そのまゝ赤澤氏と共にズル／＼郷里まで歸つた。

併し此遊獵中、一種の鷗（土地でハマネコと稱す）を撃つと、鳥群が哀鳴しつゝ其上空を翔け廻るのや、樹上で嬉々としてコーラスを高調して居た鳥が、一發の銃聲と共にバタリ地に墜ち、音一つせぬのを見ては、流石に熊谷蓮生坊の發心こそしないが、人間の勝手な慰さみの遊獵に、生物の命を斷つのは不仁の極だと考へて、それ以來非遊獵主義者となつた。

歸郷後更に赤澤氏のため、或る國事上のことで資金を作るべく余單身で新發田に赴き、取敢ず高橋旅館へ入り、旅館から三浦家を往訪した、庭上に天を摩する老松が亭々として聳えて、家も堂々たるものであり、三浦氏は身長も顔も恐ろしく長い老人で、要談こそ目的を達せただけけれど、酒肴を供へて大に饗せられたが、郷里から新發田までの途次、雨を冒して股まで拍たれた爲か、翌日迂回して新潟に出で、親戚の清水先生（義敷翁）の家に止宿中、手足が甚だしく痒くなり、急に郷里に歸つたら眞症の疥癬と判明した。依て種々の手當をしても全治せぬので、毎曉早く辨當持參で二里餘を隔つた温泉（實は冷泉を沸かしたのだ）に往き、日中の暑さを避けて夕刻家に歸つた。温泉といへば一寸結構だが、實は田の畔に藁葺きの丸で乞食小屋の如きものを掘立造りに作つたので、疊敷物なども薄縁りか菰である。其れでも余以外に別段客もないから、徐かに讀書したり思索に耽くる餘裕があり、

近來に全くノンビリと愉快に感じた。

斯くて秋風が吹いて後、久し振りで新聞社へ歸つたが、別段同僚から小言をいはれるでもなく、大橋翁等一家の人々も何一つ言はれただけで、心中では余の暢氣の途方もないことと、無責任の甚だしさには大に呆れ返つて居られたであらう。

還つた丁度その夜、同僚が編輯局で貉鍋を突つて晩酌して居た。貉は至上の美味だと聞いては居たけれど、三年の古疵も再發するといはれるから、疥癬病後大に戒むべしだと同僚も注意するので、強ひて食指の動くのを控へた。その後松江で貉を獲たけれど、餘りに格好が醜惡なので、種々の調理法など聞合せ試みたけれど、別段珍重するに足らぬ。獸肉では何といつても牛肉が第一と悟つた。

併し不幸にして疥癬は却つて再發した。同僚の説では、硫黄と赤豆の粉とを等分にしたのを煉り固め、それを石鹼代りに入浴時に患部へ塗り込むが良いとして、殊に同僚の家でそれを調査し呉られたので、余は毎夜それを錢湯へ持参した。それは相當の藥品のない場合の参考にもと敢て附記し置く。

此頃或る辯護士が記者を志願とあつて入社されたが、先づ雜報を書くのに、或る家の女中が信濃川の畔で洗濯するとして、誤つて水に陥つて溺死した事實をば、意匠慘澹、半日以上掛つて十行内外に書き上げられたのを見ると、末に嗚呼悲哉と結んである。余はシミ／＼感じて、その仁に、貴君は到底、新聞記者たる天分が備はつて居らぬと思ふから、思ひ切られた方が宜からうと忠告に及んだら、

間もなく退社された。

饒舌のお稽古、柳原伯愛妓の追分節

長岡にも種々進歩的な風氣が吹込んで来て、土屋といふ年齒こそ余等の父親並みだが、中々の新らしがり屋の醫師や、大橋新太郎、渡邊藤吉、野本恭八郎、太刀川藤十郎、中村文吉などいふ人々に余も加はつて、三夜會といふを組織し、毎三の日に會合して討論會を催ふし、それで大に辯論の稽古をすることとした。

中々熱心で、始めは學校の一室を借りて會場に充てたが面白く参らぬ。料理屋では高聲に論じ合ふ譯には往かぬといふので、會場新築を思ひ立ち、粗末ながら五六十疊の廣さある一會堂を作り上げ、茲で思ふ存分に互ひに饒舌り捲つた、併し商家の人々多い故か、流石に一回も公開演説會は開かなかった。

渡邊氏は後に寶田石油會社を組織し、その社長になられた材物で、一見識もあつた。長岡方面へ鐵道を布設すれば、多くの利益は擧げて有力で敏捷な他府縣人に奪ひ去られるといふ保守論者で、非鐵道主義を以て頗ぶる討論を戦はされた。

野本氏は後年議會へ富士山を國立公園にするといふ請願書を提出し、頻年倦むことなく之を繼續さ

れた。恐らくは我國で國立公園の最初の首唱者であらうが、一方また頗ぶるの奇論家で、脱線することも少くはなかつたけれども、本來の家柄でもあり、事に熱心なので人に敬はれたものだ。

此前後からまた松壽軒といふ料理屋で、新たに洋食を始めたが、餘り繁昌せぬので、矢張三夜會などが中心となつて後援の意味で毎月二回、會費七拾錢宛の持寄りで洋食會を催ふした。茲へは井上圓了學士なども參會されて、彼のコックリといふ一種の催眠術然たることを皆に傳授されたりした。

また東京から時事新報の記者として渡部治氏が書肆の平野晋氏（東海堂主人）と同行で來遊されたことがある。渡部氏は玲瓏たる才子肌の人で、後に二三の新聞を經營されたが皆思はしくなく、最後に、大阪毎日新聞を引受けて、茲で始めて大に成功されたのだ。後年余等の尊敬した渡邊己之次郎氏は實に氏の養嗣子だ。

余は渡部、平野兩氏の東道となつて新潟へ赴く途次、三條に立寄り、土地の二三有志から信濃河畔の樓で午餐の饗を享けた。新潟では新潟新聞の主筆市嶋謙吉氏（春城）や、我大橋佐平翁等と行形亭で渡部氏等の歓迎會を開いた。當時翁は新潟の西堀前通へ越佐毎日新聞の支局を設け、夫人松子刀自と共に住つて居られたのだ。

その後市嶋氏と栃尾町の政談演說會で同席したことがあつた。市嶋氏は自分の是れまでの經驗中、終生忘れ得ぬことが三つある、一つは初めて富士山の頂上へ登つて日の出を觀たことで、二つは妻を娶つて初契りを交はした時であるなどと手放しに惚け、今一つは茲で諸君に逢ふて自説を述べることなどと演說されたものだ。

此時余は栃尾で名高い常安寺に詣して、上杉謙信の畫像や、その遺物たる鐵製の鎧などを一覽した。此寺は謙信の幼時幾年間か潜伏して居て、兵學などを學んだ處で、謙信禮讚の余に取つては極上の興味が多かつた。

柳原前光伯（二位局の實兄で、血筋から申せば大正天皇陛下の伯父君に當られる）が或る年佐渡へ渡つて日野資朝卿の墓に詣でられたが、卿は實に伯爵家の祖先であるゆゑ、兼ての期望で展墓されたのだといふ。伯爵當時の話に、古書に記されてある言葉の中、如何なるアクセントか判らずに、久しく疑問として居たものが佐渡で登山の際、駕籠屋同士の話し會ふ中に右の言葉があり、測らずもその音調を識り得たが、佐渡の如き絶海の孤嶋に於て、却つて古い言葉が残存されると、伯爵は餘程興がつて居られた。佐渡には順德帝の行在所もあり、絶えず堂上公卿なども配流されて來たから、思ひの外の古語や古俗もあるのであらう。

當時新潟で伯爵の寵を得た藝妓に小稻といふのがあつた、成程月卿雲客にでも好かれそふな容貌で、上品ではあり、且至つて美音家であつたが、伯爵と戀々依々の情禁せぬためか、新潟より伯爵を送つて長岡に來、柏崎に往き、更に直江津まで行きてヤツと別れたといふ、頗ぶる詩的な艶話もある。

此小稻、後に東京に出で、築地河岸の柏家の跡へ待合を開いたが、余はその甚だ老いたので忘れ居たが、名乗り合つて大に驚ろきつゝも、病後といふ小稻女將が、自ら彈き自ら追分節を唄つたので、無量の感慨に打たれて、半ば白樂天琵琶行の想ひもあつた（彼女は更に待合を山城町河岸に移したとまで知て居るが、後の消息を知らぬ。年齒は余より一二歳上だ）

第二 博文館の創立

發祥地は本郷弓町、大家論集

大橋佐平翁はその後新潟の支局を引上げられたが、長岡も餘り面白くないとて、新聞の經營一切を新太郎氏に一任して上京された。是は主としてその長女時子嬢（後に乙羽夫人）に新しい教育を受けさせる爲と云ふので、嬢を駿河臺鈴木町にある米國婦人經營の女學校に入れ、翁自身は日本橋區吳服橋外で小金井權三郎氏と同じ下宿屋に起居し、時々夫人松子刀自にも上京させたりなどして居られた。何か計畫好きで寸時も靜止するを欲せぬ翁は、徒らに新太郎氏からの送金のみによるを潔しとされぬ上、折しも新らしく女子教育の氣運の勃興するのを見込み、婦人雜誌を發行すべく新太郎氏へ相談に及ばれた。

新太郎氏は其頃専門雜誌の數は相當あるけれど、その範圍が狭く、學者の研究した價值ある各専門の議論はあつても、一誌一二篇に止るのみか、雜誌代も亦思ひの外高いから、若し多くの雜誌にある各部の議論殊に名論佳作を一編に編輯したならば、定めて廣く一般に歡迎されるであらうと考へて居

られたので、翁と數次内議を重ね、兎も角之を實行すべく一度上京されるに決し、余も同行することとなつた。

時に三夜會の御饒舌仲間にも、商用旁々上京するのがあり、一行總て五人で出發した。いふまでもなく三國越（當時新潟から群馬を経て東京へ達する本道）を執ることとし、皆人力車に打乗つて、第一夜は松子刀自の生家のある關（南魚沼郡）へ泊り、新太郎氏は母堂の實家上村氏へ、余等は旅宿へ泊り、翌朝は湯澤の高橋家へ立寄つた。同家主人は松子刀自の實弟で、新太郎氏の弟省吾氏が其養嗣子となつて居られる。同氏は余より一歳下で、殊に別懇であつたから、種々相語つたが、冬期には農夫が繁忙期を終つて他縣へ出稼するものが多く、彼等の旅泊には大飯を平らげ、餘つた副食物は皆携帶の油紙に包んで持去るから、旅宿として損失はせずとも利益は少いとのことであつた。

それから二居峠といふ嶮岨を馬で越すことにした。名にし負ふ、饒舌の連中だから、惡謔百出、底止する所がなく、果ては年若い女馬子までを盛んに擲擄するので、彼女等も意地になり、ワザと馬を谷側近く歩ませる。見下せば谿底千仞で、危険な下り阪を鞍を掴みて居ても一歩く、危いので、一同流石に凹垂れ、悲鳴を擧げて大に謝罪し、ドウチャラ無事に峠を越し得た。時に明治二十年の五月下旬である。

當時汽車は郡馬縣高崎市から東京まで通ずるに過ぎなんだ。汽車中で王子驛から上野驛まで要する

時間に就て賭け、負けた者が出資して牛肉をバク付かうと決したが、困るのは新太郎氏と余とだ。佐平翁が待構へて居られる際、途中牛肉會でもあるまい、といつて外すも残念と端なく一策を思ひ付き降雨のため川々が出水したので、汽車が延着したと胡魔化すことにした。餘りに淺薄な計略ながら、當時交通不便で諸事分明せぬから、斯る惡計も容易に行はれた。

斯くて牛鍋會散會後、一行と別れて本郷弓町の楠のある邸内に僑居中の佐平翁の處に着いた。流石の佐平翁も途中出水説を眞に受け、それは困つたらうなど頗ぶる同情された上、機嫌克く牛肉を御馳走されたには、口を拭いて居た余等もウンザリして且恐縮した。

此弓町の僑居こそ、路次を入つた小さい陋屋で、家賃は驚ろく勿れ、僅かに三圓であつた。然かもこれが實に博文館の發祥地であるのだ。

翁は其姉の第二子山本留次氏を庶務兼會計掛とし、内山正如氏（幻堂）をも家に置かれた。山本氏は後に博進社長となつた程の若年ながら思慮深い才物であり、幻堂は余より一歳上の出家人で、以前は乙村（北蒲原郡）の乙寶寺といふ巨刹の雛僧であつたが、其住職瑜珈教如師が、現代の僧は英語位學んで廣く世界の知識をも探らねばならぬとて、資を供して中村敬宇先生の同人社へ入學をさせられた處、幻堂は北畠道龍師の宗教改革論などにカブレ、盛んに教如師に意見を申送ると、師から宗教の改革問題などは十分學問を修めての上のことだ、今は一意専心英語を學べとの返答なので、幻堂不平に

堪へず、到頭師を離れて塾を飛出し、教如師とも別懇な翁の家へころがり込んだのだ。

斯くて是れから彌々新太郎氏發案の雜誌を出すこととなり、各雜誌の専門に關する論文を蒐集し、之を日本大家論集と命名することとし、卷頭に當時の名家の寫真石版を掲げることとした。資本としては諸雜誌を買集めること、廣告するなど丈け位で、高の知れたものだから新太郎氏の主張で、大廉賣主義を執り一冊確か十五錢といふ世間意想外の定價とされた。而して印刷と石版とは共に京橋區宗十郎町の國文社（後に大阪毎日新聞の専務となつた桐原捨三氏が之を管し居られたと覺ゆ）に托した。

また全國各新聞から集めた論文（皆各社に依頼して寄贈を受けた）を纏めて日本之輿論といふ單行本をも發行した。大家論集發行が其年六月十五日で、發行所を時の政治家として一代の聲望を負ふ大伊藤公に因み、兼ねて文運にも貢獻するといふ意味で大橋氏父子は博文館と命名された。何しろ大橋氏父子、山本、内山と余と僅々五人で一切を遣つたのだから、多忙さは想像に餘りある（數日の後、越後の青年で新保といふ人が入館した）

初度の大成功、物價の安さ

日本大家論集は名詮自稱、總て専門家の研究された名論卓説を満載する、而して價は十五錢といふレコード破りだから、割れるやうな人氣でズン／＼賣れ行く。現に初版は一千部であつたが當日夕刻には已に追掛けて注文があり、二版一千部も瞬く間に賣れ切れ、三版四版と追掛け／＼面白い程賣れ行く、随つて利益も多かつたことであらう。

當時の雜誌は大抵團體か何かの機關であつて、皆専門家が苦心研究した結果を發表するので、論文といへば一雜誌に一篇か二篇に過ぎぬ、それも四五十頁か高々八九十頁で、定價は安くも三十錢以上四十錢五十錢で、専門以外の一般民衆には甚だしい不向きなものであり、賣行きも亦微々たる、其であつたこと勿論だ。然るに大家論集はその反對で、論文作家には別段原稿料を拂ふのでもなく、其所載の雜誌から切取る丈けで、手間も何も要せぬから、紙數も多く、内容も豊富で、然かも從來にない廉價なのだから、盛んに賣れ行くのも當然だ。而してその利益の多かつたことも勿論であらう、況んや卸値を廉にして、成るべく賣捌店に多く利益を獲らせるといふ上手な商賣法を採られたをや。

此大當りで大橋氏父子は大滿悅の上、弓町の路次奥の一小屋では何事も出来ぬとて、取敢へず日本橋區は本石町三丁目の角屋敷なる松山某といふ醫師の隣家へ引越された。茲は大通りに面する前店こそ二階建の木造家屋だが、後部は全部土藏造（同じく二階建）である、而して驚ろく勿れ、家賃はタツタ八圓であつた。

後年博文館の引越した本町三丁目の家は、土地が三百坪で、全部幾棟かの土藏造りでありながら、地所家屋とも抵當流れて安田銀行の物となつたのが、廣く大掛りで容易に買手も借手もなく、安田家

でも持餘して、一萬圓ならば悦んで賣るといふので、博文館が買入れられたのだ。是れは確か明治二十四五年頃のことと記憶するが、以て當時物價の安さを推知されよう。

弓町から本石町への引越しに、大橋氏父子は勿論、山本、内山、神保及び余と、それに時子女史と山本氏の姉さんなどと祝ひの蕎麥をパク付いて居る時、余は最早用もないからと長岡へ歸社する決心をした。佐平翁は余を留め置かれたい意向らしかつたけれど、余は新太郎氏とこそ進退を共にしようと、獨り先んじて歸ることにしたのだ。

今度は唯單身汽車で前橋まで行き、その日は湯檜會といふ越後に近い山間の一驛に泊り、翌日名にし負ふ清水越を踏へた。折しも六月下旬ながら、谷は一面積雪に埋まつて居る、下りには殊更に間道を取つたので、木を攀ぢ崖を傳はりつゝ、午後三時頃に越後の六日町驛に着き、佐藤旅館に宿つた。宿錢は最上拾錢といふ處へ、茶代として二拾錢札一枚を出すと、當時縣會議員で錚々たる、然かも參事會員たる主人公が袴を着け、銚子持參で御禮に罷り出て、縣政などに涉つて種々の話をされた。これもその頃物價の安い一例だ。

六日町から長岡までは、魚野川信濃川と一串して早船で下つた、東京より歸省毎に數次茲を通過した經驗はあるが、此早船は四丁櫓で、殊に折柄の翠色滴るばかりな山々の間を進み、殊に宿々への發着毎に、船頭が聲を揃へて歌ふ舟唄の亮々たる美聲が山に響き水に答へる處、正さしく「欸乃一聲山水綠」の趣があるので、當時坐ろに惡詩がある、依て一二訂正して茲に記す。

群山萬壑送輕舟。欸乃聲々翠欲浮。水合信川々勢大。挂帆如箭下奔流。

余より十日程遅れて新太郎氏も歸岡されたが、佐平翁は次で素志の如く「日本之女學」といふ婦人雑誌も刊行され、引續き「日本之法律」「日本の實業」などいふものをも發行された。孰れも相當な成功の曙光にあるので、新太郎氏も之を見て、彌々出京の上、出版事業の經營に手を着くべく發心された。當時の書籍は概して高價で、一般民衆には幾んど不向である、されば數でコナス主義で廉價發賣とすれば、一は社會公衆へのサービスとなつて文運にも裨益し、一は自家成功の利益もあると見られたことは勿論だらう。而して之れが抑も博文館の基礎を築き上げたのだ。

それで越佐毎日新聞を早稻田専門學校の第一期卒業生で、改進黨員たる川上淳一郎、廣井一の兩氏に讓渡し（後に改名して今の北越新報となつた）家屋はそのまま、賃貸する約束を結び、余以外の編輯員等は全部當人同士の希望のまゝ、後繼者に引渡し、斯くして明治二十一年三月雪を衝いて長岡を出發された。

同行は新太郎氏の夫人と當時二歳の長男進一氏などで、雪中徒歩で旅を重ね、長野市からは圓太郎馬車を雇ひ、碓氷峠の九十九曲の嶮をも降り、翌日坂本驛から竣工したばかりの汽車に乗つた。

其頃本石町三丁目の家は博文館の店と編輯局に充て、佐平翁は本町一丁目（當時は未だなかつたが

今日の日本銀行の向ひ側)の路次奥で、門構への可なり宏壯な土藏造り(三棟連続して家賃は十二圓といふ廉價)に居られたが、後に編輯部丈けを茲の二階に移し、而して店の方を新太郎氏等の居處とされた。(後に本町三丁目へ移るまで、此店の奥へ又一戸を借りて編輯局とされた。當時は園田資四郎といふ早稻田出で後に佐賀縣會議長となられた仁や。土佐人で今は名古屋に住む詩人の服部轍氏なども編輯局員として余等と毎日執筆し居られた)

第三 雪國の特色

雁木造、珍な藝妓姿

明治二十一年三月の上京は、余に取て越後との別れで、爾來歸省その他で郷國へ戻つたことあるのみで、三十有餘年は總て帝都で過したから、茲に雪國の特色を録し置かう。或は他の雪國都市町村の参考になるべきことも絶無であるまいから。

年を追ふて降雪量の減することは世界的だと見え、外國雜誌などにも、加奈陀や北米合衆國の北部等では、人口の繁殖するに伴ふて降雨降雪も減じ、又寒氣も漸次に弛むことを特記しあるが、余の長岡に居た頃は、一夜に二尺三尺も雪の降り積むことは珍らしくなかつた。其れより以前郷里に居た頃、冬時は藁を以て編んだ深靴とカンヂキとを穿ち、毎朝立關口から道路まで、又道路は我宅地の前通りを數次往返しつゝ雪を踏み固めて、以て人の往來に便するのが常であつたが、近年は左様のことが稀れで、極めて大雪といはれる時に限つて、一夜に二三尺も降るに止まり、一體に降雪量が減じたやうだ。それでも長岡の雪は中々多く、而して瓦葺よりも石屋根が多かつた。石屋根といふのは屋根

上一體に木羽こは（杉板を薄く短冊形にしたもの）を並べ、之を抑えるため薪同様の木を横たへ、此木を支へにして直径五六寸位の石を二個つつ並べ、而して屋根の四周をば風返しと稱する板で圍ひ、頂上には杉の皮を厚く重ねるのだ。柱や梁は頑丈だけれど、積雪が多いと襖障子の開閉が容易でないから、セツセと屋根の雪を掻き落さねばならぬ、掻き落さねば或は倒壊を免かれぬ危険さへあるからだ。

此搔落す雪は、農家や士族屋敷の如く家屋の四周に餘地の多い處は宜いけれど、其れのない、又有ても狭い町家では、裏地面や中庭の外、街上へ落す外はない。随つて長岡の街上は此搔落す雪が山と積まれ、殊に上から上からと投げ落されるから、雪は堅く積つて、而して其高さも二階屋根とスレスレとなることも珍らしくない、そのため街上が全然通行不可能となることは勿論だ。

良くしたもので、斯る都會の町家には雁木と稱して軒先きを狭くも六尺、廣い處は八尺も街路へ向けて架け出し、一間乃至一間半隔てに柱を建て、屋根を支へ、その柱と柱との間には、冬期毎に下半部を板で閉ぢ、上半部を明り障子とする、然かも此明り障子も積雪に閉ざされて、雁木下でも、雁木に續く店でも、陰鬱で又頗ぶる薄暗いが、街上を通る人は皆此雁木下を通行する。

雁木下を通行するものは、雨雪の時でも傘などの必要はない、而して茲から直に店へ腰掛けて買物をする、特に雪中街上の往來が杜絶しても、此雁木下があるため便宜實に此上もない。

但此方の側から向ふ側へは往けぬゆゑ、處々に積雪を穿つて墜道やうのものを作つたり、辻々では

雪を削り取つて、彼此往來し得るやうにして置くこと勿論だ。

極寒中は此雁木下が凍結して、動もすれば通行者は滑りころぶ危険があるから、恰かも倫敦や紐育やシカゴの如く、茲へ灰などを撒くけれども、尙ほ危険を免かれぬ。去ればお洒落の藝妓などさへ下駄では危いとて、裾を高々と捲り上げ、友禪の襦袢などを閃かしながら、藁でスリッパの如く編んだ藁靴といふのを穿いて、バサリ／＼往く風趣など、頗ぶる珍なものだ。

又郊外の田舎道は、橋で通行するけれども、長岡の如き市街地は徒歩以外絶対に交通が出来ぬ、馬とても同様だから總て市外で仲繼せねばならず、雪中交通機關の障害は甚だしいものだ。

長岡で街上の積雪を見渡すと、宛ながら蜿蜒として山脈の連互するやうなものも奇觀だが、此上を犬が往來し、ヒョイ／＼二階屋根へ飛上がるのも、他地方では多く見られぬことだ。北越雪譜に、坐頭（盲人）が引窓から臺所へ落込んだとあるのも、決して架空談でない。

雁木は長岡高田兩市の如き大雪地は勿論、小千谷、六日町、輿板、今町、見付、三條、加茂、村松五泉、新津、津川、村上等の町々にもある。唯新發田、中條、柏崎にはない。新潟市も最近雁木がなくなつた。

人力車の車輛を取去り、替りにソツクリと橋を付けて、雪中を往返するものもある。或は駕籠の擔ひ棒を取去り、之を橋に乗せて、その内には火鉢安火などを入れ置き、客を悦ばせるものもある。人力車

夫が橇曳きに早代りして、前から引き後から押して疾走するのも奇觀且便利である。

又海岸に遠い小都會の魚屋料理屋では、店の床下や、物置倉の底へ、深さ一丈にも餘るだけ掘下け、茲に雪消え以前に雪を詰め置き、その上に魚類を並べて貯藏するが例で、雪が融け往々に従つて穴が深くなると、其れへ梯子を架けて上下する、斯くして盛夏中でも魚類を貯藏するから、シケで沿海方面で魚類のない時でも、却つて肴が豊富だなどいふ奇談もある。

明治二十年頃までは、人造氷のないのは申すまでもなく、函館の龍紋氷も越後方面には來なんだから、盛夏には右の肴屋の雪や、深山幽谷に消え残つて居る雪を持つて來て、それで渴を醫し、或は藥用にもした。是れ亦雪の利用法の一ツである。

第四 博文館時代

文運進歩へ奉仕、版權條例の制定

博文館の出現は、確かに我文運に大影響があつた、殊に出版界に大なる衝動を與へた。結果に於ては甚だ良好で、一言で盡せば確かに文化の向上に大貢献をした。是れまでは書籍も雜誌も甚だしく高價で、或る種の階級に需要されるに止まりて、一向に民衆的ではなかつたのに、博文館が従來のレコードを破る大廉賣主義を執つた爲、書籍も雜誌も汎く民衆に讀まるゝに至つたから、其れから齎らす知識普及の効果は決して没すべきでない。

去れば博文館自身も亦着々成功して少からぬ利益を得たので、同業者の迫害を蒙つたのは勿論、それ等と關係のあつた著作者からの反感を招いたのも、亦餘儀ない次第と謂はざるを得まい。

殊に新太郎氏の上京後は、雜誌以外、書籍出版に手を着くることとして、其陣容を新たにすると共に、第一に發刊したのが當時公布されて、是れより將さに實施されんとする市町村制度そのものの解釋書で、正さしく時代の最大必要に應じたものだ。著者は坪谷善四郎氏で、是れまでの學者の如く、



故らに銜學めかさずに、常識一點張りで、殊に平明懇切に解し易く註釋してある上に、例のレコード破りの廉價であるから、羽の飛ぶ如く賣行くと共に、著者の名聲も段々廣く知られた。

坪谷氏は余と同じく早くから越佐毎日新聞を通じて大橋氏と縁故があつた。其郷里は余の家郷と山一ツ隔てた狭口村(南蒲原郡)で、氏は農耕の傍、加茂川で木綿も晒せば、また大澤越といふ谿間から出る切石の運搬なども手傳ひつゝ、讀書好きで勞働の間でも手に卷を離されなだのが、天性洒落で、滑稽文を善くし、團々珍聞などへも投書し、越佐毎日新聞へも通信し居られた。余は長岡から歸省の途次其家を訪問した際などに、田圃から泥足のみ、歸つて來られ相語つた程だ。中々の能辯家で、音聲も島田三郎氏と能く似て居られたが、今の如くに變られたのは病氣のためだ。此病氣のため、氏は草津の温泉へ行くとして、余を長岡に訪はれたが、其際全癒するを待つて東京で學ばれるとのことであつたが、其早稻田へ入學されたのは、隣村の富豪鶴巻氏(此家からは工學博士も出で、博士の弟で余の實弟英次郎と朋友の某氏は、後に坪谷氏の監督を受けてその矢來町の宅から通學し居られた)から學資を供給したので、博文館創立直後、即ちその學生時代から編輯に與かり、卒業後は全身を擧げて館務に努力された。中々精勤家の上、如才なく立廻られるので、四方の交際を引受け、學者間にも往返し周旋して、多くの難問題を解釋された。

余はその頃、和漢名家詩集と日本帝國史とを出した、前者は片岡孤筈(余の同郷で、早稻田出身者だ、甚だ詩が好きで有た)と共に上野の圖書館へ日參するやら、余の舊藏書などを涉獵して、最も好む所のものを纂輯したので、格別勞苦もせなんだが、當時の詩人中で可なり評判であつたと遙か後に承つた。後者に就ては、嵯峨正作氏の日本史綱から剽窃したものだとして告訴するといふ談判があつた。余は史綱が材料の蒐集に巧みなのを便として、多くの點に之を引用したのだから、素より争ふべくもなく、絶版條件で和解した。併し我名譽としても更に著述せねばならぬといふので、今度は更に毎日の如く圖書館に通ひ、多くの参考書を涉獵した處、嵯峨氏が學藝史林(明治初年から十年前後へ掛けての學士連の編輯に係る)から無遠慮にも主として引用されたことを發見したので、余は文部省で立てた史編順序を基礎とし、右の諸材料を消化して前度のよりも幾分詳密のものとした。之に對して更に嵯峨氏遺族から交渉があつたけれど、今度こそは右の事實を楯に刎付けた。然るに出版月評で志賀重昂氏が盛んに攻撃したので、余は此機會にこそと同誌へ寄稿したけれども、月評が廢刊されたので、余の原稿は竟に世に現はれずに終つた。

後年條約勵行論で、所謂六派聯合が成立し、各新聞も多く參加したのに、當時中央新聞に居た余が出席だにせぬのは、多分聯合會の幹事中に志賀氏があるため、前事を啣んでのことであらうとして、徳富蘇峰先生が余を訪問して、之を話されたこともあつた。實の處余は出版月評に出た志賀氏の論文が、餘りに獨斷で又對照材料の粗笨過ぎるのには驚ろいては居たが、別に反感なども持たぬので、先生の

勧めらるゝまゝ、志賀氏とも快く握手し、當時東京ホテルに在た六派聯合會にも屢々顔出しをした。此余の日本歴史は、何よりも廉價なので、盛んに賣行き、日清戦役後は、戦事始末をも附記したので彌よ重寶がられて、今でも此歴史を學生中に讀んだといふ堂々たる人々が諸方に多いのには恐縮して居る。

日本歴史に踵で出版されたのが川崎紫山氏の支那歴史で、これは世界の重もな國々の歴史を續刊する豫定であつたのだが、支那歴史も亦那賀通世博士の著を剽窃したのだとて同じく告訴があり、當時余は駿河臺の山龍堂（櫻村清徳博士）に入院中であつたが、新太郎氏の求めで博士の著書と對照し調査して寧ろ和解するの安全なことを勧め、竟にその如く結末されたと記憶する。

斯く剽窃問題が續出し、其都度坪谷氏の奔走を煩はしたことも頻々であつたが、一方には又日本大家論集全部が剽窃だといふので、殊に雜誌日本人（陸實、三宅雪嶺、志賀重昂、今外三郎氏等の發行で國粹主義を標榜し、國民之友と併せて斯界の白眉と評せられた）などで熾んに攻撃したので、博文館の書籍雜誌民衆化の功も考慮されながら、其ためでもあらう、竟に内務省から版權條例が制定公布されて、随つて大家論集も結局廢刊するに至つたが、併し此時は博文館の基礎は已に確乎築き上げられて居たが、版權條例以來は、益々奮勵し、更に聲價を高めて、今度は何人も非難し得ぬ日本一の大書肆となつた。

學者との情誼、大藏大臣を出す

博文館は斯くして法律の拘束やら、同業の嫉視やら、一部學者の反感やらを受けつゝ、尙能く出版業に精進して、文運の貢獻に奉仕された、幕府の遺老である内藤耻史、小宮山南梁廣翁の盡力で、江戸時代の古書を出版し、或は落合直文、小中村義象（後に池部姓に復す）萩野由之氏等の骨折で平安朝の文學書を刊行し、或は稗史小説類を蒐集して帝國文庫を出すなど、總て大成功を収めたのみか、更に當時の權威たる學士連に依囑して、政治法律經濟等専門の全書をも出版されたに、此學士中に、反感も含まれてか、其頃では、無茶と思はれる程に高い原稿料を収めた人もあつたやうだが、博文館は總て快諾して綺麗に仕拂つたが爲、却つて此方面から融然たる同情をも集中し得られた。殊にそれが縁となつて、博文館と諸學者との間に親しい關係に結ばれた利益も少くなかつたであらう中にも奥田義人、織田萬、古賀廉造、有賀長雄、俣野時中などの諸先生もあり、中橋徳五郎氏なども其一人であつた。

憲法發布の時、博文館は始めて兩國の井主村樓で祝宴を張られた。當日官報號外として公布された表紙に金の菊花章を刷出した憲法全文を白木の三寶に乗せて床に飾り、可なり多くの諸名士の來會もあつたが、時事新報社から來られた小金井權三郎氏の報告で、森文部大臣が此日官邸で暗殺された其

の報告があり。一坐色を變じ、踵で又和田倉門内で大橋一藏氏が牛車に轢かれて死んだなどの椿事も報ぜられたが、余は當日佐平翁父子の命で、一場の挨拶することになつた處、生憎禮式服を持たぬので、下宿で同居の岡田玄氏の（蒲生成庵翁の甥）の黒縮緬の羽織を借着した（袴は所有した）

此日お祝ひとして、花屋臺を曳出し、本石町から兩國橋を渡つて、井主村樓の前まで練廻らせたに一面斯うして廣告にも利用したのは出版業者として恐らくは、始めてであらう、大橋氏父子の新意に富めるを察すべきであらう。

また博文館で大學教授として、議院法取調のため歐洲行を命ぜられた中橋徳五郎氏のため送別會を柳橋の萬八に開かれたが、此時法學生として、鬼頭玉池氏が越後生の同窓生と列席された氏は新太郎氏と同席で、長岡では士族中で玉池、町家で新太郎と兩方子の日があつたといふ、鬼頭悌二郎、福島甲子三氏はその同胞で、中々俊材であつた。席上で中橋氏送別の辭を朗々と讀み上げられたが、實は白紙のまゝ口に任せて讀み出されたのだ。其才鬼實に斯の如しだ（後に法科を出で辯護士となり、更に歐洲大戰後、青島に渡つて新聞紙を發行された）

福島氏は後に新太郎氏の推舉で東京瓦斯會社の専務となつて相當手腕を揮はれたが、教育に心掛けが深く、其方へ少からぬ努力された上晩年長岡市へ孔子廟を建て、東京から漢學の大家など聘して孔子祭を舉行された。それは儒教に由て徳風を支持しようとする趣旨でまた時代に一隻眼を持たれた者であらう。

博文館からは又大學生に貸費したいと申出で、大學側と交渉の上、その選定によつて英文學科の高槻純之助氏（三重縣出身と記憶す）をそれに充てられた、氏は卒業後博文館に入られたが、中々の好人物で飄逸でもあつた、後に編輯局が本石町三丁目の奥二階にあつた時分、腰高窓に腰掛けて同僚と雑談中、後へ引繰り返つて隣家の中庭へ墜落されたが、幸に手に攫んだ障子と一所にフワリくと落ちられた爲、別に怪我などされただけれど、折しも隣家の藥種舗の娘さんが、中庭に面して琴の御稽古中であつたので、女師匠と共に膽を潰したといふが、それを又明治の久米仙などと尾崎紅葉氏關係の讀賣新聞に潤色して掲げられ、彌よ評判を高くした逸話もあつた、氏は後に衆議院書記官となられたやうだ。

個人として斯く學生に貸費したのも、或は博文館が第一の發頭でないかも知れぬが、其稀れな先覺者であつたことは間違ひない。

此前後に於て、博文館から出た雜誌に、日本之政治、日本之文華、日本之教育、江戸時代などがあり、其ため入館された人も多く、殊に坪谷氏の幹旋で、早稻田派の人が多く、園田資四郎、官川鐵次郎、中山整爾、匹田銳吉の諸氏も居られた。此中山氏は間もなく去られたが、後に廣島の藝備日々新聞に入り、其社主早速氏の婿となられたと聞いたが、日清戰役に余が從軍しようと廣島に逗留中、一日

往訪すると、氏は新聞社の店前で黒羅紗の前垂れに算盤を持つて、純乎たる商人姿で居られたが後に選ばれ代議士となり、憲政派中錚々たる財政家として、後には大藏大臣とまでなられた、惜むべし既に逝去された。

杉浦重剛先生、酉の町見物珍話

最も早く入館されたのは川崎紫山氏（當時北村三郎と稱す、徴兵避けのため、岡本武雄氏の縁家の氏を冒されたのだといふ）だと記憶する、氏は大藏省に勤務して、渡邊國武氏（無邊俠禪）の知遇を享け、露語なども學習し居られた。一時特色のある文豪家で、向島に住つて居られた。余との關係で後に中央新聞にも入り、また渡邊氏の後援で經世新報といふのを發刻されたら、その後は蘇峰先生の日本國民史の資料集にも參與され居ると聞いた。

會て紫山氏と然るべき家を構えようとて、駿河臺の蒼龍窟に鈴木天眼氏を訪うた歸途、せめて蒼龍窟以上の家と同じ鈴木町に長屋門のある立派な空家を一覽に及んだ。玄關からして堂々たるもので恐らくは大きな旗本か小大名の家でもあらう、袴を着た三太夫然たる人の案内で各室を見廻り偕て家賃はと問ふと、四十五圓だといふ、今日からいふと話にもならぬ廉價ではあるが、何分にも兩人の月給全部で家賃を辨じ得るだけなので、阿然として引下つた。

「教育報知」の日下部三之介氏から、大橋翁へ川島純幹氏を紹介して來た。翁は試験の上採用しようとして、余に即時試験をしろといはれる、直ちに別室に入つて、容貌堂々たる氏に對して、憲法論などを持出すと、氏はペラ／＼と余の未だ知らぬ英語などで答辯されたので、余は翁に結果最良の甲點だと報告した。川島氏とは其れ以來最も別懇であつたが、氏は大學選科の英文科を終へ、當時英語學校の教授をも兼て居られた。

川島氏の紹介で、杉浦重剛先生にも進謁し、その久堅町の稱好塾や、傳通院境内にあつた全生庵（？）の夜間の會合や歌留多會などにも招かれて推參した。又余の處女著作たる「日本内閣論」にも序文を賜はつた。余の婚するや、先生から英文の極めて簡単な祝詞に、六升の牛乳（三十日間毎朝配達）も頂戴した。先生は國粹保存主義の熱心家だが、平生の談話には、殆んど三分の一位英語を交へられるが例で、一寸妙な感じがした。明治の初年英國へ留學して、理化學を専修されたが、石炭よりアルコールを得る方法如何といふ課題に對して、石炭を賣つてアルコールを買ふべしと答書されたので、奇材絶妙と満點を得られたとのこと、斯うして平生も多く英語を話されるのであらうが、其人格の崇高なる、人をして仰がしむるものが極めて多かつた。

川島氏も後に中央新聞に來られたが（英語學校教師兼務に）その論文に咄々といふ文字を好み用ひられたので、大岡長峽氏などは咄々先生なるニツクネームを贈られた。余とは相許す仲でコツなどへ

も屢々發展したが、後に杉浦先生の推舉で鹿兒島造士館の教授となり、更に官界に入り、三重縣警察部長などを勤め、千葉縣時代には、教科書問題で一時收賄の嫌疑を受けて非職とされたが、公判で無罪となつたとて、余を銀座の寓に訪て、收支一切を日記に記入し置いた爲、それが收賄せぬ反證となつたこと、教科書肆の番頭が來て、百方頼み込みたる上、菓子折（實は金子入）などを持參するに、其都度之を刎付けた處、最後に座布團の下へ金無垢の煙管を忘れた振りして置き去つたから、追蒐けて之を差戻したこともあるなど話された。

氏は後に鳥取縣知事となり、又滋賀縣、福井縣知事ともなられた。余と最後の會見は、東京原宿へ氏が始めて家を建たとて、余を招飲された時で、何でも休職中で有たと記憶する。

宮川鐵次郎氏も、後に大藏大臣にまでなられた早速整爾氏と共に來つて入館されたが、早速氏は間もなく去り、宮川氏は會計検査院に入り、更に中央新聞に移り、後に都新聞へ往かれたが、理財の材に豊かで、此頃から小笠原といふ華族の後援で、銀行業を營み、初めて郵便切手貯金などを案出し、後東京市の助役となり、更に牛込區長ともなられた。

博文館時代の或る年の初冬、館からの歸途宮川氏と酉の町見物に出掛けた。此時余の囊底に一枚の二十錢札があるばかり、其れで目鏡橋から上野山下まで、二人乗の人力車に十六錢を支拂ひ、残り四錢のみで田圃まで徒歩、吉原に入つて大門の所在を聞くと直ぐ背の後鐵柱が其れだと教へられて驚ろきつゝ、空腹に堪へず四錢で大福餅を買ひ二人で分けたのを、大門問答で混雜中錯まつて途上に墜し、残念至極とそのまゝ、人群に揉まれ押されて淺草の雷門まで戻り、茲から人力車（無一文で鐵道馬車に乗り能はぬ爲）に飛乗り、余の駿河臺の下宿屋に歸り着き、人力車代も仕拂ふた上、彼此十一時頃にヤツと晩食に有附いたこともある。

宮川氏は仲々器用家で、吉原に遊ぶにも、一定額を敵妓に托すると、彼女は其中から一切を賄ひ、尙歸途の入費や朝食費をも氏に渡すの例で、極めてキチンと遊興し得たとて、時々目覺まし時計やら、金平糖などを手土産として往かれたといふ。

一夕宮川氏と廣津柳浪氏と三人で、池ノ端で會飲した時、余は遊んでも始終婦人に振られるのみ、何か優待される手段はないかと問ふと、柳浪氏曰く、妓は總て不幸で身を賣つたものだから、それに同情すべきだのに、貴公のやうに惡罵のみ逞ふして、何で持てるものかと、其處で試験のためと稱して、三人で宮川氏の宿坊へ押掛けた、柳浪説果然効顯はあつたが、同時に余は獲麟の厄に遭つた。

廣津柳浪氏方で井で洗面、幸田露伴氏の一喝

廣津柳浪氏の博文館に入られたのは、長岡出身の鬼頭梯次郎氏（晚香坡總領事）の紹介であつた。是れは廣津氏が父君に繼いで外務省に勤務されたことのある關係だといふ氏自身の話であつた。過般

(昭和二年)時事新報で氏は入館當時の感想記を連載し、かなり詳しく余のことをも記されて居るから余も坐ろに氏のことを想ひ起した。

氏は色が黒く、頗ぶる風采が揚らず、又怒リッほくて始終佐平翁に不平を溢して居られた。或る年の暮に、その園子坂の家へ来て越年しろと頻りに勧められるから、余は小鴨二羽を手土産として往いた園子坂と上野の山との中間に當る道筋に門があり、門には柳浪子と丸で女名前のやうな標札があり、門からズツと奥の田圃中に茅葺き屋根の蕭洒な二階家があり、滾々と水を吹く堀抜井戸もあり、成程閑靜風雅な住ではあるけれど、余は二階へ押上げられたまゝ、御馳走は大晦日といふのに、昆布鱈のみで。是れまで年々大橋家の盛饌(歳末の例として)に馴れた余には甚だ意外に感ぜられたのみか、翌元旦の朝は、堀抜井戸の端で洗嗽したは結構だけれど、洗面器がないとて井で顔を洗はされたに喫驚した。後に大橋乙羽氏(當時は渡部姓)も此柳浪居で、生れて始めて井鉢で洗面したと驚ろいて語られたことがある。氏も余と同じ目に逢はれたのだ。

余は辟易して早々駿河臺の下宿へ逃げ歸つた、柳浪氏は斯くまで貧乏しながら、或る時外務省から在職中の手當金を貰つたからとて其頃は相當の金であつた六拾幾圓かを懐中へ捻ぢ込み、余と宮川鐵次郎氏とを誘つて江ノ島に遊び、夷屋へ泊り込んで女中を總揚げとし、いろは歌留多などを催ふしてザク／＼銀貨を振りまき、一寸駄々羅遊びをされたこともある。

氏は博文館に居ては、羽織のみは立派な七子の黒紋付を着流し、机に向つたまゝ黙りこくつて終日呻吟し居られた。蓋し小説の趣向に凝つてであらうが、實に苦辛慘澹であつた。

又余が日本歴史編述のため、下宿屋で人が來ては五月蠅いからと、ワザと其處の家族の居間へ隠れて、セッセと執筆中柳浪氏ヒョッコリ遣つて來て。幾許でも宜いから金を貸せといはれる、余が墓口の底を叩いて二十錢札二枚を出すと、これでも米が幾升買へるから幾日間暮せるなどと、ホク／＼上機嫌で引上げられたこともある。當時氏は駿河臺に極近い飯田町(土手脇)へ引越して居られたが、夫人は氏と反對に豐滿な極めて美しい人であつた。當時能く男の子を背負つて居られたが、其れが多分今の小説家で親孝行の名ある和郎氏であらう。夫人は蒲池氏で不幸早く死去された。

柳浪氏は余に野口寧齋の妹を娶ると宜い、美人でもあり、年頃も似合ふが、唯併し好ましからぬ遺傳的な劫病が彼等兄妹にあるから、敢て強く勧められぬと言って居られた。此妹こそ余は未見であつたがお會惠といつて、彼の肉斬取事件の男三郎と出來合つた女性で、余は其頃の新聞記事を見て啞然たらざるを得なんだ。

雜誌日本之文華は日本之政治と共に余の擔任であつた關係から、當時神田末廣町に住んで居られた幸田露伴氏をも訪問したが、其机前の障子に種々さまざまの文句が書いてある、何でも思ひ浮んだ名句を記して置くのだと氏はいふて居られた。一見した所、坊主然たる入道で、床に將棋盤が乗て居る

から、戦ひを挑むと、君も遣るかニコニコ笑ひながら對局したが、幾番でも全く齒が立たぬ。後に聞くと二段の實力があるといふので、余は阿然として自失せざるを得なんだ。

露伴氏は會て父君の經營される紙店の店番中、一紳士が來て、式紙短冊が買ひたいとて種々品物を見ながら、頻りに値段を負けろ〜といふので、露伴氏は突然、黙れツと大喝されたといふ。成程左る禪味も豊かに見受けられた。

柳浪氏の紹介で、屢々牛込横寺町（其家は昔蜀山人も住つた由緒があるとか）に尾崎紅葉氏をも訪ふた。茲へは川上眉山、巖谷小波、石橋思案、岡田虚心亭（朝一郎博士）などが寄合ふて、純乎たる江戸辯で、眉山をピサ、虚心亭をキヨサなどいひ、萬事此調子で洒落通して、衣裳なども品こそ上等でないが、相當粹な好みで、當時には珍らしい絞りの兵子帯などを用ゐて居られた。後年紅葉氏が佐渡へ遊ぶ時特に余から越後方面の方言などを聞き、克明にそれを紙端に記されたものだつた。

巖谷氏を訪ふべく其平河町の一六先生邸へ行つたことがある、氏は當時一の貴公子ながら中々平民的な才人で、野口寧齋氏とも此處で始めて面會した位、これは又小體ながら中々精悍の氣が見えた。然かも節儉家で其手紙など反古紙を裏返して使はれた程だ、これは劫病のため獨身で押通し、父君の遺産に手を付けずに、残るべき母堂と妹の生活に困らぬようする爲で、幾んど涙ぐましい事情に基くのだとて、之を知る程の人々は、孰れも同情と尊敬とを表して居た。

寧齋氏の父君も柳浪氏の父君と同じく外務省に出仕し居られた緣故で、柳浪氏とは二代の交誼であつたといふ。寧齋氏は余等との面會を悦ばれぬやうになつたが、是れも病勢が進んだためと聞いて實に氣の毒に堪へなんだ。而してその漢詩は已に鬱然として大家を成し、殊に才氣英發の趣多かつたのは敬服すべきだ。

村井弦齋氏、四人で酒一斗を平ぐ

村井弦齋氏も博文館寄稿家の一人で有た。一種の小説をもつて雑誌に出された。而して米國から歸朝したての河村某氏をも紹介して、博文館の客員とされた。余は此人のため渡米の志望を刺戟された。後年余が三田四國町に移居した頃、直ぐ近くの四ツ角に弦齋氏の居があり、その向ふに、又報知新聞の三木善八氏の家があつた。翁は非常な潔癖家で、軒先きに少し蜘蛛の巢が掛つて居ても、疳癩玉を破裂されるといふ近處の評判であつたが、弦齋氏はまた夫人（後藤象次郎伯の縁女）と共に猫を愛すること恰かも子供の如く、余の家でも一匹貫ひ受けた、併し愛らしくはあるけれど、糞仕が悪く、剩つさへ幸徳秋水が之を釣るし上げて見て、此猫は四ツ足をダラリ下げるから、捕鼠の能がない、捨てるに如かずといふので、村井氏に相談すると、捨てずに返せといはれるのでその通りにした。

小金井良精博士（權三郎氏の舎弟）の喜美子夫人が日本の文華に寄稿された文章中、くちなはとい

ふのがあり、蛇のことと想像はしても、能く判らぬので、余は夫人の兄君なる森鷗外先生を園子坂上の千駄木邸に往訪し、之を確めて博士に笑はれたこともあるが、其れよりも余は先生の藏書家であることと其博識と文才とに傾倒せざるを得なんだ。

此頃博文館に服部轍氏が居られた。土佐人で鰲顔矮軀、能く飲み能く語つて、頗ぶる氣が合ふた。何でも南洋へ雄飛の志を懐いて近く歸朝されたばかりで、やがて再擧の覺悟だといつて居られた。園田資四郎氏も亦飲み仲間、曾て博文館の宴會の崩れに、數人して吉原に押掛け、翌朝馬を牽いて引揚けたのに憤懣して、轍氏と余と池ノ端の無極庵に三次會を開いた、茲は氏が以前身請けすべく身代金の一部を出したまゝ、手金流れとなつたといふ一藝妓などを呼上げて、白晝大醉し、余が床の間に眠り倒れて居る中、氏が引上げられたことも覺えて居る。氏は此頃から漢詩に興味を持たれ、醉へば必ず放吟する例であつたが、今は名古屋に居て擔風と號し、詩壇では堂々一家を成して居られる。

當時の余の駿河臺の下宿の室は、正面九段坂と相對し、林中に亦煉瓦の近衛聯隊の家屋を始め、招魂社の家根や大鳥居も見え、其上に拔んで居る富士山の雄姿も見られて、眺望此上もない處であつた。茲へ新太郎氏の實弟で、神田に書肆東京堂を營む省吾氏が碁盤と石とを買つて持込まれた。これは店で碁碁も出來ぬからとて潜かに買ふて余に預けられたので、夜中時々遣つて來ては手合せをするが、カラツ下手で碁とも參らぬが、併し恐ろしい横好きだつたが不幸早く病死された。

省吾氏夫人は眉目秀麗だが、其妹君の方が更に魅力のある美人で、早稻田や神田方面の學生間に評判となり、蒼龍窟の鈴木天眼までが張りに來るとの噂さなので、余も頗ぶる茶目氣を出し、省吾氏との關係で心安いまゝ、ワザト着物の綻びを縫つて貰つたり、嗜好の蜀黍を焼いて貰つたりして、暗に天眼黨共に切齒扼腕させて舌を出したこともある。又川崎紫山氏のため之を媒酌しようと其父君に強談し、若し不承知ならば拙者が貰ひ受けるなど、店頭で談判し、新太郎氏に笑ひ倒されたこともある。當時の無茶さ加減以て想ふべしだ。

清水義敷先生が麻布飯倉小學校の校長をして居られたことがあつたので、余が之を訪うて、共に赤羽橋近くの牛肉店で飲み、徳利を座敷に行列させ、夜に入つて暴風雨となつたので先生の寓居される寺に一宿し、翌日歸つて見ると、余の下宿の部屋は雨戸も吹飛ばされ、机上のランプ顛覆して居た跡も見えた。先生も我郷の詩人で葵亭と號し、余の師帕陰先生の女と婚された。其詩には左の如きものがある（先生の父は余の祖父の弟で、出でて清水家を繼がれたのだ）

元旦記事

門無剝啄意遑々、清福人間在客居、石鼎試茶々未熟、且繙臘尾讀殘書

歸後書感

北邊雲物切關情、誰向滄溟掣巨鯨、歎息多年揮劍手、空拈寸管學書生

村井弦齋氏、四人で酒一斗平ぐ

先生は劍客で鳴らされたのが（其兄君が藩劍道指南番であつたといふ）東京師範學校第一期卒業生として、早くから鹿兒島へ赴任され頗るの慷慨家でもあつた。

余の下宿には、郷黨學生が時々ころけ込んで、恰かも小梁山泊の觀もあつた上、曾て博文館の番頭大野氏の夫人が酒店を開いたからといふので、余は一斗樽を購ひ、折柄郷里から上京中の先輩稻垣芳藏氏（宇都宮太郎將軍と幼年士官學校の同窓生で、後年將軍から屢々余を介して會見を求められた）を招待し、一鉢の魚軒と少許の澤庵漬とを注文し、それと下宿屋の夕膳とのみで主客五人徹夜で、一滴も餘さず飲み乾した。但五人中一人は絶対に飲まぬ故、實は四人で平けたのだ。

ところが翌日隣家の元老院議官の小原家（下宿屋の家主）から抗議が來た。余等が酔ふて吟じたり歌つたりして徹夜したので、余の室とは僅かに杉垣一重隔てた小原家では、病人があつて困つたといふのだ。此小原家の門内の長屋には當時尾崎行雄氏も居られて、恰かも洋行中であつたといふ。

第五 大橋佐平翁

勤王家で崇佛家、夫人の機轉で襲撃を免かる

大橋佐平翁は一個の好運兒でもあつたらうが、又無類の奇材でもあつた。甚だ怒りつほく、又大の矢釜し屋でもあつたが、一向に執着がなく、颱風一過すれば天氣晴朗で、随分我儘ではあつたけれどまた敏捷無比でもあり、正しく豪傑の諸資格を備へて居られた。

額高く眼澄みて、相貌も堂々として、如何にも押出しが立派であつたから、壯時は必ず一個の美丈夫であつたらう。一貧家に生れて氣位も相當に高く、且逆しるが如き才氣はあつたものゝ、當時僅かに木羽剥職人であつた翁その人が、松子夫人と結婚されたのは、多分一種の戀愛關係であつたらうと推せられる。夫人は南魚沼郡關村の一名家で又相當富裕であつた上村氏の出（然かも總領娘）で殊に豊滿な美人であられたと想像される。即ち地位身分に著るしい相違がありながら、其娘時代長岡へ出養生中、翁と結婚されたので、それから間もなく翁は裏一ノ町の角屋敷へ移り、三國屋といふ店を出された。最初は頗る微々たるもので、田舎から往來する人々の休憩がてら酒食を供する位の程度

のものであつたが、後に長岡藩の御用酒家とも成り、立派な格式を持つ商人となられた。素より翁の才機敏活の故であると勿論ながら、又夫人の内助以外、その實家からの後援の力もあつたであらう。

翁の歿後新太郎氏の依囑で余はその傳記資料蒐集のため、越後へ赴き、長岡新潟の兩市にある古老等に就ても及ぶ丈けの手を盡した爲、右等の事實を想定する根據をも持つに到つたのだ。

翁は一種の識力があつて、維新前から早くも勤王論を唱へ、藩の儒者の藤野某等とも計つて相當奔走もされたので、藩士の多數は當時孰れの藩にもあつた例の如く、甚だしく翁等を憎み、或る夜竟に翁を殺すべく壯士團が翁の家を襲ふた時、夫人は咄嗟に翁を厚い夜具に包み、裏二階の横手の窓から外へ投げ出された、翁の家は前こそ裏一ノ町といふ長岡市のメインストリートに面して居るが、横は船江町を控へ、丁字形に柳原通りにも當り、殊に路面低くして而して其處に極めて高い窓がある丈けだから、流石の壯士團も表口のみ警戒して斬込んだのだ。

斯くして夫人の機轉で翁は逸早く免かれて暗中へ逃れ去るを得たといふ。

翁の勤王主義者であつたことは、その儀表の堂々たることと共に本來單な商人でないとして、多くの貴紳にも優待さるゝを得た。博文館創立以後、翁が勝伯を始め品川子爵等にも愛重されたのは其一例だ（余は品川子爵へ殊に翁の勤王事歴を説いて紹介した）

廢藩後翁は長岡の二先覺者として押しも押されぬ地位に立たれたのみか、新事業に着目するとも敏で、郵便局を擔當したり、通運會社を引請けたり、又信濃川の渡船を經營したりされたので、渡船賃のみでも少からぬ収入があつて、資金にも豊富なると共に、當時の文明事業たる諸計畫に關係し、殊に諸有志と計つて北越新聞（主筆は草間時福氏）を發行し、後に其社と意見の合はぬ點があり、且同新聞の廢刊するに及び、翁は獨力を以て越佐毎日新聞を發行されるに至つたのだ。

翁の父母は篤實一方の人々で、且佛教信者であつたのみか、その族中から出家して、後には京都智積院の住職ともなられ、その歸省の折など、僧位僧官に由つて長岡藩主から對等の禮遇を受けて郷人に目を見張らせられたのがあり、平民として階級的に優秀な地位を得るためには宗教家たる外に方途のなかつた時代だから、翁も頗ぶる之に刺激されてか、一時自身も出家を思ひ立たれた程だから、宗教にも少からぬ趣味を持ち、後に瑜珈教如師その他の緇流とも交際し、長岡の家で原人論や唯識論の講義をさせて聽聞するのみか、月刊の佛教新聞をも發刊されたと覺ゆ。

翁は博文館創立後、早く思ひ立つた歐米を巡覽された、横文字一ツ知らぬ翁が單身萬里の旅程に上られたその勇氣想ふべしで、素より到る處通辯を雇はれたでもあらうけれど、例の疝癰で通辯する人も屢々衝突されたらうし、旅行中は朝起が早く、或は全く一睡もせぬ癖さへある上、格別急用もないのに、駕籠を押ツ飛ばしても晝夜兼行し、新潟縣會議員中の元老株であつた寺崎至氏と一對と稱された程だから、余は翁が屹度豫定より早く歸朝されようと言つて居たが、果せる哉、米國から歐洲

へ廻つて、プログラム通りの巡遊を終りながら、豫期より二三週間以上早く長崎へ歸着し、出迎の夫
人その他と中國筋から京阪を見物して歸京された。

下げられぬ頭、大橋圖書館

翁は疝癥が強いと共に、又頗ぶる剛岸な氣質をも持つて居られた、尤も頭腦が常人以上に大きくて
普通人のやうに丁寧な頭を下け得ぬのもあらう。それは父子酷く相肖て居て、新太郎氏も同様だ、
而してそのため傲慢などと誤解されたことも一通でなかつたやうだが、余が氣を附けて視た所による
と、父子共に如何なる貴紳との應酬にも、餘り頭を下けずに、略々一様平等何人にも同じであつた。
併し頭を下けぬのでなく、體質上から下け能はぬのであらう。

翁は相當法螺も吹立られるが、併し公共のために盡された結果も甚大である。是は翁は可なり粗放
であつても、新太郎氏に豊富な實行の能力と資力があつた賜であらう。松子夫人が曾てシミと
余に主人(翁)ほど無頓着で而して辯才の多い人は少からう、彼の調子で借金されたら容易にそれが
出來ると共に、我大橋家は到底持ち切れなんだであらう、幸ひに頭を下けて借金の出來ぬ氣質であつ
たので助かつたのだと評されたこともある。

大橋圖書館の如きも、實は翁の公共に盡される現はれの一ツだ、單にこれのみでも翁は能く不朽た
り得る。

翁は晩年上六番町の邸を石黒忠惠男の口入で買入れられた。崖地をも併せて確か千坪以上もある地
所付の邸で、その價は驚ろく勿れ、僅かに四萬圓に過ぎなんだといふ。

是れは元參謀總長で、名將の聞え中外に高かつた川上大將の邸で、大將は當時隨一の畫家たる橋本
雅邦翁に囑して、襖や板戸などに名筆を揮はせるなど随分凝つたものだ。場所は申分ない高臺であり
眺望も壯大で家屋も亦輪奐であり、價も方外に廉だから、翁は食指大に動きながら、大將が此邸の新
築勿々物故され、その母堂も亦逝去されたので、縁起が悪いと大分に躊躇された。そこへ男爵から、
何で縁起が悪いものか、川上母堂は八十を越えた長壽で芽出度往生せられ、又大將は薩摩の低い士族
から身を起し、日清戦役には彼れ程の武勳を輝かして、大將となり子爵にまでなられた、是れ位運の
良い邸が又もあらうかと説き付けられたので、翁も成程と大に勇んで快く買取られたといふ。

後にその空地へ十萬圓を投じて、大橋圖書館を建設されたのも、亦翁の宿志を果したものと芽
出度いが、更に又西洋室を増したのが新太郎氏の時代で、然かも不幸大正十二年の大震災に烏有に
歸した、併し之が再建せられ、且圖書館がそれより先きから更に規模を擴張して、九段坂下の牛ヶ淵
畔へ以前にも増して立派に建築された。

翁は格別衛生に細心でもなかつたやうだが、朝は極つて卵雑炊の少量を食され、正午には五勺未滿

の酒と軽い飯丈け、晩は稍々美食ながら酒は矢張五勺内外が例であつた。夜は頗ぶる早寢の方だから、その代り朝起は非常に早く、病中の外は、五時より遅いことはなかつた。

それでも晩年は胃癌に罹つてそれに命を取られた。唯自身も不起の病と知つて潔く死を覺悟し、内山正如氏などを顧問として御詠歌様のものを作られ、余が見舞ふ毎に之を示し、或は和歌などを作りて機嫌克く之を示し、談笑自若として悠々然たるものがあり、立派な大往生を遂げられたのは宗教趣味から來た故もあらうが、また是れ一個の傑物たることの證據といはざるを得ぬ。

翁は本郷弓町を發祥地とし、日本橋本石町、同じく本町と移り、更に小石川戸崎町へ可なり手広い家を求めつゝ、常に造作の手入れを止めず、毎時鑿や鋸の音の絶えなんだのは、趣味といふよりも又絶えず活動する翁の氣質の然らしむる所でもあらう。翁は又自個の創意で菊花を二分した紋章を作り、又日暮里に可なり宏大な墓地を購ふて塋域を作り置かれた。

翁には庶腹の二三子の外、夫人との間に五男兩女があつた、長は新太郎、二男弘藏、三男省吾、四男修策、五男幹二、長女時子、二女お幸の諸氏だ、弘藏氏は早く長岡で死し、修策氏は我武者羅で流石の翁も持餘し、一時は長岡で高橋竹之介翁の塾に窮命ながら入學させられた程だが、不幸東京で婚嫁の後、間もなく病死された。時子女史のためには乙羽氏を迎へ娶はせられたが、乙羽氏は翁に先んじて死去された。お幸女史には光吉氏を迎へ、其れは蠡斯振々で、光吉氏は今や東都印刷界に雄視して居られる。

翁の姉は山本氏に嫁し、其二男が博進社の山本留次氏だ。是れも實業界に斬然頭角を現はして、今や押しも押されもせぬ地歩を占めて居られる。翁はその一門に於ても缺けたることなしと謂ふべきだが、余は翁の父母等が篤信家であつた餘慶とも見て居る。

翁の番町の邸は、俗に皿屋敷の跡だとか、或は二階の梯子下に當る四疊半の座敷が即ちそれで、茲では何人も安眠し能はぬなど誠しやかに噂をする者があるので、翁の逝去の際、余は通夜してその四疊半の部屋へ寢ようとして、松子夫人から、其様な馬鹿けたことがあるものかとて散々に笑はれたこともあつたと記憶する。

賢夫人松子刀自、その陰徳

翁を偲ぶと共に忘れ能はぬは其夫人松子刀自の徳だ、長岡時代には、活版部の若者など大抵土藏の二階へ寢泊りするので、寒中氣の毒だとして、夫人自身女中相手に藁蒲團を多く製作された。底に薄縁や藁産などを用ひ、表にも古浴衣や、賣藥の廣告布などを綴ち合せ用ひて、中心に厚く且柔らかな打藁を入れ、之れを普通蒲團の下敷きとするので、越後地方の老人など多く用ゆるが例だ、斯くして若く憫れな小勞働者にも深い心入れがあり、その溫情實に喩ふる物がなかつた。

東京でも、編輯員や、大小店員やにも絶えず能く目を掛けて、人の氣付かぬ細かな點にまで惠みを預たれた。新太郎氏が多數館員の生活に注意し、老人や子供の多いものには殊に心付けて困らぬようにするため、常に腹心のものをして、一々潜かにその生活振りを視察させられるのも、恐らくは母堂の美點を多量に遺傳されたためであらう。

されば如何に頑愚者流でも、夫人の徳に服せぬはなく、今は秋田市で新聞社長をし、曾ては代議士とも成つた中村千代松氏（一時奥山姓で、内藤耻叟翁の紹介で入館された）なども、豪放磊落で、修策氏と共に下駄を袂に忍ばせ、本町三丁目の前二階の格子窓を外し、其れから電信柱に飛び縋つて路面に下り立ち、吉原洲崎と羽を伸ばし廻るといふ茶目振りで、佐平翁のお小言などは蚊が頭上で鳴く程にも感ぜぬ腕白黨であつたが、夫人の前では、宛ながら小羊の如く柔順で、お母さん〜と敬ふて居られた。

或る年品川子爵の談に、此頃大橋老人が遣つて来て、大岡育造さんは餘程エライ御方ですネといふ何故かと問ふと、彼の松井のやうな始末に終へぬ亂暴者でも、ブ〜いはず統御し往かれるからと話して居たよとのことであつたとて、硯海先生は子爵の談を傳へて、余に貴公は其れ程酷かつたかと問はれたこともある。併し余も實に中村氏以上に夫人の前では頭が上らなんだ。

長岡時代に夫人は余等を遇せらるゝこと宛ながら生みの子の如く、新太郎、省吾の諸氏と幾んど逕

庭がなかつた。余は亂酔の餘り、土手から田圃中へころけ落ちて泥鼠の如くになつて歸つて來ると、佐平翁は口にくそ出されぬが、眉を釣り上げて睨み付けられるけれど、夫人はニコ〜して女中を差圖し、泥衣服を仕末させられるといふ調子であるから、余も深く感銘し、東京で夫人が腸チブスに罹られた時など、翁を扶けて共々丹念に看護した。夫人は亦之を徳とされたのか余が悪い病を秘して駿河臺の下宿屋でウン〜寢てる處を見舞はれ、何か良薬でもといはれると、茶目連が目高の眼肉が宜いさうでなどと駄洒落れるのを、意味を解せぬ夫人はやがて魚河岸で買ひ入れたとて、車夫に目高を届けさせられたこともある。洵に恐縮ながら好意は全く感泣すべきだ。特に本町一丁目の家へ湯を沸かして、病後の余を入浴させられるなど、實の親も及ばぬことだ。されば佐平翁には兎角反抗勝ちで此上もない無法者と見えた余も、夫人丈けには何としても一言さへ返し能はなんだのだ。

後年余が糖尿病に苦しんだ時も、深山にあるタラの木の皮を煎じ飲むが一番の薬だといふのを聞いて、夫人は其實家たる關村の上村氏に言送り、一俵程を贈與されたので、余自ら飲用する外、友人の同病者にも譯を話して分贈した程だ。

此心からの親切こそは、鬼神をも感ぜしめずには措くまい、況んや人間をやだ。夫人はまた盆暮れ毎に博文館関係の人々に、家族適當の反物その他を贈られたので、人々は孰れも其心入れの懇切さを難有がらぬはなかつたと聞く。

翁の歿後、夫人は翁の遺骨の一部を捧げて之を高野山に納め、且その冥福のため、四度までも四國遍路を試みられたといふので、その際に用ひられた古銅製の鈴は、實に何とも言へぬ清い音を發するとて、夫人の死後、石黒老男爵が遺品として殊に申受けられた。實は往年内山正如氏の法友で、奈良の某寺にある小佛像など携へ來つて博文館に入つて某氏（名は忘れたが極めて齒切れの宜い能辯の人だつた）が余に贈られた高さ四寸程の銅製阿彌陀像を勿體ないとして夫人に呈した處、夫人は之を持佛堂に安置されたのを晩年發見した余は、その代りとして右の鈴を頂戴したいと思ふたけれど、坪谷水哉氏から石黒男爵が貰ひ受けられたことを聞いて思ひ止まつた。

夫人は未亡人として多くの孫達を慈しまれる傍、昔を忘れぬ爲とあつて、佛事供養の外暇ある毎に自身雑巾を刺されたさうで、山本留次氏などは、感激の餘り、之を乞ひ受けて令嬢方に分與し、此上もない貴重品と心得よとてシミ／＼教訓されたといふ。

夫人は又多くの陰徳を施された外、生れ故郷の關村へ資金を寄附して其水道を作らせ、又大橋家の菩提所たる長岡の寺へは、佛像鐘樓なども寄進された。此賢夫人の徳こそは、佐平翁を好運ならしめた所以のもので、大岡先生が會て帝國劇場で催された博文館創立記念會に於て、得意の雄辯を揮つて夫人内助の功徳を頌し、満堂を感動させられたのも、決して偶然ではない。

第六 大橋新太郎氏

兩親の美點繼承、獨立の眞骨頭

突飛ながら奇才潑瀾の佐平翁を父とし、機智を有しつゝ、徳望の高かつた松子刀自を母とする新太郎氏の爲人は、多言を俟たずして何人も略々推量し得られよう。氏は實に双親の最も善い點をより多く又より能く遺傳し繼承された。

氏の直ぐの弟の弘藏氏こそは、小學中學を通じて並びない英才であつたと長岡で傳へられ、翁夫妻も時々之を言出してはその夭死を嘆惜されるのは常であつたが、併し是は釣落した鮒の存外大きく思はれるのに相似た心理かとも疑はれる。露骨な申分ながら、氏の同胞は總て一技一能あり、又共通に水平以上にあるのは勿論であるけれど、氏に匹敵は勿論、追隨する丈けの人の見えぬのは、氏丈けが兩親有りツ丈けの長處を舉げて悉皆一人に集中されたのだと申しても、恐らくは餘り溢美でもあるまい。

氏は新潟師範學校へ入學されたこともある。又東京の同人社に入つて、中村敬宇先生の教を受けら

れたので、後年師恩報謝を兼ねて、其名著（實は名譯）たる西國立志篇の版權を譲受け、刊行して之を知人に分贈し、且廉價に賣弘めて世のためにされたこともある。

併し學校教育は多く受けられぬ方で、既に十歳臺から各地方を書籍を行商し廻はれたともいふ。少年時に辛酸を飽喫されたと思ふべし。而してそれが却つて他日の大成に多大の効果あつたこと勿論であらう。

然かも中々の蠻骨家で、博文館創立の際など、余と共に麴町の通りを尻捲くりで、然かも兩手でバチバチ尻を叩き住かれた爲、查公からクヤ／＼を浴せられたこともある。此蠻骨は長岡時代の質素風と共に今に全く抜け切らぬやうだが、是れが抑も人間味の饒かな所以でもある。

その廉價主義は我出版界に一種の革命を生じたもので、大に我文運の進展に貢献したのみか、又田舎から飛出して、一躍成功した所以でもある。大家論集を始め、多くの出版に於ける氏の効蹟は何人も没却し能ふまい。

氏は何の事業に於ても、政府に絶るなどといふ考へは露ほどもなく、總て獨立獨行で遣り遂げる眞骨頭の持主だ。此點は世間未だ多く稱せぬけれど、氏の一大特色は全く茲にあつて、他の事業家と全く撰を異にする點だ。氏が最初の夫人と縁を断たれた時、佐平翁は大倉喜八郎老の媒妁で、當時（日清戦役直後）陸軍の或る要人の令嬢を娶るべく着々話を進めて、イザ見合ひといふ處まで漕ぎ付け置

いて、始めて之を氏に申聞かせられると、氏はにべもなく之を刎ねつけられた。是れは別に意中の人（今の須磨子夫人）があつた故のみでなく、實は翁等が此縁に由て陸軍方面の出版を請負はんなど、考へられたのに對して、甚だしく反感を持たれたからでもある。日清戦役で出版業に由り、大利益を得た博文館としては、翁等の考慮は普通極めて當然であらうけれど、獨立獨行主義で之を拒絶した氏の眞骨頭は、福澤先生のそれと齊しく頗ぶる貴ばざるを得ぬ。

福澤先生は商業に士魂商才を要すとて、如才なく立廻ることを勧めながら、官府などの情實資縁に絶るを卑しとし、當時交詢社や時事新報社の窓から、魏然として聳ゆる東京日々新聞を指さしながら政府の保護で立つ御用新聞は、今に屹度没落するぞと冷笑されるが例であつたが、果して何人の手でも成功せず、新聞は他の手に買受けられて、社屋は伊東巳代治伯（當時は男）の私有となり、後には赤煉瓦に改造されて、純然たる貸商店となつて了つた。

氏は或る日從容として（確か本石町時代で其處の二階であつたと記憶する）余に、我長岡から上京して聊か成功の緒に就いたのは、東京に於ける印刷、用紙、販賣その他有らゆる機關が完備し居るために外ならぬ、更に進んで東京以上に諸機關の能く備はる米國や歐洲へ押出さば、一層効果があらうと語つて其素志を打明けられたこともあつた。

併しその實行を見なんだのは、氏が早くも出版業の前途に見切りを附けられた故であらう、氏は後

年加藤高明伯や、本野一郎子などから、東京日々新聞、讀賣新聞の經營方を各前後して依頼されたけれど、總て之に應ぜられなんだが、新聞紙は多數の人を要する點のみでも所謂人事上の煩累が多く、事務も隨て極めて複雑だけれど、その割合に利益が少く、寧ろ往々にして損失さへも免かれぬといふ見地に出たのと思はれる。而してこれも氏が曾て越佐毎日新聞の經營に當つて、十分にその苦い經驗を味はれた結果であらうが、是れ亦一見識だ。然かも書籍や雜誌の出版を新聞の發行と對比して、何程の差があらう、畢竟は五十歩百歩だ、是れぞ氏が出版業に見切りを付け唯發祥たる博文館の舊業を存立するに止めて、別の方面、比較的効果と収益との多い方面へその力を傾注されたのであらう。

實業界乗出の腕前、アームストロング社長と會談

大橋氏が今日の富を致されたのは、申すまでもなく博文館が根柢であり、出版業が基礎ではあつたが、この大に延びた途は別にあるやうだ。

氏は安田家から一萬圓で本町三丁目の巨然たる大店舗を買入れられてから、茲へ坐り込んで絶えず店前の大道を往還する鐵道馬車を目撃し居られたが、聰敏な氏として徒らに晏坐傍觀するに止まられなんだことは勿論だ。當時鐵道馬車會社は業務甚だ振はず、五拾圓拂込みの株式が三十圓臺から落込んで二十八圓を割つたことすらある。併し獨占事業の上に、淺草や上野へ掛けて、品川から新橋銀座

神田と孰れも帝都目貫きの要所のみを通過するのだから、將來電車にでも改められたら、その利益の多いことは必然だと睨み、ウンとその株式を買込んで、何時の間にか大株主となつて居られた。

果然、中野武營氏が經營の衝に當つて鋭意改善されてからは、鐵道馬車の利益激増し、且電車改造の認可權までも確實に握つてからは、其株式は異常の勢ひで騰進し、大橋氏の財産は躍一躍して幾倍するに至つた。

氏は甲冑派の人々と見を同じくして、總て獨占事業に着目し、東京瓦斯株式會社が矢張三十圓臺に落込んだ頃、同じく大に買占めて、大株主となられたが、後に澁澤榮一子爵から懇囑されて、出でてその社長となられた。氏は出版界にこそ異常な敏腕家として、成功を認められたけれど、實業界では幾んど無名の若人で、何等經驗さへ無いのだから、世間の多くは或は澁澤子を輕卒と危ぶみ、氏の爲す所を目を皿の如くにして見守つて居た。

然るに氏は此天下注目初陣に於て、花々しい功名を立てられた。即ち會社を整理して隨分思ひ切つた英斷を敢行し、年若い人材を擢用して、總てが適材適處で、一々急所を外れなんだので、世間一般その武者振りの鮮かさにアツと感嘆した。而して株式も四十圓となり五十圓となり、八十圓となり百圓以上ともなつて、氏の財産も亦彌よ膨れた。

殊に之に由て實業界の泰斗たる澁澤子の全信認を得ると共に、一般實業界からも、立派な腕前を認

められ、爲に種々の會社から禮を厚くして迎へられ、やがて日露戦役前後からの財界好況に乗じて、多くの株式所有者ともなり、牢乎として動かし難い地位を築き上げられた。

氏は瓦斯社長時代に、恰かも余が初めて米國へ渡航することとなつたので、氏は舊來の關係から大に之を祝福して、一切の旅行要具を調て贈られたのみか、瓦斯の株式を米國人にも紹介して之を所有させる機運を開きたいとて、都合を見合せてその取計らひをするよう余に托し、そのため専務の福島甲子三氏をして祖道の筵を築地の香雪軒に張らしめられたのみか、余を横濱まで見送り乗船の出帆が翌日に延びたと引上げられる際、弟の省吾氏に托し余の兩兒（龍吉、乙郎）に何か然るべき玩具でも買つて贈れと命じ、且余に金子入れの紙入れをも贈られた。實の處余は諸費の全部を米貨に交換し終つたので、今多くの友人等と横濱へ一泊するにも、小遣錢さへもないと内心辟易し居た所だから、殊に氏の心利いた贈物を忝く感じたのみか、兒輩も精巧な汽船の玩具などを得て、嬉し喜んで歸京した、是れは今以て能く記憶して忘れぬ一段だ。

去れば余は桑港に滞在中、東京瓦斯の業務大要を英文に認めて、之を取引所に贈り、その事務員に交渉したが、併し追々に注目するものは生じようし、會社に社債募集を欲する場合でもあらば、相當の好参考とならうと言つて居たので、余は取敢へず之を氏に報告し、尙紐育でも斯くして、聊か義務の一端を盡したやうにも感じた。

それからズツと後のことだが、氏は自身で歐米を巡回されたが、佛國から西班牙へ行く列車内で、英國アームストロング會社の社長に面談された時、彼の社長は自分の會社へも日本から見習ひとして來る人が相當にある、會社では大學卒業者でも最初は最下級の事務員にコキ使つて十二分に下情にも通じ、細かな事務にも習熟させた後、それ／＼適當の地位に拔擢する慣例だから、日本からの見習者にも此筆法を用いた處、孰れも怫然として、苟くも學士號を有するものが斯る卑職など執れぬといふのが例のやうだが、ドウも日本の教育方針は誤つて居ぬかと思ふと話したので、頗ぶる感じたと歸朝後語られたこともあつた。

最高點で議會へ、大震災で感銘

氏は一度日本橋區から打て出て衆議院議員になられたとがある。當時の選舉事務所には日本橋區第一の長老といはんよりも、東京の長老とも謂ふべき菊池長四郎翁なども肅然として控へて居られたこともある。長身豊肉の上に、黒紋付の羽織に仙臺平の袴といふ菊池翁の姿は堂々として華族かとも思はれるばかり、翁は畫や篆刻（その子息もより以上と聞いた）をも善くし風流文雅の名士でもあつた。その他區内の重立つた人々が第一線に立つて援助された程、大橋氏には區内の信用が高かつた。それに博文館事業の關係から、印刷業や紙業やの人々も懸命に盡力した爲、氏の得票は、鳩山和夫

氏と競争だと評判されたが、竟に之を凌いで第一の高點であつた。氏の議會演壇に於ける演説は余も傍聽席で之を聞いた。何でも財政關係のもので、少しく彌次でも飛ぶと、氏は黙れツと一喝された。その疇の高いこと想ふべしだ。

余は氏が當選されてから後、假令實行されるまでに至らずとも、財政上に見解を打立て、大橋案の名を永く貽されてはと獻策した。余の言など俟たずと氏は斯く感ぜられたと見え、余の親友の圓城寺天山などにも或る種の調査を托してそれを参考とされたやうだが、不幸議會が間もなく解散され氏も再び議政場に出ることを斷念された、政治運動の愚かしさが見えた爲でもあらう。

氏は初めから統計を好んで視る趣味があられたやうで、統計集誌などを早くから見居られた。而して諸會社の考課狀等を一見して、最も素早く事業上の美點や缺點やを看破する材能がある。隨つて會社の監査役としては實に無類であると思はれる。

凡て頭腦の明晰な人に限つて、いふことに無駄がなく、極めて直截明瞭に筋道を辿るのが例で、殊に氏はその天性の高聲と雄辯（三夜會以來鍛へ來つた經驗もある）とで之を遣られるのだから、時として、恰かも人を馬鹿にしたものゝ如く、又極めて無愛嬌にも涉つて反感を招くこともあらうが、更に又却つて人に悦ばれることもあるやうだ。

三夜會で思ひ出したが、長岡市で氏と並び稱せられた渡邊藤吉氏は、實兄たる輿板屋といふ大呉服店を背景として一方に雄視されたが斯人は越後へ鐵道を布設すれば、土地の富は大抵他府縣のものに取り去られるとて、頗ぶる消極主義論であつたが、後に越後に石油が湧出するに及び、寶田會社を興して大に活動された。大橋氏も友誼上これに參與して、大株主ともなられたが、更に郷友として、少年時から懇意であつた大藏次官の橋本圭三郎氏（氏は平生これをケイ／＼と親みの名で呼んで居られた）を社長に推舉された。寶田が内藤久寛氏の日本石油と合同するや、橋本氏はその副社長となり、後に内藤氏の後を襲いで社長となられた。

余は大橋氏に對して多く金錢上の累を掛けた。氏は早くから余の短處を識つて、月給の前借りやら原稿料の前取りを戒め、且金錢は金錢そのものの自力でも金錢を作るから、少しでも貯蓄するが宜い左うすれば坐ながらにしてそれが類を呼んで大きくなる、足下の如く平生素寒貧で居ては、生涯ウダツが上らぬと屢々忠告もし教示もされたが、余の固癖は今以て矯正さるゝに至らぬ、眞に頑迷不靈とは是れあであらう。但余は金錢問題に於て慙す所なく掩ふ所なく、洗ひざらひ打まけると共に、此れがため我膝一たび屈すれば再び伸びがたいと思ふから、これを持掛ける範圍、他人のためならば格別、余自身のために之を最小區域に局限する、正直にいふと、余は氏以外、僅かに一二人にそのため頭が上らぬ丈けに止まつて居る。

大正十二年の大震災に、氏は本石町三丁目の店舗（博文館の編輯所と營業所、小賣店とも後には皆

茲へ新築移轉された)を始め、番町の邸宅、圖書館をも擧げて焼失した爲、心中にも餘程痛切な印象を受けられたと見え、余が出雲大社の神札を贈つたのに對して、將來日本は明治大帝を中心として國民一般奮勵し努力する外はないとて、元旦に參拜して頂戴された明治神宮の御札を余に贈り、且此頃は毎曉三時頃に起出づるが、神氣澄爽で、夜の明ける六時七時頃までの間に於て、大抵なことは考へられ、恰かも半日乃至一日と匹敵する効果があるゆゑ、余にも斯くせよと慫慂し越された。

和田豊治氏、二世澁澤

氏は一應東京商業會議所に據つて或る志望を伸べやうとされたようだが、中野武營翁の死後はその念を斷ち、更に和田豊治氏と提携して工業俱樂部を組織された。此俱樂部は寄附金も多額であり、會員も皆斯界屈指の粒選りで、商業會議所の如く、議員を公選するのでもなく、又會員として課税同様の特権をも持たぬけれど、會議所の如く公的で有ても權威の浮泛する傾向はなく、實威實力は寧ろ隱然たる一敵國の觀がある。然かも此俱樂部こそ實に氏と和田氏とが中心となつて造り上げられたものだ。氏と和田氏とは最も相許した仲で、和田氏は胃潰瘍で大正十二年に死去されたが、大橋氏が貴族院議員に勅選されたのも、或は和田氏の後任と見ても甚だしく差支へはあるまい。

和田氏は慶應義塾卒業後、米國に渡り、皿洗ひまでして苦學されたが、曾てポイコットなる文字が

歐米新聞に見え出した時、小幡篤次郎先生等が此文字の意味は判るやうで判らぬ、ウェブスターの大字典にも見當らぬとて、遙々和田氏に問合せられると、氏は愛耳蘭語で非買同盟の意味だと説明し遣つたとて、屢々之を語られたこともある。余が懇意になつたのは新聞の富士紡績記事に誤謬があるとて、専務の某氏をして余を訪はせられてからで、其後大谷聽濤、須崎默堂兩氏と前約に由て向島の邸に氏を訪ふた時、氏は書齋で、卓中からウキスキーなどを取出し、且内君をも招いて紹介されたが、余等が日本酒を好むと聞いて、更に席を樓上の日本室に移して對酌した。席上の女性に余が餘り丁寧だとて恠み問はれるから、令夫人ではないかといふと、氏は、是れは先刻のと全く別人で、植半の女將だと聽かされて、一坐絶倒したこともある。

氏は業務煩劇なのに、向島の如き僻地に棲み、殊に道路迂曲で自動車の運轉さへ窮屈でないかと問ふと、氏は唯母堂が此家を好まれるから動かぬのだといつて居られた。以てその孝心の凡ならぬことが知られるが、後附近の土地家屋を買潰して、自家の門前から一直線に向フ島の堤上まで新道を開かれた。是れは極めて近く、又廣々としたもので有つた。

聽濤氏が氏の年收幾許かと問ふと、會社からの俸給や株式配當のみでも二拾五萬圓を下らぬとの答であつた。去らば吾等の政治運動費としてその一割宛を寄進せぬかといふと、イヤ未だく政治運動に出金する程には參らぬといつて居られたが、併し斯様の問答があつたのを機縁として、余は聽濤氏

が米子市總選舉に立候補した時、和田氏から運動費の寄進を求め、そのまゝ、村井銀行から米子へ爲替を取組んだこともある。氏が竹越三又氏の日本經濟史出版に就て、その費用の負擔者となられたことは幾んど公知の事實だ。

氏は又余の請ひを容れ、余の舊藩主の公達で若隱居となられた方を引受け、之を富士紡績小山工場の事務員に採用された。始めは華族なんテ何も出来ぬ厄介者だがと難色あつたけれど、余が其艱難を経た上夫人もクリスチャンだからと推返し懇請したので、到頭承知された其親切は感謝措く能はぬ。氏は又後に麻布飯倉の邸に移り、茲で病に罹られたのだ、余が其治療祈念に大社神札を贈つたら、病床の間に拜すると言ひ越されたが、惜むべし、終に起たれなんだ。

聽濤氏等は、濫澤第二世たるべき人物はといふ問題に對し、一議に及ばず和田と提言したものが世間また多く然かく認めて居たやうだ。和田氏莫逆の友なる大橋氏たる者、大に徳を積んで、第二世濫澤たるを期されては如何であらう。氏は現に濫澤子爵に拔擢されて瓦斯會社を引受け、始めてその技倆を實業界に認められた機縁さへあるではないか。

加藤高明伯の如きも、頗ぶる氏を器重されたやうで、現に大震災後、氏が引越された本郷弓町の邸（これは氏の令息進一氏が建てられたのを譲受けて移られたので、氏は店などこそ相當擴張しても自分の住居は茲で十分だといつて居られた）を見舞ひ、三時間近くも懇談されたと聞く、が和田氏歿後

氏が貴族院議員に勅選されたのは、恐らくは加藤伯の推舉であらう。

氏が乙羽氏を妹婿に迎へられたのは、流石に慧眼能く人を織るものだ。乙羽氏は文士として相當な地位を占められた上、伊藤山縣の諸公にも愛せられて、博文館と此方面とを結ぶにも少からぬ功績があつた。唯不幸早世されたけれどその未亡人にして氏の妹なる時子女史は、未だ三十歳に達せぬ時から寡居し、遺子（佐太郎氏）を守り立て堅貞を全ふされるのは、流石に氏の同胞として稱すべきであらう。次妹の配たる光吉氏も亦一材物で、之を拔擢した氏の識見も亦稱せざるを得ぬ。

須磨子夫人、入道の茶人

大橋氏は日本俱樂部定連の一人で、午餐は大抵茲で認め、而して柳澤伯を棟梁に、服部金太郎、渡邊亨の諸氏と幾んど毎日のやうに將棋を闘はせられるといふが、餘り御上手でないやうだ。

團基も始め稽古のため、小林鍵太郎といふ三段の先生を師匠とされたが、併し一向に上達されぬのみか、却つて側で見て居られる進一氏（第一子）の方がズン／＼腕前が進み、實力二段にまでなられたさうだ。去れば父子對局の際など、爺の威光で強ひて白石を持ちながら却つて七目八目と置かれるといふ珍談もあつたが、後には將棋専門となられたらしい。

此進一氏は撞球にも趣味があり、自宅へビリヤードを設けられた程で、是にも天才の光りが著るし

い、少時體質が弱くて温泉などで保養中、圍碁や撞球を試みられた爲めであらう、將棋とても恐らくは遠く爺を凌ぐ腕前であらう。

此進一氏は今は牛込へ立派な洋館を作つて隠棲に齊しい生活をして居られるが、是れは甲州の若尾家から嫁入られた夫人が若くて死去された故のみでなく、體質脆弱な爲でもあらう。

氏の第二子正介氏は慶應義塾で野球の名選手であり、學生間の驚異であつたが不幸天死された。新太郎氏はその弔慰のため肺結核研究費として、一萬圓を寄附された。氏が公共のために出金を惜まれぬことは茲でも窺はれる。

佐平翁から松子夫人を逸す可らざると共に新太郎氏を語るには、その須磨子夫人を眼外に措く能はぬ。

大正十二年大震災の時、夫人は家にある名器を擇びて總て土蔵に入れさせ、自分で指圖して扉その他へ厳しく味噌を以て目塗りをなし、然る後徐かに避難されたといふ。未曾有の大震災で人々狼狽して度を失ふ時（新太郎氏は生れつき大の地震嫌ひだから、定めて眞ッ先に飛出されたであらう、以前も地震のある毎に西洋室を恐ろしい音を立て開かれるとて、崖下の町に住む武島慶四郎氏が、大橋氏の地震嫌ひなことを余に語られたことがあつた）夫人が沈着で用意に抜け目なかつた爲、氏が苦心蒐集された書畫其他の多く名器類の満足に保存し得られた功績は、確かに特筆すべきであらう。夫人は又

茶、活花、琴など婦人一通りの藝に精しいのみか、書も達筆で俳句にも天才の閃きが輝くと聞く。

氏が近年重病回復後、茶ノ湯を催ふして、東都茶客中の先輩等を驚かされるのも、恐らくは其道に抜かりのない夫人内助の功であつて、椿菴岩原謙三氏が茶客として多く夫人の援助に待たれるのと好一對であらう（ト椿菴氏夫妻と紐育以來相識る余は、遙かに想像した、然かも中らずと雖も必ず遠からずと信じて居る）又松雪菴の大橋氏と椿菴氏とが十徳姿で、濟まし反つて釜前に鎮坐される珍景をも想像する。

夫人も子福者だが、その男性方は皆材能に秀でられ、令嬢も才色兼備で、現にその長女は金子堅太郎子爵の令嗣夫人である。

第七 中央新聞時代

入社始末、我政治思想

明治二十三年の秋の中頃かと思ふ、廣津柳浪氏が一日飄然として余を駿河臺の下宿に訪ひ、大岡育造先生が論文を書く記者一人を欲しいとのことで、余に勧めらるゝ所があつた。時に余は山龍堂病院から退いたものゝ、痔疾を繼發して悩んで居た頃ながら、之を肯ふて先生を團子坂の別邸に訪ふた。無論豫約の上で案内者が柳浪氏であること勿論だ。

大岡先生は此頃繪入朝野新聞を買収し、中新聞と名けてその社長で居られたが、場處は銀座四丁目の今の山崎呉服店の處だ。此邊は一種の新聞町ともいふべく、銀座と尾張町との相對する四ツ角を總て新聞社で占據して居た。即ち中新聞は以前曙新聞のあつた處で、其が江戸新聞となり、繪入朝野を経て中新聞となり、横向ひの今のカフェータイガアの在る處は余の書生時代公店樓といふ牛肉店であつたが、後に毎日新聞（始めは東京横濱毎日新聞と號し、數寄屋橋外にあつたのが尾張町へ引越したのだ）又其直ぐ眞向ふは自由新聞から曙新聞となり、その横向ひ（即ち中新聞の眞向ひ現に服部時計店となつた）朝野新聞が居たがそれも姿を消して中新聞と毎日新聞文けが現存した。

中新聞といふのは、小ならず大ならずといふ意味なそうだが、後に余の提言を容れて中央新聞と改められた。余の去つた後山城町へ移り、震災後の現在は帝國ホテル後といふよりも、政友會本部の後といふ處にある。

先生と初對面の時、余は半横臥で相話した、痔疾のためだが、先生は心中で随分無遠慮な男だと思ふたと後に話されたことがある。何でも博文館と兼務で、半日勤めといふので、而して月給は博文館と同額であつた。

スルと新太郎氏は、余の擔當し居た日本之政治は兎に角、日本之文華などは毎々發行期日が遅れるのに、日刊新聞を兼務して何とするのだとて非常に怒られた。當り前からいへば一應氏にも相談の上その諒解を経るのが本筋だから、其怒りは當然過ぎる程當然だのに、然るに余は永々病院などに入つた爲、借金が嵩んだからそのため餘儀なく兼勤する丈けだなどと、理屈にもならぬ理屈を捏ね返した。茲で平生怒りッほい佐平翁が却つて温顔微笑で双方を押なだめられたのも妙だが、余は例の不得要領で、到頭新聞の方へ轉じて了つたが、お蔭で月給は矢張半勤分に止まつた。併し是れが余の帝都の檜舞臺で新聞に關係した第一歩であつた。

大岡先生は始め神田淡路町へ輿論社といふを設け、茲から輿論新誌と題する政治雜誌を發行された

こともあるから、言論家として既に名高かつた。殊に第一期衆議院議員として山口縣から選出されて居た。

余の入社後、間もなく第一期帝國議會が開かれ、先生は議會から歸り掛け毎に出版社して、その意見を余に草せしめられる外、議會に於ける形勢や、民黨（在野黨）や、吏黨（政府黨）やの駈引をも余に記せしめられた。先生は批評に於ても、ニュースを捉へ且扱ふことに於ても、實に天成の好記者だが唯不幸自ら執筆が出来ぬ丈けであつた。

議會のない時は、余を自邸などへ呼寄せて滔々辯じ立てられる、余唯一人を相手によくも首尾完全な演説が出来ますネといふと、先生は、イヤ貴公が聞上手なので、多衆を相手にすると些とも氣持に變りがないなどと言つて居られた。

余は此新聞にあること實に滿十年以上に及んだから、頗ぶる思ひ出が多い。余の政治思想なども幾んど茲で多く養成されたといつても宜い、即ち余の先生に負ふ所は多大であること申すまでもない。唯先生は始め西郷侯、品川子の國民協會に參してその樞位に居り、後に伊藤公の帷幕に入り、政友會組織の膳立にまで與かり、爾來政友會の一長老として、衆議院議長、文部大臣にまで成られたけれど、余のみは記者として常に公然三者の地位を嚴守しつゝも、政治的に、國民協會以來頑守して移る所なく、政黨に籍を置いたところないけれど、思想丈けは兎も角一貫して居ると自信する。是れは峭陰先

師からブルンチニリーの學説を吹込まれ、爾來英國派佛國派よりも寧ろ獨逸派に傾いた影響であろう。

珍記者揃ひ、外米は高價

余が入社してから間もなく來たのが水田榮雄氏（南陽）だ。是は雄辯會中の雄辯家で、漆間眞學氏の紹介であつた。大岡先生も其雄辯には常に感服し居られた。

水田氏は日清戦役の際、海軍に従軍（浪速艦に搭乘）して殊に功勞があつたので、英國へ往かせられたが、倫敦では水道鐵管に入込んでまで視察したといふ綿密家で、大倉喜七郎氏（今の聽松男）が溝口伯家の姫上と結婚の際、密かに式場なるテーブルの下に潜り込み、媒妁人たる伊藤公が新夫新婦に與へられた訓誨を聽取るなど、會ては探偵小説を翻譯して黒岩涙香氏の壘を摩せんとした丈け中々その方の趣味にも豊かで有つたやうだ。氏は又非常な苦學生で、郷里の淡路を出て大阪に於て豆腐賣りまでされたが、荷をかつぎ出しても、偕て豆腐ウと呼ぶことが出来ず、大分それには悩んだといふ。意思強固で守る所には強いが、一面また懇切で如才ない點もあり、終始一貫中央新聞に精勤し、先生が、新聞を擧げて政友會へ引渡された際、始めて砂糖聯合會の事務長となられたが、其會長山本梯次郎氏（前の農相）時代に、各新聞の主なる團體たる春秋會員をば、始めて兩國の某樓に招待し、新聞社會には兼て不評判勝ちな砂糖業者に對する反感を一掃する端緒を啓いたのは、流石に多年斯界にあ

つた氏の手腕と稱すべきだ。

水田氏に亞で入社したのが田村參次氏（號江東）だ、早稻田出身で圓城寺天山、栃内正六（今は後醍院姓）片岡孤筈などと同窓でその容貌が渾て團子を併せ作つた如くに圓く、性質も亦圓轉滑脱で、何人にも愛好された。滑稽味も豊かで、曾て米價暴騰時代三井物産に依頼して一カマスの外國米を余の家に取寄せた時、氏も生計節約上外米を食用しようとして、其分配を受くべく余を本郷西片町に訪れ晚餐を共にした後、好い氣持で三四升の外米を風呂敷包にして提げ行かれたが、何分にも重さに凹垂れ、神田邊まで人力車を雇ひ、更に鐵道馬車、その先から白金三光町の自宅まで又人力車で、車賃が米代の幾倍かになり、何のため外米を食ふのか無意味となつたとコボして居られたが、余も外米のマヅサを補ふため、ウンと副食物を良くして、同じく儉約の趣旨をフイにしたとて、多くの友人連に笑はれた。

稍々後のとだが顔の恐ろしく長い巖谷小波氏等が發企して、長顔會といふのを紅葉館に催ふされたことがある、皆馬を欺むくばかりの連中の會合であるのに、盆の如き丸顔の田村氏が押掛けられた。立關で君は無資格だからと刎付けると、氏曰く顔とは額から額までのことであらう、此定義に間違なくば之を御覽じると、其頭と顔とを突出された。氏は若いに拘はらず早くから禿頭で（其ため江東は光頭に通すと余が尊稱を上つたのだと記憶する）その毛際はズツと後頭部にあり、額までの寸法が恐ろしく長いので、會員の面々も抱腹して其參席を承知したといふ奇談もある。氣轉の敏なことは流石に江戸ッ兒だ。

大岡先生が中央新聞を政友會へ譲り渡された時、氏のみ居残り、第一の長老となられた。後に原敬氏が郷里盛岡市の新聞を經營すべく、氏に託され、氏も一旦承諾されたが、その内君から、氏一人を盛岡へ手放し遣れば、飲んだくれてばかり居らうとて抗議を提出（内君は當時某高等女學校の教師で東京を離れ能はぬ事情があつた）されたので、話が破れた。平生餘りに飲んで、腎臓を損ぜられたと聞き、余から節酒を忠告すると、酒と討死すれば至極本望だ、妻はあつても子供はなし、毛頭も後顧の患がないからと笑ひ飛ばされた、萬事此調子で類ひ少い樂天家だ。

小林天龍氏（慶次郎）が始めて新聞記者となられたのも中央新聞でだ。氏は大岡先生の莫逆の友たる高梨哲四郎氏の書生であつた縁故から入社されたのだ。双子唐棧の揃ひの羽織に角帯といふ粹姿で少しも記者風はなかつたけれど、芝居通でもあつたので、其方面を主として擔當され居たが、早筆で然かも文字が上手で、原稿など實に立派で有つた。

高梨氏は食道樂で、自身三十幾個の漬け物をするといふ。天龍氏も芝居道の奇材田村成義氏の銀座四丁目の家を明けさせて其處に住ひながら、矢張種々の漬け物をして、それを自慢に余等と飲みつけられた。

大岡先生の舎弟力氏（號長峽）も入社し來られた、書は中々上手だが原稿を書く筆が遅い上に萬事沈着で悠長なので、印刷が間に合はぬことが屢々あるとて、活版部から抗議された程だ。併し好男子丈けに遊びも好きで、其ため余に高利借の連印をさせたまゝ、一向構ひ付けられぬので、果ては執達吏が余の家へ差押へに來たともある。當時余は新婚早々で、然かも花嫁の祖母が泊り掛けに來て居る處なので、余が酷く當惑すると、執達吏は頗る氣輕に、ナニ差押へなんテ氣にするものでない、文學士の辰巳小次郎さんなども自分が既に幾回差押へたか知れぬなど、恰かも慰め顔に笑つて居た。兎に角余には破天荒なことなので、長峽氏に絶交すると言ひ出すと、氏は足下の偏狹を憐れむなどと更に濟し返つて茶化して居られた。

それでも長峽氏は書畫の鑑識には一隻眼を供へ、初めはへんな虎や龍の古畫幅などを持って來ては余に贈り、隨分の堀出し物だなど、誇つて居られたが、後には眞にタイした物を探し出し、大岡先生をして舌を捲かしめられた。先生も其道に掛けての大家だが、始めは隨分イカサマ物を攫ませられ、それまで可なりな損をしたものだと言つて居られたが、長峽氏は草場船山の塾から出で、後には伊藤公や會禰子の囑に依て、京城日報の社長となり、頗る世に知られたが、不幸先年物故された。

天プラ十三人前、寺崎廣業畫伯

渡部乙羽氏（又太郎）も中央新聞に來られた。體こそ小さいけれど、恐ろしい健啖家で、曾て余と天金で晩食するとて、上天（上等天プラのことで蝦を資料とす）を十三人前平け、更に第二次會として吉原へ繰込んだ（乙羽氏は餘程天プラが嗜好と見え、余が其猿樂町の下宿に訪ふと、極まつて何時の間にか天プラをコテ／＼取寄せてお互ひにバク付いた）茲に乙羽氏の親友寺崎廣業氏が既に陣取て居て、三人ではしやぎ騒いだ、兩氏は共に繪畫叢誌に關係して、同じく東陽堂といふ書肆に勤務して居られたのだ。

その後三人で屢々交遊し、乙羽氏と廣業氏の濱町の僑居（清元の師匠で若い人）に泊り込んだことすらある。當夜廣業氏の室から階下の便所へ通ふのには、何としても師匠夫婦の寢室を通過せねばならぬので、或は一ツ寢の邪魔さへするところがあるとて、乙羽氏は酷く心配しながら、其先輩石橋思案氏（助三郎）を故郷の米澤市へ案内した時、思案氏が途中宿屋の女中などへ戯狎したのには大に惱まされたなどと語られたともある。廣業氏も雨の夜など二階からジャア／＼失敬するけれど、晴れた夜には其れも出來ず、殊に酔ふて水をしたゝか飲む夜など實に辟易すると溢して居られた。

後に廣業氏は余の本郷西片町に近い森川町に居を構へ、始めて結婚もされたが、當時は痔疾を醫する爲か、井戸端で盛んに冷水を浴びつゝ、往來の余と垣根越えに惡罵し合ふたこともある。

後年廣業氏の歿後骨董商がゾロ／＼遣つて來た。驚ろいて聞くと、先生は廣業さんと御別懇だから

定めて其書を多く御所持であらうと中川柳外さんから承はつて、御拂ひ下けを願ひに來たのだとの口上、併し余は何時でも書いて貰へるからとて、實は一枚も所有せぬと答へると、彼等も意外な顔付きで引下つた。

江見水蔭氏（忠功）も入社された。其紹介で田山花袋氏も來て、共に社會部を擔任し、殊に水蔭氏の日清戦役中に於ける短篇小説などは、素晴らしい人氣で、爲に中央新聞の聲價を高めた。又石橋思案氏も僅かな間ながら入社されたかと思ふ。氏も風替りな仁で余を下宿屋に訪ひ、備前焼の茶殻明けがオツだとして突如懐中し去られた。氏は此傳で紅葉館からも、飯道具や茶器の一式を取揃へられたといふ。それは宜いが酔ふて愉快になると、嬉しい／＼と盛んに他の頭といはず肩といはず、平手でパチ／＼叩かれるので、余も屢々痛さに堪へられなんだこともある。

水蔭氏は意匠湧くが如くで、新聞意匠部などに取ては、實に優秀な適材であろう、其の熱心された紅葉館のお福嬢が他へ嫁してからは、心機一轉、品川方面へ入浸られることとなつた、川上眉山氏（亮）も余と懇意で、屢々余の宅へ泊まれたこともあるが、余が食道樂屋の島慶を識つたのも、實は其案内に由つた。

眉山氏は長身白哲、眉目優美な好男子で、態度も甚だしとやかだが、中々皮肉の名人で、藝妓などを冷かされると、藝妓は到頭悔し泣きに泣き出すことさへある。曾て水蔭氏と二人で品川の島崎に遊び、

その後眉山氏と余だけで同じ家へ行くと、水蔭氏こそ來ぬけれど、其金紋付の茶器や、同じ紋を染付けた岐阜提灯などを見せ付けられて、眉山氏甚だしく憤慨し、殊に痛飲されたこともある。

武内桂舟畫伯（銀平）も中央新聞の挿畫を擔當し居られた。氏は紀州藩の出であるが、少時家計の窮乏を救ふが爲、狩野派に學んで筆を以て陶器繪まで描かれたといふ。又或る店へ奉公の時、鯛のむき身と豆腐汁が好きで十分に味はれぬまゝ、他年出世したら、ウンと食て見たいと念じ居たが、今家を持ってそれを實行して見ると、何だか詰らぬなども話して居られた。實に竹を割つたやうな而して露ばかりも邪念のない好人物だ。

畫伯の令嬢も亦美しい人で、殊に父君の意匠で衣裳の色彩や、髮形にまで心を入れられる爲か、全く人形のやうで、生長の上は定めて艶名を馳せられると思ふて居た。

小村蹴月氏（芳三郎）も可なり長く居られた。小説を書く傍、書畫の鑑定にも長けて居られたやうだ。能く氏と相携へて堀紫山氏（成之）の家に遊び、盛んに將棋など闘はせたが、其二階には上司小劍氏が居られた。ニューとした仁であつたが、後には小説界の一家家となられた。

幸徳秋水と同じ頃、村松恒一郎（柳江）、石川安次郎（半山）の兩氏も居られた。共に謀叛組と稱せられ、種々の計畫を試み、就中村松氏は、新聞を合議制にしたいと大岡先生まで提案し、例の雄辯滔滔々として其理由を説明されると、先生から、イヤ新聞社は全く自分一個の私有物だから、倒否共に他

の容喙を受ける由縁がないといはれて、そのまゝ引下られたなどの奇談もある、此兩人は後に衆議院議員ともなり、殊に村松氏は東京市會にも出で、依然奮闘中だが、義太夫が其隠し藝だ、否氏は隠して置けず頻りに之を開放して公布されるので有名だつた。

議員のニツクネーム製造、安廣伴一郎氏

余と小林天龍氏とは、筆が早いといふ理由から、衆議院傍聴を擔任したことがある。此頃は記者の意匠で盛んに議員にニツクネームを附與し、中にも工藤行幹氏をチンキウ（緊急動議といふのを青森でチンキウといふ）、井上角五郎氏を蟹甲、田中正造氏をトチチン（栃木鎮臺）、楠本正隆をマヌダン（間の抜けた團十郎）などが最も傑作で草刈親明氏自らスンメイといふのを珍らしくないとしてオヤアキラとした。是は大抵日本新聞の淺見南八氏が名付親だが、中には余が付けたのもある。當時策謀する連中を余がヤクキ組と呼稱すると、朝比奈知泉氏が躍起組の字を宛てられた。

青森まで鐵道の始めて通じた時、開通式の終つた後を見済まして、余は彼處へ見物に往つた。先づ仙臺に一泊した時、オヤアキラ氏の邸前で、車夫が車を停めて、是が有名な草刈スンメイさんのおやスキでと、何の變哲もない唯黒堀のある士族屋敷を妙な節付きで説明されたのも、宿屋（針久本店）の若い嫁や娘の語言が能く判らぬのには辟易した。鹽釜から松島まで小舟を雇ふたのは、悠々然として

て十二分にその景趣を貪ほり視ん計畫であつたが、島々が一列になつて長い一線の岬の如くに見えて、却つて一向詰らぬには失望した。併し松島の三階樓に一泊し、樓上から又は五大堂邊から、近く大小の島々や、遠く金華山沖を眺める景色は、流石に激賞を禁ぜんんだ。

青森で縣廳を訪ひ、知事に面會を求めると、受付老人のいふ所が外國人と應對する以上にトンと判らぬ、頻りにゴタ付いて居る處へ人を玄關まで送つた序だとして若い官吏が來合せ、自分も一ヶ月前に赴任したばかりだが、言語不通で當惑したとて、大に余に同情して通釋して呉れた。それに據ると、知事は停車場附近の地所檢分に出掛けて留守だとのことであつた。此官吏から縣の諸統計など貰つて要領を得、歸りがけに野菜賣りの婦人に付添ふて其呼聲を聞いたけれど、依然として少しも判らなんだ。仙臺で郷里の先輩たる判事の五十嵐佐備氏を訪ふて之を話すと、仙臺でも物の名稱さへ違ひ、言語も始めは不通で困つた。公判廷で或る被告人を取調べ、再三繰返し質問したが、閉廷後書記の注意で被告が餘り執拗に問はれるまゝ、竟に反對の意味に答辯したことが判つた。若も此書記の注意が無かつたら判決にも重大な錯誤を來す危険があつたと、寒心して話し居られた。

仙臺から福島へ着いた時は、盛岡の宿驛から紹介し呉れた旅宿へ投じた。驛から人力車に乗ると其れが直ぐ驛の前なのだ。女中が來て何かいふけれど些とも判らぬ、何れ挨拶でもあらうと宜い加減にあしらひ置くと、又遣て來て何かいふ、又宜い加減にして置くと、今度は番頭が來て、車夫から餘

り近くてお氣の毒だけれど、規則だから三錢の車賃を呉れといふのだと判つた。此行實に言語のため宛ながら外國旅行以上の感があつた。

青森は内地の北端だからとて、殊に遊廓を一見した。折しも八月中旬であつたが、紺緋の單衣に襟の掛つた袴半纏を引掛け、容貌までも飯炊然たる女性などが遣て来て、臆面もなく喋々し、三味線でも弾かうかといふ。貴公にも弾けるかといふと、盛んに唄ひ且弾く、後にツケを見ると、藝妓音曲料といふのがある、藝妓など一人も來ぬではないかと怒ると、件の飯炊氏がそれであつたと判つて、實に阿然たらざるを得なんだ。併し後年再び青森へ行つた時は、藝妓など皆藝妓らしくて、一見間違へる氣支もなかつた。

安廣伴一郎氏が新たに歸朝されたといふので、赤坂靈南坂下の中山寛六郎氏の宅へ往訪した。安廣氏は茲に旅装を解いたからだだが、氏の蠻からも亦頗ぶる余を驚かした。二子の羽織を着流した風采の揚らぬ小男の癖に、盛んに西洋の惡口を捲くし立てられる。恐ろしい變物だと思ふたが、後にはアンパン／＼と綽名を呼ばれながら、其實、遣り口が凡麟常介と全く違つて居る。聞けば何人にも畏れられる山縣公の面前でも、無遠慮に公に反對もすれば惡口もするといふ。成程官僚中には珍らしい人物だ。その夫人は山縣公の姪だとか、曾ては余の住處の近くの本郷西片町に居られることもある。

中山寛六郎氏は又鷹揚な人の好い仁で、諸事アケスケであつた。曾て山縣首相の秘書官時代、女中の奴め氣が利かぬから、拙者が此様にお嬢さん（多分後の船越光之丞男夫人であらう）の下駄まで始末せにやならぬなどとプリ／＼して居られたこともある。

三井の素葉抜き、珍營業部長

中央新聞の營業部長に井上良次郎氏といふ髯の中から顔が出たといふ容貌の持主で、然かも臆面のない雄辯家で飄逸な仁があつた。何でも大岡先生が埼玉時代の知己で採用されたのだとのことだが、此仁頗ぶるの遊び好きで、宜い年をしながら余等編輯の若い連中の先棒となつて盛んに泳ぎ廻り然かもその費用を皆月給から差引くので、お蔭で皆が月末大苦みといふのが例であつたのも面白かつた。白井喜代松氏も社中の錚々者であつた。速記者で年々長野縣會には極つて速記を引受け出張されたが、實は房州出身だ。勤勉家で頭腦の明晰さは絶倫であつた。子供澤山で収入が少く、常に生計に苦まれたやうだ。曾て數日間缺勤が續いたから、病氣でもあらうと思ふて見舞に往くと、芝南佐久間町の路次中の長屋住ひで、氏自身赤ン坊を背負ひ、オムツの洗濯をして居られた。實は妻が又々お産をして病むたので、餘儀なく此始末だとのこと、余も流石に涙なきを得なんだ。

氏は益田孝男の談話を速記した緣故などから其爲人を男爵に識られ、三井家に入て益田男の秘書役のやうになられたが、其話が面白い。始めて採用された時の挨拶にとて、三井の各家に御禮廻りをす

る。口上は總て先輩から教はつた通り、御採用を蒙つたに就ては爾來忠勤を抽んでるといふ意味を申し述べる。之に對して各家の三太夫殿が一々白木の三寶に長慰斗を持出し、恭々しく之を拜禮させるが其れが皆立關の控室であつて、主人公などは影も見せぬといふ（それはその後撤廢された由）

「參事に任ず」といふ辭令や「大阪へ出張を命ず、旅費手當は管理部より受取らるべし」などいふ指令が立派な鳥の子紙に記されたのを氏は余に示されたことがある。余は記者生活に入て以來會て書いた辭令などを貰つた経験がない。強ひていへば、萬朝報時代に、郵書を以て本月から貴下の俸給を幾許に引上ぐ但秘密に付他社員に示されぬようと美濃紙四ツ切れに刷つたのや、其退社の際巻紙に書いた感謝狀と封金を頂戴したのみである、されば三井家の例には實に目を丸くした。

後年白井氏の説に、三井家では一部の代議士や、又重もなる記者などには、それ／＼盆暮に封金を贈るが、その人の名は判らぬ、判つても告げる譯に參らぬが、何でも二千圓組、千圓組、五百圓組（各年額）といった調子に階級があり、或る記者などはその社より受ける俸給よりも寧ろ多いのもあるといふことだ、余はそれといはなただけれど、會て久原家の或る課長と遞信大臣秘書官松元剛吉氏と自動車を飛ばした時、暗に探りを試みると、久原組は何分新興會社ゆる三井三菱の如く未だ手が廻らぬとやうに答へ、暗に三井三菱と議員や記者團の關係を心得て居るらしい口吻であつた

白井氏は相當養老の資を得てから、心臟病のため引退されたが、多少相場にも趣味があつたものゝ如く、余は松下軍治氏さんが相場に猛進するのを見て、其豪傑なることを推知する、自分も今若干の株式を手にして居るが、その値段の高下が氣になるため、毎曉新聞の配達を待ち兼ね、此奥の高い二階に寢て居ても、下の遠い門外の郵便受箱に新聞の入る音が不思議に聞える、それ程神経が昂ぶるのに、平氣で大きな相場をする松下さんは、必ず豪傑でなければならぬと論ぜられたこともある。氏は不幸既に長逝されたが、常に舊誼を忘れず、自身兎に角衣食に餘裕があるに至つたとて、屢々舊友を馳走して枯腸を潤ふす情誼もあつた。

氏はまた三井家の傳記編纂に與かつた緣故からか、歴史にも趣味を持ち、河村瑞軒傳を作るべく諸書を獵涉し、その郷里に到つて寺の過去帳までも調べたが、堂々たる書籍でも生年月にさへ宜い加減なのがある、悉く書を信ぜば書なきに如かずとは能く言たものだなど、話されたこともあり、瑞軒が贈位の典に浴した時、氏はその後裔の遺族を一方ならず世話されたやうだ。

今の三越の前身たる越後屋が、三井家の事業として爲替の外、駿河町に呉服店を出し、茲で仲間その他の下級者のため、白木綿を六尺宛に切賣りした爲、大に便利とされて繁昌したことや、三井家の先祖の英傑であつたことなども氏から聞かされた。

情死未遂、その實驗實話

此頃、悲劇にもなるが又喜劇でもある情死の實驗談を直接耳にした。情死の當人は中央新聞社會部の外勤員として、殊に警察方面を擔當する庄司といふ社員で、その實弟は編輯の給仕を勤め居たが、此弟も中々豆々しく實體に立働らいて役に立つ男であるから、後に大岡先生の自邸に引取られた。兄庄司も顔立ちの揃うた、何處となく柔和で氣樂らしくて、聊かも憎氣のない純江戸ッ兒であつた。

それが測らずも品川遊廓に於て情死したといふ電話であり、更にその確實なことが再報せられて、小林天龍氏から一同に報告すると、折りしも諸新聞紙を綴り付け整理し居た弟庄司は俄かにオイ／＼泣き出した。兄庄司の情死といふ珍事には、何故か一同面白い事柄のやうに感ぜられたが、若い弟の方が手放して泣出したのだから、一同却つて驚ろくと共に俄かに氣の毒になり泣くなく、兄貴は幸ひに生き復つたとて百方之を慰さめた。

數日経てから兄庄司がニューツと編輯局へ入て來たが、頗ぶる益槍して氣拔人の如く、影が薄いやうにも見えて、何かいはれると、エヘラ／＼と苦笑するばかり、余は異様に感じて、その情死の顛末やら感想やらを聽くべく、好奇心から彼れを或る料理屋へ招き、盃を交はしつゝ、巨細に質問した。而して聽得た事實は左の如く、小説家ならば一種のユーモラスな物をも書き上げ得られやうと思ふ。

彼れの馴染んだのは、品川の小店（小樓）の娼妓で、孰れかといへば、溫和過ぎて寧ろ寂しい位な女であつた、彼れは格別惚れたでもないけれど、女が勤め氣離れて親切にし、時々身上市りまでするので

負債が嵩む一方であり、年順からいつても容姿からいつても少くも中以上の地位に在るべきなのに、唯客の少いため常に最下位に置かるゝのみか、負債が加重して、何時自由の身となるか、判らぬのみか、將來にも何の曙光もないとて日に／＼悲觀を深めるのみだ。ノホホンの彼れも流石に氣の毒になり心から之を慰さめたり、果ては女の涙に誘はれて、自分も泣き出すことさへもあつたので、女は彌よ情を深め行くばかりだが、或る夜、女は顔色まで蒼ざめて、最早生きて居る甲斐もないから死ぬと言出したので、彼れも誘はれてか、さらば自分も一處に死なうと言出した。女は彌よ悦んで、しかと彼れに縋つて、眞實死んで呉れるかと問ふので、彼れも何としたのか、フラ／＼と本當に死ぬ氣になり、勿論と答へたまゝ相抱いて泣いた。彼れは留め度もなく涙を流しながら、彌よその支度をするにととし、彼女と日時を約して一旦家に歸つた。

家に販つた彼れは、死ぬの活きるのといふ理屈も事由も何もないが、所謂死神に取付かれたものか死の支度として身邊を取片付け、且親への遺書など認めて、魂の抜け殻同然、又もフラ／＼と彼女の許へ行いた。

それで彼女と別に語るでもなく、語らぬでもなく、お互ひに相替らずの愚痴話しに時を移して、偕て彼れが用意し置いたモルヒネを服用して、女と相抱いたまゝ何事も判らぬやうになつた。それが死んで了つたのであらう。

するとやがてのことに、自分と女とが、井戸の深い／＼底から、引上げられたように感じて來た。恰かも多くの人が自分や彼女を呼ぶようだが、一向に答へ得ぬ。到頭井戸から引上げられた如く感じ而して警察の提灯などが見えて、人々のギャ／＼いふ聲がするけれど、自分丈は何としても物が言へぬ。

それから何時経つたか判らず、漸く少しく意識するようになってから、警察官と醫師とが出張し來つて種々手當を加へた爲、蘇生したことが始めて判つた。

後に親への遺書などを見ると、何處々々の蕎麥屋に、何と何との拂ひ残りがあるからそれを仕拂つて呉れなど、涙のニジンだまゝ認めてある。先立つ不孝を詫びるとか、死に往く罪を謝するなど書き置くのは餘程情死し馴れた奴ですなアと、彼れ庄司は語つた。

それから數年月を経てその後の成行を聞くと、彼女は洲崎の方へ鞍替へさせられた。品川の樓へは足留めを喰つたことは昔からの掟であるといふが、洲崎へは一二度變名で通つたことがあつたけれど其後自然と疎くなつた。唯彼女から紺小倉の帯を贈つて來たことがある。唯それ丈で、爾來杳として相知らぬといつて居たが、彼れは更に何う工面したか、高輪と品川の間へ龍宮樓といふ些かな料理店などを開いたこともある。

頗ぶる異様の話で恐らくは世間に餘り例のないこと、思ふから、殊に茲に記して置く。聞く所によれば或る學生は中禪寺湖で戀仲の女と情死して更に兩人とも蘇生したが、死後の女の容貌や態度を見てからは戀愛など全く消し飛んで却つて憎惡するようになり、蘇生と同時に絶縁したといふが、此例の方が却つて多いとも聞く。

賈物は養老物、實に多士濟々

中央新聞時代に測らずも乙羽氏との交際から、寺崎廣業畫伯と懇意に成り、後に畫伯が橋本雅邦翁の門に入り美術學校の教授となるや、余も畫伯等の手引もあり、且博文館の岸上質軒氏の誘引やら勧誘やらで、雅邦翁の一門の宴會などにも數回出席したこともあるが、その席上では、何でも岡倉覺三氏（美術學校長）が正座を占め、雅邦翁は又大黒柱として總ての中心となつて居られたようだ。

酔が漸く廻ると、互ひに無遠慮に話合ふ、然かも横山大觀氏その他雅邦門の錚々たる連中が他と何か争ひらしいことを語つて居られるが、余の耳には一向筋が通つて居らぬので、余は此等畫家の争ひは何が問題なのだ、余等の職とする政論は、善かれ悪かれ、目標が明確であつて、争ひは堂々として理屈が立つて居るが、公等の議論を聞いても、少しも合點が往かぬなど、酔ふて例の高聲で半ば罵倒的に捲くし立てると、雅邦翁は莞爾として、我意を得たと云ふような顔付で居られたようにも記憶する。當時翁等は能く養老物々々といはれる。何のことかと問ふと、廣業畫伯が、これは曾て翁を奉じ

て岐阜縣へ往いた時、縣下諸處の金持連が自慢の畫幅を持出して鑑定を求め、十中の八九は幾んど贋物なので、余等若い門弟ども遠慮も斟酌もなく、此奴はイカヌと言出すと、先生（雅邦翁）が目顔で抑へて、まア能く判らぬがなどと、上手に、イヤ苦し氣にお茶を濁し居られたが、孰れも辟易して退却し、而して、これ以來贋物のことを綽名して養老といふのだと説明された。これは岐阜縣のみでなく、地方隨處に皆然りであらう。

刀劍の鑑定には一家見を有する内田良平氏も、眞の名刀は寧ろ神社にある、東京日枝神社（赤坂山王）になどは流石に信用すべき名刀はあるが、大名物とても悉く信ぜられず、物數奇や金持などの藏品尙更注意せねばならぬと語られたこともあつた。天下何ぞ贋物多きやだ。往年大社參拜に來て松江市の古道具屋を漁り、主人が五圓とか六圓とかいふのを、五六十圓を投げ與へて、余は掘出し物などをせぬ、唯我眼で直段を付けるだけだと傲語したといふ細野二郎氏も、曾て山王下の邸に後藤新平伯や余等を招じて、例の書畫刀劍の自慢を逞ふし、取替へたばかりの青疊に刀を突刺し、斯の如くだなどと示すと共に、井上（馨）でも益田（孝男）でも美術品を自慢するが、彼等自身の鑑定では何一つ貰ひ得ぬで、皆御出入の骨董商を便り、それに由て手に入れる、鑑識の低いこと憫れむべきだと言放たれたこともある。併し當時は已に氏の氣のフレ掛けた頃ではあつたが、之を悉く狂人の狂言と片付け去るべきであらうか。

細野氏のことから思はれるのは、松江市の岡崎運兵衛翁の眼識だ。翁は苟くも掘出物など心掛けられずに、我意に適する物は、言はれるまゝの代價を仕拂ひ、一文でも負けるなどといはれたことがない。贋物偽作などは全く見向きもされぬので、骨董商も翁を畏憚して、如何はしい物など決して持參せなんだといふ。翁の珍什は數が少いけれど貴重品のみにて、曾て翁の留守中、或る博物館員が來て其藏幅を一覽し、某處で其非を批評した。後に翁が之を耳にして、彼れは陶器位識つて居ようが此畫の眞價など判るものか、爾來斯様な盲目共には、我藏幅など漫りに示さぬとまでいはれたといふ。

廣業畫伯は、平福百穂畫伯の先大人の弟子で、此先生の畫は余も西郷侯や大岡先生に隨つて東北行の際、秋田で一見し、其懸崖瀑布に紅葉の大幅が如何にも剛壯雄大なのに驚嘆したこともある。廣業畫伯も其仕込で腕前は相當でも、上京の當坐は一向に認められず、辛ふじて東陽堂の畫報部に執筆し或は古畫を模寫し居られたに止まつた。然かも珠竟に發見され、殊に天稟の英才は、雅邦翁等に妍磨されて大に光を放つに至つたのだ。

中央新聞には、大岡先生の趣味から下村爲山氏も居られたことがある、畫の外に超然たる仁で、余の本郷の家にある白藤花を愛し、一泊掛けに見物されたこともある。氏は俳句にも精しく、俳畫共に著るしく水平を抜いて居た。

芝の米屋の養子となりながら、依然畫筆に親んだ田口米作氏も中央新聞の意匠部に居られた、余が

曾て海岸線の開通を機會に、同じく中央新聞に居られた久保田金仙氏と米作氏とを誘ふて、勿來の關を見物し、序に平瀉灣の景色をも觀賞し、一二泊して歸ると、その餘りに我儘なことを大岡先生から突込まれたこともある。

中央新聞には、其時の遅速長短はあれ、文士として廣津柳浪、江見水蔭、田山花袋、松居松葉、渡部乙羽、岡本綺堂の諸氏も居られ、畫家としては武内桂舟、下村爲山、久保田金仙、田口米作の諸氏が有た。また以て誇るに足るであらう。

第八 日清戰役

新聞で旅順を攻略、ブカ〜宣傳の元祖

日清戰役は實に、我官民に取て劃時代的のものである。今でこそ支那を見縊るものも多けれど、當時は支那の大國たるに、曾紀澤が支那を眠れる獅子といつたことには、英國の有識者も多く裏書きを與へ、それに近くは丁汝昌が日本に未だない甲鐵艦を率いて横濱埠頭でデモンストレーションをするなどで、遠い元寇の亂以來、未だ眞に國を擧げて外國と戦つたことのない日本として、今更神風のみを待つべきでもないから、官民共に緊張したことは申すまでもない、彼の福澤諭吉先生さへ、日本の安危存亡の決する所だとして、献金は勿論梅干までも恤兵のため寄進された程で、一般官民の眞劍さは、今より想像も及ばぬ程だ。

明治十八年に死去した岩崎彌太郎氏も、其死する少し以前、三井に五百萬圓の金が出来たものかと傲語したと聞く、今や岩崎と相並んで幾億といふ大資産を有する三井家でさへも、明治十七八年頃は五百萬圓の金さへ容易に出来なんだ。其れが日清役で大活動をし、頗ぶる國家に御奉公もしたろうが

又大に儲けて頼に身代を伸ばし、更に日露戦役に至つて益々肥つたのだ。

これは三井三菱の如き大富豪のみに限らぬ。上來記し來つた博文館も然り、而して吾等關係の新聞事業も亦然り、此戦役のため新聞紙の必要が一般に痛切に感ぜられ、殊に益々廣く賣れ行き、而して新聞紙自身も亦改善に改善を重ねて今日に至つたのだ。米國が歐洲大戦で大成金となつたのは最近の例ながら、國運を賭して戦ふた我國亦然りである。

余も此劃時代的な戦役を見聞し、然かも記者といふ立場にあつたから、無限の感興あると當然ながら、正史も側面史も既に多く出來て居るから、今更その方面に筆を着くるは蛇足以上だ。唯記者として當時實驗した然かも一般外間で判らぬ事實丈けを次ぎ／＼に記し行くに止める。

當時余は本郷西片町から中央新聞に通勤し居たが、不便ゆゑ一先單身で新聞社横の或る下宿屋へ僑居し、更に大岡先生の命で、木挽町の佐倉屋（木戸孝允公の書かれた看版があるので名高い）へ田村江東氏と二人で引越しその替り夜中でも社に當直した。江東氏などは幾んど毎夜のように陸軍省に往き、余も氏と時々同道し、次官の兒玉源太郎將軍（當時は少將）を襲ふた。將軍は當時省中に詰め切りに軍服を脱がれたことがなく、夜はそのまゝ寢臺にごろ寢をするといふ絶倫な精勤振りであつたら、余等が竹の皮包みの壽司などを持參すると、是れは至極氣の利いた進物だナとて、ホク／＼大機嫌であられた。

佐倉屋には美しい娘があり、殊に其妹の方は素晴らしい美人なので、之を張りに來る狼社員が多く中にも松居松葉氏（本名眞立、今は松翁）などは宗匠然たる服装で來りされた。而して其都度牛肉鍋に美人のお酌で豪飲するといふ風で、何分にも意外に費用が嵩むから、一日狼黨が寄合つた處へ大岡先生が來て、從容として、職務の爲であるから柏軒江東の分は社の負擔たるは勿論だが、他は總ては自費にして貰ひたいと切り出されたので、理の當然に一同頭を搔き、而して美人も意の如くならぬのに張合ひ抜けしてか、追々影を薄くするに至つた。

茲に奇談といふのは、村松柳江氏が廣島特派員として一旦中還りし、二度目に往く時、廣島は魚類こそ宜いが、醬油が低級で、魚軒なども味を損するとして、藥瓶に醬油を詰めて持參されたのと、余にイロハニホへと書いたのを渡されたことだ。イロハは旅順口陥落次第至急報とするので即ち暗號だと吳々注意し行き、斯くて天長節の日イロハニホへが飛んで來たから、スハとばかりに號外を發行するやら、銀座四ツ角の社の樓上で、盛んに樂隊で囃すやらさしたので、滿都の人氣は湧き返るばかりであつた。

けれども公報がない、段々聞くと全く誤報と判り、下旬の二十一日になつて始めて陥落した、最早夙くに、中央新聞が陥落さした筈だらうなど、皮肉な人さへ多かつた。後に村松氏へ何故斯様な事をしたかと聞くと、大本營參謀部の計畫では天長節頃に占領する豫定であり、而して當日朝大本營の廊

下を往返する將校連が皆ニコ／＼するので、村松氏の六感は的切り旅順陥落と直覺したのだとことに社中一同開いた口が塞がらなんだ。

兒玉將軍もその當坐、余等を謹して旅順陥落將軍などと綽名されたものだ。唯併し戦勝毎に樂隊でブカ／＼囃し立てることは、中央新聞の創意として頗ぶる評判であつた。

遅塚麗水氏の艶聞、鯛の活き作り

中央新聞からの従軍記者として、眞つ先きに大岡先生の實弟力氏(長峽)が第一師團付で乃木旅團に隨ひ、又海軍へは、水田榮雄氏が軍艦浪速(艦長は坪井航三大佐)に搭乗された。力氏が遼東半島へ露營するとて手槍を立て、天幕を張り、その下で起居すると報じられるや、先生は是れが舍弟だ一家を構へた始めだと笑はれたが、氏は旅順陥落の後、更に陸軍の威海衛占領にも參加した上、一旦歸朝されて余が代つて従軍することとなつた。

力氏の土産話に、乃木將軍が畑地へ立便中敵弾が近くへ落ちて、沙煙を卷上げると將軍は自若として、ホー遣りをるなといはれたその豪膽さには驚ろいたこと、又唯一度支那人を斬つたことなどがある。此支那人始めは頻りに哀訴嘆願したけれど、後には觀念したには感心した、但大刀一閃ドシンと音がして、丸で鍋か石でも叩き割つたように感じたといふ。それは往年福本日南氏が支那の旅宿で時計を盗み逃げる支那人を露次の突當りまで追蒐け斬つた時、ドシンと手答へしたといふのと一致して居る。バラリズンと斬り下げるなどいふのは全く講談師の張扇式出鱈目に過ぎぬ。

力氏の歸朝は二月下旬で、其歓迎と余の送別と併せて紅葉館で開宴した。我同人連は、此頃水蔭氏をお先棒として盛んに紅葉館で遊んだが、或は歸り掛けに、酒の充ちた爛德利に、盃(總て京都焼で紅葉の模様)をポケットに忍ばせて、途すがら盛んに献酬を延長する茶目黨もあり、此送迎宴なども大得意で浮かれて、殊に新味を添へる積りで力氏が持歸られた支那兵の服を水蔭氏と余とが着て出席した。同館でも面白いと思ふてか、此服を見本として幾着かを仕立てさせ、戦争終了後、戦捷踊りなるものを案出して、大に喝采を博するに至つた。

余は出發前、始めて生命保険なるものを付けたが、歸朝後に無論中止した。併し拂込みの幾割かを戻すことも知らずに居ると、江東氏が四拾圓以上受取れるから、以て一寸飲むに足るとして、交渉して見たけれど、期限後一週間も過たからとて空しく引返された。

余の發途を函根まで見送つたのが江東氏で水蔭氏は先着し居られた。余は水蔭氏と數日搭の澤の環翠樓に滞留した。樓主で關東俠客と聞へた鈴木傳左衛門さんが、送別の印にとて、鯛の生作りを供したのには驚いた。鯉の生造りは珍らしくないけれど、鯛のそれは始めてであるからだ。

此間に、後には新講談者となつた細川風谷氏(源太郎)にも始めて出會した。氏は米國に居たこと

もあるとして、其話やら得意の漫談を山上で試みられた。環翠樓の何とかいふ女中とロマンチックらしいのもあつたようだが、是は余がお育といふ女中から聞いた話だ。此お育は後明治四十一年頃に環翠樓で會つた處依然たる容貌で居たが、その後衆議院書記官であつた廣瀬瀨吉郎氏の夫人に納まり、伴はれて臺灣まで渡航したといふ。

余が斯くまでお育を知つた仔細を素ッ葉抜くと、彼女は一日遅塚麗水氏から書いて貰つたとて、半紙二枚に認めたのを示した。それは氏が依々戀々の情を古詩に詠出されたもので、お安からぬものだ。當の本人は意味さへ判らぬからとて余等に質問したのだが、余は強ひて貰ひ受け、近衛師團に従軍する都新聞の達谷客氏と同宿したので、此事由を語つて麗水氏へ戻すべく依頼した。悪戯といふ程でなく全くの茶目だ。

廣島には各社の従軍記者が盛んに居て、滞在中の文武官と同じく無遠慮に發展したが、余は東京に於て碌々遊びもせぬ連中が、田舎へ來て廉價だとして發展とは何事ぞと理屈を捏ねて、絶対に遊ばなんだ。

日本新聞で借り切て居た家には、櫻田文吾、淺見南八等の諸豪傑がころけて居る。福本日南氏も時々顔を出されたが、其中には俳句の名家正岡子規氏も居られた。顔色の蒼白い何となく弱々しい仁であつたが、近衛師團の従軍などで、彌よ身體を傷められたのであろう。

間もなく徳富蘇峰先生も深井英伍氏(今の日本銀行副總裁)を随へて來られた。日南氏は余に、蘇峰は錐の如く瘠せて居て(當時は實に然りであつた)少しの隙さへあればキリキリ割り込むが、足下はその圖體(余の體量當時二十貫からあつた)で龜の如く人の上でも委細構はずころけ廻るんだナなどと謹して居られた。

力氏が馬關から余を迎へがてら遣つて來られた。而して近衛師團に従軍するのだからとて、共にその參謀長の鮫嶋將軍(其時は大佐)を訪ふた。將軍は虎の皮の上に胡坐り込んで、恐ろしく鷹揚に構へて居られたが、歸り掛けに力氏から、如何に言語應待を丁重にしろと注意して置いたからとて、貴公のように鮫嶋にまで閣下ノを連發しては困るぢやないかとて、總て將軍以上を閣下と呼び、大佐以下は殿で宜いことなどと教へて呉れられた。

小泉策太郎氏、福本日南氏の海弱

廣島の旅客では、別段の用もなく、唯御用船へ乗込むまで待て居るのだから、毎日冗談や圍碁などに耽るのみで、相手がズツと上手ながら小泉策太郎氏(三申)なども對局した。或る日氏が例の朦朧然として來訪され、幸徳秋水を中央新聞に入るべく求められた。曰く、秋水は中江兆民先生の秘藏弟子で、曾て自分と共にめざまし新聞にも執筆し居たが、性來の不平家で、到る處ブウウ言つては

押ん出て、今や此廣島のケチな新聞に燻ぶつて居る。移る毎にグン／＼頭を上げるのもあるのに、秋水はその反対で、今や意氣消沈憐れむべき境界にある。若東京に出なば、本來の英氣煥發も期待されようから、何とかして元に戻したいといはれるのだ。その親切には余も感激した。

そこで小泉氏との約束に従ひ、やがて秋水氏が遣つて來られたが、成程意氣銷沈で、用談が終つても、何かグズ／＼と疊の毛筋などをむしつて居られる。全く婦人のようだから、是では萬事テキパキしたことを悦ばれる大岡先生には用ひられまいとは心に思ふたけれど、やがて渡清するのだからして之を持参し玉へと大岡先生への紹介狀を贈り、且先生の爲人やら、中央新聞社内の空氣なども語り置いた。これが秋水と余との相知つた始めて、爾來彼れが大逆事件で斷頭臺上の露と消へるまで、交情に替りがなかつたのみか、記すべきことも多いから、別に述べる。

余は馬關で李鴻章が日清談判所の春帆樓から旅宿の引接寺へ歸る途次、小山録之助にピストルで狙撃され負傷したと聞き（三月廿四日）、力氏と大急ぎで一旦馬關へ往いたが、同處に戒嚴令が布かれて陸軍の許可を得るまではと、獨り門司の川卯支店に一泊し、翌日力氏に迎へられて馬關の川卯本店に入り、取敢へず引接寺やら春帆樓などをも見物した。馬關の町幅が恐ろしく狭いには呆れたが、又目に付いたのは店番をして居る婦人の多くが、小型ながら色白で眉目の整ふたことだ。力氏は壇ノ浦で亡びた平家や、女官の血筋だからといひ、川卯に近い天皇社の祭りには、娼妓が盛粧して繰込む女

姿の行列のとも碇泊の諸船へ娼妓等が押掛け、翌朝船を去る時、水夫等が巧みに櫓上に登り去つて玉代を踏倒す、然るに女輩は又彼等の室に浸入して、時計その他を浚つて行くことなどを話し、現に船を取巻く小舟に居る婦人共がそれだとして、面白可笑しく話し聞かされた。

此頃は戦役のため、諸物資とも需要が熾んであつた中にも、石炭の需要は殊に多く、爲に九州方面では石炭成金が簇出し、その多くが艶脂の地たる馬關までも泳ぎ出す故、成金風が凄まじく吹き捲くり、一寸した茶屋小屋の女中でも、チップで福々で、彼女等の袂の底には、何時でも十圓札がまるめたる儘入れられて居るといふ状態で、貧乏記者など顔色なしと力氏は語つて居られた。併し到る處風流艶事に豊かな氏は、可なり發展中らしく、余は成るべくその誘引を避けつゝも、唯一日閑を作つて小戸といふ郊外一里程の處へ同道し往つた。前は沖合からグツと入込んだ海邊で、前面に東山にも似た小山が横はり、其右方の細い峽から海水が流れ込んで恰かも池を爲して居る。其處へ、生洲を設けて鯛など放し置くが、潮水清澄で細鱗までも能く見える。之を引上げて調理する鮮味喩ふるに物が無い、殊に鯛肉を魚軒位に切つたのを熱い飯上に並べ、それに焙つた白胡麻を掛け、更に熱い茶を注いで口中へさらい込むのは正に天下の珍味で、力氏が自慢されたのも無理でない。

余は始め近衛師團に従軍の筈であつたが、志望者が多くて遣線が附かぬ上、大總督府も出征と極まつたので、其方へ振替へて貰つた。近衛師團は北京乗込の豫定で、恰かも直隸原野の雨期にも當らう

とて、防雨の衣類や道明寺繻や、萬一の時の用意の脛節やらで、從軍記者の荷物は中々嵩張つたものだが、余等大總督府附のものは、極めて身輕で、余は幾んど丸腰であつた。

唯大總督府の威海丸には、總帥小松宮殿下を始め、將官連の搭乗が甚だ多いといふので余は日南、南八の兩氏と後發の佐倉丸に乗組んだ。

當時は日清談判も、李鴻章負傷のため、休戦を特に許された丈けなので、大總督府は堂々として四月十三日出發、馬關海峡を通過の時などは、船中から軍樂隊の吹奏があり、軍容森嚴、頗ぶる清國使節の心膽を寒からしめたようだ。

余は急電で廣島へ戻り、軍港の宇品から佐倉丸に乗つたが、宇品は軍人やら馬匹やら山程の軍需品やらで、その繁盛幾んど目を驚かすものがあつた。

佐倉丸にも乗組の將校が多くて、恰かも乗合せた近藤廉平氏（當時は未だ社長でなかつたと覺ゆ）等と同じく夜は食堂へ寢せられたが、立海灘で流石に鶴舌家の日南氏も、可なり海弱振りを發揮された。

從軍記者虐待さる、旅順の支那宿

余等の船が第一に着いた處は、當時大連とは總稱したものの、實は柳樹屯である。大連は茲から南方へ岬一ツ隔てた處に在り。露國が始めて市街計畫を立て、ダルニーと稱したのを後に日露戦役の結果、之を引繼いで大連と稱するに至つたのだ。

始めて支那に渡つたのだから、事毎に余の印象は深かつた。我御用船が柳樹屯の港内に投錨するや支那人等は忙がし氣に小舟の櫓を漕ぎつゝ、四方から押寄せ、何か奇聲でわめき立てつゝ、御用船から海上へ投げ棄てる空瓶や空籠などを競うて拾ひ取り、或は懷中から唯一ツの雞卵や、塵紙に包んだ一攫みの砂糖などを買はぬかゝといひ、戦争で負けた感じなどは毛頭もない。國破れて山河在り、余は一種愴然の情を禁ぜなんだ。

上陸してから兵站部より割當てられた小屋に一泊したが、翌日は旅順行の便船があるといふので其れに乗り、南八氏丈けは近衛從軍のために残られた。

旅順は天然の良港で、その東港の一端に大總督府の威海丸が雄然として碇泊し、その東方の丘上には純支那風の官署がある。紺綻や朱で塗り立て、扉には例の龍などを畫いた如何にも毒々しく又俗な建物だが、それが我兵站部その他の事務署となつて居る。余等の宿舎は港口の正面に當る小高い丘上の純洋式家屋だ。といへば如何にも良さそうだけれど、玄關には扉もなく、窓には一枚の硝子戸もなく床には敷物一ツない。全くの荒ばら家で、一室の片隅へ高粱の藁を重ね、その上へアンペラと陸軍の赤毛布を敷いたまゝで、又窓からの風を防ぐため、菰が掛つて居る所もあり、全く乞食小屋といつて

宜い。威海丸搭乗の蘇峰先生と深井氏は早く奥地の方へ向はれたと聞いたまゝで、一回も逢はなんだが、他の人々は皆余等と同宿した。併し大總督府附として僅かに四五人に過ぎぬ。

食時は飯こそ櫃に入れて兵站部から届けられるが、汁はバケツに入れてある。實は大抵は干瓢で、外の副食物といへは、澤菴漬、梅干とクサヤの乾物位だから、余は大抵支那人から雞卵を買ひ、それを飯に打掛けて済したが、それでも時々村田將軍（淳氏、當時少將）が見舞つて瓶詰の銘酒などを贈られた。飲食の具としては箸と茶碗位なものだから、皆窓の敷居上に並べて立ちながら飲食した。飲料の水や、鹽漱用のそれは、四斗樽に詰めて毎日支那人が運搬し來、食器なども彼等が洗つた。申すまでもなく總て兵站部の扱ひだ。

衣服として、余は兒玉將軍の注意があつたから、紺の厚羅紗の詰襟服に陸軍の判任官然たる帽子を被り、之に總督府の命で銀色の星章をつけ、腕には白羅紗へ朱で總督府附通信部と記されたのを纏ふて居た。何のことはない、陸軍省の判任官といふ體だ。護身用としては前年山形市で買った相模物の日本刀のみであつたが、馬關入の際、戒嚴令のため警察署へ預けたまゝに（是は後に臺灣へ赴任した友人が警察から取り今に所藏して居る）全く武器を持たぬ。

兵站部からの飯は多く餘つたけれど、之を返戻すると量を減ぜられ、客來の時に困るとして、そのまま床の上へ捨て置くと、支那の子供等が遣つて來て、手攫みのままセツセとバク付くが例で、副食物の有無などに頓着せぬ。聞けば北支那には米が乏しく、大抵は粟のみ食ふて居るから、米飯は彼等に取つて異常の御馳走だといふ。

數日後、近衛師團従軍記者の一組が遣つて來た。時刻になつて例の立食を勧めて、誠に粗末でお氣の毒だといふと、彼等は却つてエライ御馳走だと羨んで居る。其談によれば彼等は船中に於て唯四尺四方の一席を與へられたのみ、然かも携帯荷物と一所だから、坐つたまゝ、幾んど横臥も出來ぬ上、船底の薄暗い下等室で、澤菴桶などと同居だから、異臭に襲はるゝ苦痛もあり、食事とても、澤菴漬、梅干、生味噌が副食物で、上陸後も同じだとて孰れも元氣悄々で坐ろに氣の毒に堪へなんだが、同行し來られた報知新聞の某氏など、雄辯を以つて鳴らした人物ながら、間もなく病を得て死去された。蓋し従軍苦のためであらう。今にして想へば、幾んど信ぜられぬ事實ながら、又以て軍部の新聞に對する無理解か、今とは全く天地の懸隔あることが知られる。

此寄宿生活には、流石の日南氏も忍耐し切れぬと見えて、間もなく支那商人の一部屋を借りて引越された。店舗と空地を隔てた平家で、六疊敷程の廣さに、朝鮮式オンドル造りで、床下には火を焚き置くと見え、アンペラの上に布かれた毛布からホヤ／＼蒸發氣が上騰し居た。日南氏はヘンな机になど凭れて大に納まり返つて居られるけれど、其窓下に小便桶が据ゑられ、黄金液が漲つて居るのに辟易して、余は何分にも氏の勧めに隨つて移る氣には成れなんだ。

宮様が人肉水で御入浴、支那の子供芝居

大總督來着といふので、旅順に大清潔法が實行されて、幾んど面目が一新したといふけれども、尙余等の寄宿舍後ろの丘には白骨らしいものも散在し、殊に菰垂れの便所の桶底には、マザノした骨も見えた。又小松宮殿下御坐乗の威海丸の海底は、死骸がギツシリ詰つて居るから、船中で沸かされる浴湯は人間スプーだなどといふ評判もあつた。以て戦後荒寥の状態が思はれよう。

それでも支那人は居残つて處々に商賣をして居る。無論我軍政下に支配されて居るのでその人別(戸籍)までも、悉皆我憲兵隊の手で作り上げられ、唯我軍隊や軍用人夫その他を顧客に營業するのみであらうが、店舗以外、豚饅頭やら飴やらを立賣りして人夫達を悦ばすのもあるが、妙に婦人は餘り見掛けなんだ。唯日南氏の宿舎には十二三歳の可愛らしい娘を見た丈けであつた。戦時には婦人連は奥深く潜み隠れて街上などを往返せぬものであらう。

柳樹屯には春を鬻ぐ支那婦人の巢もあつたといふので、旅順に於てもそれがあり、その一廓には入口に我憲兵が嚴重に見張つて居るといふ。成程その事實は余も一見した。

支那人の勞働者は、我軍部に雇はれて、一定手當を受けるから、皆嬉々として働らく以外、余等の私用をも足す。十錢銀貨でも與へれば、皆喜色満面で唯々命を奉ずる。中にはモツと請求する押し強い奴もあるが、其等は叱り付けるか、尙聽かねば叩き擲つて追つ拂ふが例だといふ。

平生ならば、旅順へは芝罘から蔬菜菓實などの移入が多いだらうけれど、已に威海衛方面も我手に屬しながら、流石に芝罘との連絡は十二分でなかつたらうが、尤も金州方面は完全に我軍政下にあつたゆゑ、その方面から相當物資の流入したことは勿論であらう。

支那人も居、又我軍人や人夫も多い故か、湯屋、散髪屋もあれば劇場さへ蓋を開けて興行するものもあつた。

余は久しく入浴せぬし、大抵な人は温暖の折柄とて、四斗樽へ湯を容れて入浴などするけれど、余は支那人の錢湯へ行て見た。中々繁昌するが、殊に上等のを撰ぶと、未だ眞新らしい楕圓形の大半切桶(長さ約六尺、深さ八寸位)へ湯を満たして石敷きの湯殿に据ゑ、若干の控湯もあるは宜い。殊に西洋風呂と同じく一人宛で湯を取替へるといふのも宜いが、湯殿の入口に掛けた暖簾、それは綿入れ造りで淺黄色なのは未だしも、垢だらけで、然かも異臭紛々として鼻持もならず、ハテは氣色が悪くなつたので、早々に飛出し、二度と之を試みなかつた。

散髪屋も亦然りだ、余は營口に於て女郎屋なるものを見したが、注ぎの湯を木盆に入れ、又室を清くする意味で香を焚いたが、それが日本の三文抹香同然な上に、例の葎やら何やらの異臭が鼻を襲ふので、碌々美人を見る勇氣さへ無くなつた。支那人といふよりも支那家屋、支那街總體の異臭は實

に驚異であり、余が空屋同然で又乞食の住居と等しい宿舍を動かなんだのも、一は此宿舍に支那臭が幾んどなかつた故でもある。

井上艦隊（良馨中将指麾）が旅順へ来た時、その國際法顧問の高橋博士（作衛氏）に誘はれて、日南氏と余と劇場を見た。博士は経験を重ねられたと見え、中々の通で、種々説明されたが、舞臺は別に替りない。土間の見物客は我軍人と人夫で、上等席の棧敷には將校連も見えた、物賣りなどは總て支那人で例の疍高い聲で且無遠慮に歩き廻る。

俳優は十五六歳を頭の子供のみで、容顔など中々綺麗だ、唄ひ且所作るので、歌ふのが寧ろ主のやうだ。何でも船を漕ぎつゝ、歌ふので、その妙處に入るや、疍高の聲はキイ／＼として、何か樂器と同じ音色を發する、それを又觀衆が盛んに喝采する

余はそれよりも、斯る場合、此子供俳優が男色の犠牲にされぬだらうかと問ふと、博士はイヤ茲から見れば孰れも綺麗だけれど、何分不潔で、少し近づいて日中にも見ると、五指の爪は黒垢で埋つて居るといふ状態だから、支那人客ならば知らず、如何な好奇心家でも、日本人は情を揺かすやうなことは無いと笑つて居られた。

余等の役務たる新聞への通信に對して、檢閲の嚴重さは實に意外であつた。總督府の其當事官は、陸軍編修の横井正直氏が主任で、丸山氏（作樂翁の嗣子で、落合、池邊、小中村氏等と同學）が其補

助であられたが、諱むべき記事を抹殺し、中には全編悉く抹殺されるのも少くない、兩氏とも生中の識らぬ仁でもないから、或は談笑的に、或は四角張つて屢々交渉もし抗議もしたけれど寸効がないので、ハテは沈黙の外ないと悟ると兵に又餘り、通信にも骨折らなんだ。骨折らぬのではない、骨折つても何の効がないのだ。併しその代り通信は野戦郵便として總て無代で取扱はれた。

營口の客棧、居留外國人の我儘

旅順は久住の處でないから、余はやがて日南氏と營口方面を視察することとし、大總督府の認可を得て、或る汽船に乗込んだが、船が外海へ出てから驚ろくべき暴風雨が襲來し、僅々四五百噸の船は進退共に出來ぬまま假泊した。夜に入ては風力彌々高まり、船室中の棚の物など全部薙ぎ落され葡萄酒やウイスキーの瓶が算を亂してころけ廻るので、兩人とも唯昏昏として遺憾なく海弱振りを發揮した。

翌日は忘れたやうに風ぎたので、船はズン／＼進行したが、やがて海水は一面黄濁色に變じて驚ろいた。是は西から黄河、東から遼河が共に濁流を押流すためで、黄海とは名け得て適切だと思ふた。洋人の水先案内が乗込んで来て、船は竟に遼河に入つた。河といふよりも泥流といった方が適當だ。溯ること約三哩、洋型船の帆檣林立の處へ投錨した。そこが即ち營口だ。實は牛莊といふのだが、牛

莊城は尙三湮以上の上流にあり。營口は開港場で、西洋人の商館などが河岸に堂々と立並んで居る。余等は取敢へず、憲兵隊や兵站部の指圖で何とかいふ支那の客棧に止宿した。客棧とは旅宿のこと。で一町歩内外もある廣さの處を土塀で囲み、土塀内に一寸した細長い家屋が二三棟あるのみで、その廣場は支那商人の車馬や荷物の置場處だといふ。

余等の宿舍は奥正面の一棟で、左端が炊事場、右端が客室だ。總て土間で兩部を聯絡して居る。客室といつても土間の上に明り窓があるだけ、室はオンドロで、上にアンペラが敷いてあるだけだ。茲へ余等は持參の毛布や膝掛けを展べて坐り込む。食事は炊事場の次ですが、極めて脂氣の多い簡單な支那料理では余等の注文だ。總ては陸軍の兵站部から賄つて呉れるのだ。

オンドロに火のある間は多少温かだが、夜半以後火氣が絶えてからは、四月下旬といつても名にし負ふ滿洲で、寒さは骨にまで徹して安眠も出来ぬ。殊に窓外には馬が繋がれて居ると見え、蠶でバサ／＼窓を撲つので彌よ眼がサエル。雨こそ降らぬが、坐るに小雨愔々人不寢、臥聽羸馬齧殘蔬の詩も思はれて、靜寂よりも荒寥だ。況んや時々滿洲犬の遠く吠ゆるをやだ。

朝は直徑一尺程の木盆に、浅い井戸から汲んだ薄濁りの水で盥嗽するので不快さ言ひがたい、而して廣場にある無数の小石のやうなのは皆馬糞の乾き固まつたのと知つては、彌よ胸が悪い。

營口の市街は流石に純然たる支那町で、店々には支那人が盛んに商賣をして居り、店前の街衢は中央を低くし、其處へ石を敷いて置く。關帝廟などもあつて、如何にも支那らしい。支那商との應對は店前に備へ付けてある石盤石筆等で筆談するから割合に用が辯じ得た。

最も我占領地だから民政支署もあり、憲兵もあり兵站部も守備隊もあり、居留地は流石に立派で各國の領事も商人も居る。遼河には日本船も外國船も多く碇繋して居て、流石は北清有数の開港場であり、随つて賣春婦なども相當に居るといふ。

茲では外國領事はその威力を揮ひ、日本軍人の不馴れに付け込んで、可なり横暴な傾向もあり、随つて随分複雑な問題が多く、或は切齒すべき事實も少くない。余等は是れこそ渡航しての好收穫と考へ、少しも早く本社へ通信しようと匆匆旅順へ引揚げた。

而して余は之を四回分の通信に認めた處、検閲官は總て抹殺して一字も残さぬ。此等こそ新聞に報導して輿論をも喚起すべき資料でないかとて、躍起になつて交渉しても、唯だ何か評議を重ねる様子が見えるばかり、検閲官は些も體度を替へぬ。

之を日南氏に話すとフンと笑はれるから、通信せぬ積りかと問へば、抹殺されると判つて書く馬鹿もなからうと言はれる。

媾和條約が既に馬關で調印をされたことは判つて居たが、此前後から露佛獨の三國から何か重大な申込みがあつたとか、外交上容易ならぬ事象が発生するとか、口耳相屬する有様で、特に大總督府を

始め、一般の將校その他の文官等にも、幾んど息詰るばかりの緊張味を呈し來つた。

三國干涉で大會議、山縣公へ初目見え

總ては彌よ物々しくなる、旅順へは第一軍司令官野津大將も來られた。第二軍司令官大山大將も威海衛から渡來された。山路、佐久間、桂の諸中將も來られ、井上艦隊司令官は既に碇泊中だ。其處へて更に山縣大將が大本營附事務官末松謙澄博士を隨へ、御用船尾張丸で特別に乗込んで來られた。而して大總督府たる威海丸で論議が開かれた。

事は素より機密ながら、露獨佛との交渉の關係であらうことは、新聞記者の第六感でも端的に覺知される。余は此際何を措いても取急ぎ歸京するが當然と考へた。既に清國との媾和條約が成立した以上、從軍記者としての主たる任務も當然消滅と同然だから尙更だ。されば山縣公の乗船尾張丸に便乗するが何より捷徑と思ふて、大總督府へ出願した處、尾張丸は山縣公の乗船で大總督府の管轄でないとして取合はぬ。普通の御用船ならば、柳樹屯などへも立寄り、船脚も遅くて意外に手間取るけれど、尾張丸は一直線に本國に向ひ、(當時聖上陛下は四月二十七日既に大本營を廣島から京都へ移させ玉ふた)然かも全速力で行程を急ぐから、是非とも便乗したいと末松博士に依頼した處、公の承認を得てやらうと快諾され、やがて都合よく便乗することを得た。

山縣公が旅順を去らるゝ時は、實に何とも形容しがたい劇的な悲壯なシーンで有つた。尾張丸は既に熾んに石炭を焚いて汽力を一杯に張り、檣頭高く出帆旗を掲げて居る。山縣公が乗船された時は、小松宮殿下は威海丸の甲板上で見送らせ玉ひ、大山野津の兩大將以下は綺羅星の如く埠頭に立並び、威儀堂々四邊を拂ふて直立不動の姿勢で擧手の禮をされる。然かも諸將軍の顔面には、緊張の氣が漲つて、恰かも壯士慘として驕らざる容子なのを、余は尾張丸の甲板上から見て、流石に無限の感慨に堪へなんだ。

日南氏は余を尾張丸の船室まで見送つて來て、郵便切手を多く貼つた大形の書狀を托し、内地へ上陸次第直接投函せよといひ、氏自身は追つて御用船で歸朝するなどいはれた。

實の處、余は是まで山縣公に進見した事がないので、船が抜錨した翌日(?)公が唯一人甲板上の船長室に引籠り、靜かに讀書中なことを知つて無遠慮に推參した。余のノックさへせぬ不躰千萬な訪問には公も流石に癢にさはられてか、唯挨拶に答へられたのみで、極めて手持無沙汰で何とも詮術なかつたが、會て坂本龍馬が何程眞面目な奴でも、婦人に掛つてウツツを抜かした刹那の光景を想ひ見れば忽ち鹿爪らしい威嚴など消へ去るものだと語つたといふ記事を想ひ出して、始めて暢然とした。而して乗船許可の御禮を始めに種々の話談に進み、且公が讀んで居られた斯丁傳であることなど、質問すると、公も竟に折られてか、フオンスタインが獨逸建國の次第など話し、此書を追つて余に與へる

などとまで約束された。

船中には公や末松博士の外、公の副官、家従等を始め、凍傷などの爲め送還されるらしい若干の人夫も居た。而して余の外には便乗者として農學士の赤壁二郎氏も居られた。

人夫の凍傷したのは、手でも足でも傷所が膨れ上つて見るから氣の毒だ。凡そ兵站部から御用船に仕拂ふ食料は、總て一飯八錢の割で、何の差別もないから、人夫の如き三度々々辨當飯で賄ふものは頗る儲かるけれど、山縣公の如き特別扱ひをする方や、余等の如き上等船客扱ひを受くる者も、總て一飯八錢の割合だから、全く難有からぬ客だといふ。但御用船として相當以上の料金を受取るから、船屋は大福々だらう。

斯ることが話題となつて、山縣公が第一軍司令長官として出征中、涙の出るやうな美しい食事談など其従者等から聞いたが、別に公のことを述べる項に書かう。

船が馬關に着かうとする時、日本内地の青い山々は、何ともいへぬ宜い感じを與へた。日本を離れること僅かに二ヶ月に満たぬ余でさへ感ずるから、永く海外に居たものは尙更であらう。

馬關沖にある六連島に此頃から檢疫所が設けられてある。是れは石黒忠惠男の推薦で當時衛生局長に過ぎなんだ後藤新平伯が、兒玉將軍、(兵站部長)に献策して、立案されたもので、支那から歸る軍隊人夫とも、總て消毒するので後に極めて有名となつたが、尾張丸も茲で檢疫さるべきや否やが問題となり、中には神戸まで直航すべしと主張する者もあつたやうだ。

併し山縣公は假令畏き御邊から如何なる使命を帯びて居ても、兎に角一旦支那に往いて還つたのだから、檢疫を受くるは素より當然だ、況んや少數でも人夫さへ居るをやとて、公が眞ッ先に進んで檢疫を受けられることに成つた。

戦後檢疫の實驗、臥薪嘗膽

六連島の檢疫所などいへば、極めて殺風景らしいが、實は瀟灑たる日本家で破風作りの屋根のある玄關や、玄關前に木立をあしろうた處など、一寸料理屋といふ見付きだ。硝子障子の立並んだ長い廊下を控へて、疊を敷かれた幾間かの室がある。前へ通されて着衣は勿論、懷中物その他一切の携帶品を渡すと、之をズツク袋に入れて錠を掛け、錠の番號の記された眞鍮製の指輪が與へられる。即ち此指輪を穿めたまゝ、入浴するのでズツク袋はトロッコで機關室の方へ運ばれる、機關室は即ち瓦斯消毒室だ。此間余等は入浴する、湯は玉の如く清麗だ。時は五月、目に見る限り海も蒼い、島も山も皆青い、全く温泉保養でもするやうで、何ともいへぬ好い氣持だ。尾張丸でも毎日のやうに入浴したけれど、茲では諸事廣々として、然かも奇麗つくめなので、良い氣分で湯から上り、檢疫所御仕着せの小ザツバリした浴衣で休んで居る處へ、消毒された衣類持物が運ばれ、番號附指輪と引替に受取る。衣類に一

寸臭みのするのは當然だが、革類は大抵漆の解けた如く形が崩れて居る、強い消毒薬の爲だといふ。併し紙幣や銅貨には別條がない。

斯くして再び乗船する。尾張丸は快速力で一路神戸に向ふ、往く時は周防灘で濃霧に會ひ、暫らく停船したが、今度は夕景から經過し、翌朝は名にし負ふ中國海峽の好風景を貪ほり視て、船は和田岬へ近づいた。此時檢疫所から官吏が乗附け、規則通り檢疫をと申出た。スルト山縣公は既に六連島で完全に済ました以上、其れに及ぶまいといはれ、末松博士も諭されるけれど容易に聽かぬ、ハテは公も怒られ博士が内務省官吏として命令的に訓戒されたので、結局檢疫なしに神戸へ入港した。

神戸から山縣公一行が京都に向はれたことは勿論で、余は一應挨拶して引下り、赤壁氏に伴はれて神戸の旅館に入つた。旅館の名は失念したが、何でも三階で、余等の入つた室は、岡山藩主たる池田侯の御座船の一室を移したので、確か四疊半の風雅な造りと記憶する。茲で入浴する時、女中が背を流して呉れた。それが又久し振りで日本の婦人を見た故か、如何にも優さしく又美しとも見えた。

晚餐後、余は東上の急行列車に乗つた。實は京都に大本營もあり、博覽會もあるゆゑ、一寸でも立寄つて最近の時事を聞知したかつたけれど、何分にも例の陸軍判任官式の詰襟服で、暑くはある、垢で汚れ切て居ても我慢がならぬ、それに宿室は勿論、一人として知己もないから、總てを見合せたが、歸京後大橋新太郎氏が折柄三條小橋の旅館に居られたと聞いて、それならばと聊か遺憾にも思ふた

日南氏から托された郵便物は、神戸で投函した。それが後に日本新聞の一頁以上に涉つて掲載されたが、同紙は即日差押へられ、且發賣禁止の外、幾日かの發行停止と爲つた。記事は余が旅順で全文を抹殺されたのと内容略々相同じて、唯日南式の名文章と、處々に氏の論評が挿入された丈けだ。

山縣公が京都で伏奏された趣旨は、素より窺ひ知るべきでない。併し當時の傳説に據ると公が旅順で開かれた威海丸船中に於ける軍部巨頭會議に於て、全會一致、露佛獨の所謂忠言によりて、遼東半島還附も已むを得ざるものと決定したのだつたといふ。

四月十六日調印された日清媾和條約に對して、その二十三日早くも三國の所謂忠言が現はれたが、我政府は伊東已代治氏を使節として芝罘に到らしめ、五月八日批准交換を終つたので、使節は芝罘よりの歸途旅順で大總督府を訪ふて小松宮殿下に拜謁し、十三日京都に歸着された。而して此日條約及び遼東半島還附の詔勅が發表された（五月十日附）これから臥薪嘗膽の聲起り、官民慘として忍苦すること十年にして日露戦争が興つたことは、尙總ての人の記憶に新たであらう。

余は此從軍に於て、始めて支那といふ外國の土を踏んだのみか、實は静岡以西の旅行さへ始めてあつたから、得る所頗る多かつたが、殊に最も大に感得したのは、國運を擧げて戦ふ場合と新聞紙との關係である。此戦役中軍部が新聞記者を冷遇したこと、然かも強くその非を悟つたのは、國民の意識と新聞紙とが到底離れ能はぬ爲であることだ。

第九 大岡硯海先生

西郷侯を一喝す、その潔癖

大岡先生は長州豊浦郡小貫村の出で、父君が醫師なので、始めは醫に志し、長崎の醫學校で學ばれたさうだ。其頃同國同學の先輩に山根正次氏（警視廳の醫長）が居て、水泳などでは盛んに先生を虐めたといふ。

先生が醫を捨て、上京された時は、一時金を得るため、埼玉縣の小學校教師とられた。併し當時の教師なる者がアラビア數字や筆算を識らぬので、先生は其補助となり、内實二人で表面一人前の教師であつたとのこと。其頃清浦圭吾氏が縣の學務課長で、先生も屢々面晤し、議論も吹掛けもされたさうだ。而して當時の知事白根翁（專一男爵の父君）は長州の名門で、理義の存する處君命と雖も徒らに盲従すべきでないといふ意味を家訓とされた程だとして、先生は後年遞信大臣であつた專一男を賞揚して余に語られたこともある。

先生は政治家としても、雄辯家としても早くから名を成しながら、殊に多くの改進黨の諸名士と親交を結びながら、大隈伯を蟲が好かぬとして一度も早稻田の門を通られたことがない。又大岡團結の後藤象二郎伯をも大の嫌ひであつた。

菊地容齋の畫で巨象が多くの狼と闘ひ、狼群中踏まれて眼玉の飛出したのや、背骨を折られたのなどある大幅、如何にも痛快なので、余が無心すると、先生曰く實は象二郎伯から聯想して此繪を好まぬ故に君に與へても惜くないが、其れの出来ぬ因縁がある。曩に之を百圓で賣拂つた處、始め余に此繪を呉れた仁が、其れは惜い、表装代などは支辨するから、何卒取戻して貰ひたいといふので、餘儀なく其様にして今も所持して居る次第だとして、其代り五岳の梅及題詩の大幅を余に與へられた。其癖先生は大の容齋好きで彼れの多くの幅を藏せられて居た。

山縣公夫人は先生の親戚で、其縁で品川彌二郎子爵とも普通の間柄ではない。併し權門に出入するを潔しとせぬ流儀で、一向無頓着であつた處、先生の名を聞いて、子爵から縁を辿つて面會を求められ、始めて姻戚關係などを承知されたのだといふ。何人でも壯時優勝の例ながら、亦以て先生性癖の一端が推知されよう。

曾て國民協會の遊說中、先生は西郷侯（當時は伯）に随つて北海道から東北を廻られたが、天童（山形縣）で先生が某樓の二階で起つて土地の有志に演說最中、何人かの持參した畫幅に就て、侯が早川龍介氏等と談話すると、先生は顧みざま、人の演說中に談話とは何事だ、黙れツと一喝されたので、

西郷侯を一喝す、その潔癖

侯も頭を掻き、腕を拱いて神妙に控へられたこともある。疝癖の強さ剛岸さは思ふべしではないか。其癖先生には機才が豊であつた。同じ遊説中、米澤で古壯嘉門老が何か敬神のことなど演説中、山形自由黨の棟梁たる山下千代雄氏が巨軀を掲げ起ちて、西郷伯一行が今朝上杉神社に参拜の際、下馬札があるのに社頭まで乗打ちした、何故かと辯明を求められたので、侯は當惑する。古莊老は立往生處へ先生が、イヤ雨中人力車の幌が深く下馬札を見能はなんだので、總て車夫任せにした爲だ、責任は負ふが一行にも尊敬の心があればこそ殊に参拜したのだといはれ、一同始めて釋然とし、山下氏は特に先生を旅宿に訪はるゝに至つた。

西郷侯は跡で當日困つたとを語り、議會に於て議員から絡んだ質問などされると、途方に暮るのだが、伊藤さん(公)は旨く如才なく切抜けられたので一同安心したものだなどと話された。

侯が國民協會を去つて再び入閣されるや、先生の邸を訪ふて、司法次官たらんことを交渉されたが先生は應ぜられなんだ。

或る日先生から余に、遞相黒田伯から中央新聞を遞信用とする旨相談があつた。御用金も何もないが、七千枚ほど郵便局などで義務購讀をする條件だと話された。金銭問題なら無論應ぜられなんだのである。先生の金銭に對する幾んど一種の潔癖だ、後年製糖事件で先生に收賄の説が傳はつた時、余は到底事實あり能はぬことを確信した。今日も亦然りだ。

新聞講談の元祖、風俗壞亂で弱る

大岡先生は新聞紙のためには、費用を吝まず始終新意を出すに努められた。マリノニ式の輪轉器械なども他に率先こそされなんだもの、また敢て他からも遅れては居らぬ。此頃まで中央新聞の印刷は總て秀英舎に一任し、活版部の活字も従業員も、皆同舎から出張し、大組の上、近い數寄屋橋外の同舎工場へ運び込んで、紙型も取り印刷もするといふ状態であつたが、輪轉機据付以來は、活字も従業員も總て譲り受けて、新聞社の直營とされた。

此据付工事にも亦相當の用意をされた。銀座の煉瓦は政府の經營で英國の技師が設計したものだ。故に基礎工事を始め、煉瓦を積むにも、セメントなどは總て秤で量つて嚴密にした程だといふから、堅固なこと申分がない。にも拘らず輪轉機据付のためには、地下一丈から掘下けて基礎を固め、其上には従前の煉瓦屋内へ、八寸角の柱を組立て、地震に備へたものだ。

けれども後に佛國マリノニ社から技師が来て、器械を檢分した時、日本職工が器械の理解力に卓越なのは感服だが、日々器械を掃除するに粗末なのは呆れる、是では機械の壽命も短かろうとて注意に及んだ。

今日では都鄙の如何なる新聞でも、講談を載せぬのは無いが、其元祖は實に大岡先生が中央新聞に掲

けたのがそれである。是は能く識つた者が少いから、余は之を特筆せざるを得ぬ。

先生は講談物が東京ッ兒の孰れの方面にも悦ばれることを考へ、之を速記して新聞に掲げたらとて其頃圓朝と共に斯界隨一の泰斗と許された初代桃川如燕を招き、聽手には先生の夫人を始め、余の妻や、妻のお袋を始め知合を充てられた。如燕は名代の酒好の大入道だから、然るべき馳走をする爲、場所は先生の宅（當時は三十間堀）や、待合の藤村を宛られた。而して如燕に種々の得意物を語らせ其中から聽手に最も受けの良いのを選択された。去ればその費用も相當なもので、到底今頃の講談物のやうに廉價には出来なんだ。

如燕は大抵な講談毎に、酒は飲むべし飲む可らず、湯豆腐でもチヨビリ遣れば、毎時陽氣で借金取も鶯の聲などとメートルを揚げるは宜いが、越後の美人はお寒い〜と首を縮めるので、皆襟首が短いなどいふには、余は盛んに憤慨して笑はれた。

相馬事件で高名になつた錦織剛清の爲には、先生も可なり援助された、是は假令誤解でも剛清を忠義者と信じて茲に至つたので、先生の俠氣と感激性とを證するものだ、彼の板垣伯を岐阜で刺した櫻間要三郎の裁判中。多くの辯護士が政黨の勢力を憚つて、其辯護を引受けぬのを、先生は奮つて之に當り櫻間の爲にも大いに努力された、以て先生の性格を知るべきであらう。

此相馬事件の起るや、水田南陽氏が大いに腕を揮つて盛んに書き立てた。然も筆が這つて内務大臣品川氏の下に風俗壞亂で發行停止を食つたこともある。當時余は子爵を訪ふと突如事もあらうに風俗壞亂とは何事かと大喝されたこともあり。又兼約のまゝ、九段坂下元大隈邸の近衛篤磨公を訪ふと約束では有るが風俗壞亂の新聞社の方には面會出来ぬなどと拒絶されたこともある。當時風俗壞亂を卑み之に對する社會的制裁の嚴格であつたことが思はれよう。

先生は義太夫が好きで、又上手でもあつた、曾て余が勧めて、紅葉館餘興に一席語られたことがある。聽聞の美人で感泣したのもあつたので、爾來先生は勧められさへすれば大抵な場所語られた。其師匠は名人の野澤悟助だ。悟助は曾て先生の稽古を終つた後、余に、貴君の聲は長唄や清元には不向だが、義太夫には適するから稽古を遣つて御覺なさいと勧め、又錢湯で浴客のウナる義太夫の中には、立人も及ばぬ妙處が往々あるゆえ、能く注意して聽くのが例だなども語つて居た。

今は徳富蘇峰先生の書畫鑑識顧問格たる森大狂氏も中央新聞に居られた。氏は佛家の出で禪にも深く、長峽氏、紫山氏や柳江氏などは時々その臨濟的大喝を喰つたやうだが、その書畫の鑑識は實に驚くべく高かつた。長峽氏なども多分氏の誘掖を受けたことが少くはあるまい、小林蹴月氏亦然りだ。

萬朝報發行前、黒岩氏と交渉

先生は又能く才を愛する美點があつた。幸徳秋水を推薦したのが余で、余は既に述べた通り、女々

しい秋水など、所詮先生に容れられまいと思ふて居たが、旅順から歸ると、秋水が社中に居るので不思議に感じた位だ。併し秋水は意外に元氣で、當時は外國電報を直接に取るなどのことなく、唯横濱のメールとヘラルドからルーターを翻譯し轉載する位のもので、秋水がその擔當となつたのだ。

當時秋水は電報だけであるけれど、一々之を切取つて張り置いたから、外國の問題では彼が實に社中のオーソリチイであつた。或る時、佛國との問題で秋水が書いた論文が時の佛國公使館の問題となり、公使から先生の昵懇な會彌荒助男爵へ話があつたとて、先生も始めて氣が付き之を秋水に語られると、秋水は佛國から干涉とは酷いとツムジを曲げ、その師たる中江兆民翁の周旋で萬朝報へ轉ずることとし、到頭辭表を提出した。先生は彼の才を惜んで切に引止められるので、余は其意を承けて、雪中麻布市兵衛町に彼の居を叩き、之を切言した處、秋水も兎に角その意を翻すに至つた。然るに翌日に至り、實は兆民翁との交渉始末を余に打明け、竟に退社したが、併し先生惜才の厚意は彼も余も感服を禁じ得なんだ。

黒岩周六氏が未だ萬朝報を發行せぬ頃、先生は黒岩氏の翻譯小説の人氣があるのと、其編輯振りの巧なのを見込み、余を特使として中央新聞の編輯を擧げて氏に一任し、先生は唯政治上の論文を支持するに止め、それには余を代理とするといふ條件で交渉させられた、當日先生は黒岩氏宅（尾張町新地）の直向ひの清新軒に陣取つて余の復命を待つて居られた。

黒岩氏は此交渉に對し、御厚意忝いが、實は同人輩と、萬朝報を發行すべく準備中だが、資金の點で、一寸考へて居る。若其方が出來ぬなら、何とか御相談に應じようが、幸に計畫が熟すれば、御挨拶を省いて直に發行するからといふ返答であつた。而して間なく近い三十間堀から萬朝報の發行を見るに至つた。

余の入社した頃、睪丸炎から尿道狹窄症など併發したので、先生は佐々木東洋先生の自宅へ往つて診治を受けよと紹介された。佐々木邸に往くと老先生座敷の正面に威儀正しく構え込み、側に一弟子を置かれた。余の脉を取るとして正座を命ぜられるから、余が病中それは難題だといふと、老先生は顔も動かさず、猪喰つた酬いだとて大岡君からの頼みで殊に診て上げるのだと話された。いはれるまゝ、次の日往くと前日の弟子の仁が尿道へ極めて巧に通管して呉れたので、間もなく全治した。

松方内閣で内相の品川子爵が辭職されたことを中央新聞に特筆した處、松方首相から虚傳として正誤を申込まれた。先生は激怒して子爵が辭表を差付けて、那須の別邸へ往くとて、杜鵑何とかと辭意を表した發句を先生に贈られたのを、式紙のまゝ木板として新聞に掲げ、世人をアツといはせ、内閣をしてグウの音も出させなんだこともある。今ならば容易に寫真版で大小自由に掲載し得るのだけれど當時はそれが出來ず、式紙のまゝ大デコノで刷出した

先生一日從容として余に、君は人のいふことを眞ッ正面から受け入れて少しも疑はぬといふ美點が

あるから羨ましい、自分の如きは、多年辯護士を業とした爲か、總て人のいふ所を裏から觀たり横から考へたりする癖があつて、ドウも困ることが屢々だといはれたともある、或は然りであらう。

先生は又社務に關して社員に失敗があれば、遠慮なく言つてのけて少しも容赦せぬと言つて居られたが、その代り、蔭で人を誹るなどのことは毛頭もなかつたやうだ。

狩野芳崖の名畫、池上秀畝氏を妹婿

先生は早くからの辯護士で、法理専門の理窟屋ながら、半面文雅の嗜みも深く、繪畫の好みは殊に深かつた。隨分名幅も珍藏されたが、西郷侯一行と東北巡遊中、鶴岡で骨董店を漁り、蘆雪筆の雁などを掘出されたことは、余も隨行中で實見した。又山縣公から贈られた狩野芳崖の大幅（一對で共に巖頭の松樹）など實に彼れの傑作で、恐らくは明治期中の名品であらうと思はれる。

先生の妹君豊子さんは、女子技藝學校出で彩管にも親まれたやうだが、後に池上秀畝畫伯に嫁せられた。次の妹君は椿園玉木懿夫氏の現夫人と記憶する。椿園氏も亦一詩人である。力氏こそ繪畫鑑識以外文藝の嗜みはなかつたやうだが、末弟の進氏は醫家で朝鮮に居られたが、中々の俳人だと聞く。先生の末子龍雄氏が小説家として卓然たる素質あることは、蘇峯先生なども推稱されることでも察知し得られる。

先生唯一の令嬢育子女史は、虎の門出身で才色双美、先生も鐘愛措かれなんだが不幸早逝されたので、先生哀悼の深さは、多くその詩や俳句にも現はれて居る。

先生の後嗣である二郎氏（次男）は、少年から隨分の蠻殻で、三十間堀時代など、惡垂れて泥溝に落ち、その衣服を汚すと、着たまゝ河中を泳ぎ廻つて洗濯し、又そのまゝ物干臺に蹲踞して、カンカンする夏日に乾すといふ調子であつて、稍々長じてからは節を折り、一度は三井物産會社で神妙に牙籌をも握られたといふ。

先生は筆札に妙であつたが、後には大小の字皆一種の神韻があり、識る人に珍重された。詩と俳句とも亦堂に入られたやうで、今その若干首を次に掲げる

硯 海

漾々春波碧。千帆去又來。青山相對立。落日海門開

蒙古山

一望博多灣。千年蒙古山。暮雲橫戰跡。斜日落波間

鳴原曉色

娥眉山上月。影落有明灣。曉靄橫天草。蓬窓夢自間

埼 玉

狩野芳崖の名畫、池上秀畝氏を妹婿

會執教鞭村學堂。回頭三十八星霜。兒童爲父女爲母。舊識山川似故鄉

天長節寄在韓季弟

鳳闕祥煙閣闔開、天長佳節氣佳哉、坐懷有弟在韓北、絕海遙擎萬壽杯

題岡田半江雨後江村圖

獨木橋邊畫掩門、人從雨後過江村、點峇秀潤米家訣、氣韻風神入墨痕

大觀樓

大觀樓聳赤間關、隔水青山文字灣、硯海潮生三五夜、布帆自帶月明還

中央舊友會席上作

紅葉林間共酒卮、話新談舊興無涯、相逢意氣亦相似、二十年前把臂時

田口卯吉氏追悼會

駒込やそのおもかけの家ざくら

長女の死を嘆きて

散る花を友にしてゆけ淨土まで

亡長女の七回忌に

七とせを一夢の蝶やはながたみ

長女死後七年間毎月忌日には手向の花怠らぬその親友に

散りし花をやさしき蝶の見舞哉

墓參の歸途

若葉もる上野の鐘やうしろより

別府なる西園寺公へ

五月晴豊後の富士の秀いでたる

北陸途上

わすれ霜上杉殿のしろのあと

晩酌が崇つて脳溢血、原敬氏の苦心

余は十年餘中央新聞に従事し、その間随分大岡先生を悩ましたものだ。聊か自個吹聴の嫌ひはあるけれど敢て之を記し置く。

余は記者生活の始め、一論文を草するに幾んど全一日を要したが、漸次筆が早くなり、先生の如きは朝比奈知泉氏と余と孰れが早筆なるやなど屢々評せられた。現に始めて議會の解散さるゝや、一氣に四編の民黨攻撃文を草し、第一、第二、第三、第四（これは相場面）の全頁に涉つてその上欄へ掲

けたこともある。

又先生が議會から歸社されての談をも記するがため、余は當時痔疾を病み、車上に護謨の圓坐を据ゑて乗り、社中では椅子に腰掛け能はぬので、立つて卓子に倚りながら筆を走らせ、或は駿河臺から往返する苦を免かれるため、新聞社のスグ横手へ下宿したことさへあつた。

當時の余の勤務振りは、何等非難さるべき間隙はないと信じて居る。併し是れには永續性を持たぬ殊に余は社にある間、何か攷々兀々として働かねば氣が濟まぬ癖がある。川崎紫山氏の如く私用の書簡を認めるとか、他の嗜好の書に讀み耽ることなどが出来ぬ上、妻を迎へて駒込淺嘉町（吉祥寺の所）有で其横手にあつた）へ引越して以來は、別段サボルのではないけれど、兎角不例勝ちで欠席することが頻々であり、或は風邪中だからとて、大溫袍を着込んだまゝ、出社したこともあつて、可なり我儘振りを發揮した。

流石の先生も困り抜かれたと見え、余のみを日給制とされた。會計部の酒井、勝俣などいふ仁はそれでは尙更氣強く休むだらうといはれたさうだが、先生は兎に角押切つて實行された處、案の如く余が却つて平氣で休暇を取るのも、間もなく復舊されたこともある。

斯ることを耳にされてか、大橋新太郎氏は懇々と余に八節主義ハッパツを執れと忠告された。當時石炭の關係から普通汽船の速力は八節が一番經濟的といはれるが、足下の如く、勉強する時は常人の二人前三

人前も勤めるが、併しそれは永續不可能だ。然かも人は非常の勤勉を認めることが少くて、懶惰の方面のみが際立つて目に着くが例だ、故に非常時は格別、平時は悠々八節主義で、毎日ムラなく勤續するのが賢いといはれた。

成程これがサラリーマンとしての一種の哲學かも知れぬ、唯余には頑迷移り難きを奈何だ。それに就けても、先生が斷へず寛容されたことは、今でも感謝措かぬ。

先生が衆議院議長となられた以前から、元の同人等は時々先生から招宴を受けた。岡崎國臣氏なども其大學生時代に同窓親交の苦學生を援けるため、二人で社外員となられたこともあつた關係から能くその會合にも出席された。

以前酒を嗜まれぬ先生が此頃から可なりな酒量があるので、余が驚いて問ふと、實は近頃每晚三合宛飲むが、味ひも能く、健康も亦良好だといはれるから、時に大に飲まれるは宜いが、日々三合では恰かも服藥を續けると一般で、何時かは必ず酒毒が顯はれるから、御健康上恐るべしと諫めたけれど先生は飲酒以來却つて身心の具合が宜いとて聽入れられなんだ。

其時先生の用酒の銘を問ふたらば、白鷹だといはれる。青松か黒松かと伺ふと、側の夫人が黒松だと答へられ、それなら最良の酒だけれど、日々の晩酌三合は多過ぎると申すと先生は却つて、君中々酒の通だネなどと笑はれた。

其後幾年かの後、果然先生は中風症に罹られた。余はカワセミ(小鳥)の黒焼が中風症の特効薬と聞いて松江から御見舞ながら御勸をしたこともある。大正十二年の暮虎ノ門事件のあつた當日、余は恰かも衆議院に行き、記者俱樂部で變を耳にし、議院に入ると高橋久次郎翁が電報用紙を手にしてセカセカ廊下を來て、余に此變事を松陽新報へ急報する處だといはれるから、既に電話で知らせてあると答へると、其れならば見合せようと替りに打連れて食堂に入り、翁の紹介で植原悦次郎氏と語り、更に舊知の林田龜太郎氏にも逢ひ、變事を語り合ふて、その足で芝松本町の大岡先生を訪ふと、先生は余から始めて虎の門の事を聽いて驚かれた。余は之が先生の病氣に障らぬかと懸念すると、先生は別に病氣に影響せぬことを語り、尙ほ極めて滑らかならぬ舌を動かして、先年足下の忠告を用ひたらばと今でもシミふと思ふといはれたので、余も覺えずホロリとした。

其前々年の暮、余が松江行の際、暇乞旁々推參すると、先生は故人岡崎運兵衛翁とは、足下も國民協會本部や品川子爵邸で多分面會して居る筈だがなどいはれ、且華盛頓會議に對する原前首相の苦心を語り、支那などの悪宣傳もあらうけれど、兎に角日本が歐米から侵略主義國と誤解されたことは意外に深く、此際將來のためにも之を一掃するが急務で、ために犠牲を拂ふも亦惜む可らずとし、萬難を排して會議に參列した苦心や、委員選定の注意から、平和を尊重する深遠の考慮を語り、徳川家康が國家平和のため無理にも大阪を押潰した真意が、原内閣當時の苦心に由て諒解されるように成つ

たなどとまで語られた。

先生は伊藤公を輔けて政友會の成立に努力し、眞に帷幕に在て斡旋に勞せられたが、公が哈爾濱で斃れられた以來は、尙更心を政友會に入れ、殊に原敬氏には深く傾倒されたやうだ。原氏また兇刃に倒された爲、先生は恐らくは深く傷心されたであらう。病んで竟に起たれなんだのも、或は偶然であるまいと余は考へて坐ろに慄然たらざるを得ぬ。

第十 新聞紙の使命

意思の疏通が第一、遊米中の一挿話

大岡先生のことを述べ終つた機會に、その遊米中の一挿話を添へて余がツク／＼感じた新聞紙の使命は誤解を釋くにあるといふ一條を記し置く。

紐育で一日三井物産の支店長岩原謙三氏を訪ふと、丁度益田孝さんの來狀がある。大岡先生が水田南陽君と渡米するから其宿所など調へ置くようとの主旨で、併せて益田さんの先生觀まで細々と報ぜられてある。

先生到着の日余は岩原氏等と之を中央停車場に迎へ、豫定の宿所へ送り込み、爾後毎日余の方から訪問して、同宿せぬこととした。是は岩原氏が曩に平岡浩太郎さんが來て、ホテルでも食堂へ出ず、一々食事を自室へ取寄せて、馬鹿な錢を遣つて多くから笑はれたとや、大岡先生も氣六ヶ敷屋らしいから、同居は成るべく避けたが宜いなどと忠告した爲だ(併し後には先生丈け余の寓所へ引移られた)一日先生を訪ふと、先生は南陽氏と卓を對して頻に語り合つて居られるから、余は避けて室隅の長

椅子に倚りつゝ新聞に讀み耽つて居ると突然先生の怒鳴られる聲がする。驚いて見ると、先生は余を振返り見つゝ、サア君自分と水田君と孰らの主張が宜いと思ふと言ひ掛けられる、余は實に意外に感じた、先生と南陽君とは極めて親密で、話合ひも其爲とワザと避けた位なのだからだ。

先生の説に由ると、南陽君は既に倫敦にも往いた經驗があり、始めて外遊する自分には最良の案内者と思ふて同道したのに、總てが豫期に反して不愉快極まつた、實は紐育の停車場で、君(余)の顔を見て宜い處で逢つたとホット安心した位だとして、舟中(先生等はエンプレス號で晚香坡に上陸し、加奈陀線で一路紐育まで直行された)での不平吟なども示された。

其日は丁度米西戦争の祝捷を兼ね、ハドソン河に觀艦式があるので、余は見物がてら南陽氏を誘ひ出し、河の堤上に腹這ひながら、先生との關係を問ふと、南陽氏は(一)船中の食事など自分の倫敦からの往復は皆日本船で、洋食の馳走を未だ熟知せぬ、エムプレス號のメニューを見た丈けで正體が知れぬ故、先づ自分で試食した、それを先生は自分の横着と誤解されたらしい(二)船中で朝起次第、自分分はサツ／＼と着替へ、禮儀を失はぬ程度の仕度をして甲板へ飛出すが例だ、それを先生は自分を捨て置くと考へられたといふのだ。

先生と三人でヒラデルヒアへ往た時、南陽氏はサツ／＼と先に行くので、先生は見玉へアノ調子だから弱らされると言はれる。後に南陽氏に質すと、シルクハットなどを被りながら、辻々で道や番地

を聞くのは見ツともない故、自分丈け進んで豫め確め置くのだと説明する、成程尤もだ。

南陽氏は倫敦以來、英國紳士を理想として、諸事几帳面だ。横濱出帆の際など、先生が手輕な旅装なのに、南陽氏は堂々シルクハットで、主客顛倒の觀があつたとやら。萬事が此調子で、南陽氏には微塵も邪念はない。然もそれを巨細打明けぬから、先生は又有らぬ方へ考へを馳せられるのだ。余は其都度先生にも申したが、併し此誤解は先生と南陽氏の間に限らぬ、永年連れ添ふて、何一ツ隠し立てせぬ夫婦間にすら、十二分の理解のないのも稀でないやうだ。

同じ會社中でも社員同士の間にも各課の間にも、意思の疏通が十分でなくて、動もすれば誤解し合ひ、そのため反感のみ昂ぶらせるのは絶無でなからう。

況んや市町村や府縣の間をや、況んや國際の間をや、此意思の疏通が十分ならぬ誤解から、途方もない難事件が持上ることは、歴史の證する所のみではない、交通機關は此有らゆる誤解を釋くに有效なものだが、殊に新聞の如き有心有機のものは、尙其方面へ努力すべきで、即ち社會上にも國際上にも有らゆる誤解を釋くを使命とすべきだ。而してそれが眞の平和を總ての方面に招來する所以だと余は確信するに至つた。

余は外遊中、主として新聞のことを研究したが、右の事實で、以來新聞紙の使命に一ツの定義と信念とを持つこととなつたのだ。

第十一 品川子爵

質素な御馳走、初對面で好感情

余の博文館時代には、同じ越後人の諸橋淺三郎氏が高輪の後藤象次郎伯邸にあり、傍ら大橋佐平翁の囑を受けて日本之女學などの手傳ひをし、又川崎紫山氏も一時伯の秘書のやうなことをして居た關係などで、其紹介で一日伯を訪問した。双脚を池水に浸し居る裸美人の大額面を掲げた應接室から、華美な伯の居室に入ると、伯は恐ろしく長い、床に引摺る羽織とも温袍ともつかぬのを着流し、頗る人を喰つた話をする丈けで、豪傑ではあるが、誠意の餘り無い人との印象を貽したに止まつた。

それよりも品川彌次郎子を訪問して酷く感じたことがある。日本之實業に何か子爵の説を承はるべく佐平翁の注意で往いたのだ。其頃子爵は代々木に住居されたので新宿苑の邊を人力車で過ぎた覺へはあるが、今日の孰れの方面か全く記憶に存せぬ、何でも竹と小松の多い林の中で、幾分小高い處であつたやうだ、或は今の山内侯爵邸の近くでないかとも思ふ。

紹介状も何も持たずに往たけれど子爵は快く余の來意を容れ、産業の必要なことなど話し、長州藩

の英雲公といふ名君が、支藩から入つて本家の主となり、主として産業の奨励に勤められた、士族等にも桑麻を種ゑさせられた事、其爲關ヶ原役後大いに封土を削られ、藩中士人多くて貧乏であつたのが始めて救はれ、實力も亦確乎として竟に維新回天の業に參するの基礎を成すに至つた事を諄々として語り、公の畫像や（黄地に浮模様ある衣冠姿）其事業の大體を記した贊やうのある一幅を貸與された。

子爵の本邸は駒込林町（團子坂の上部）であつたが、出入不便な上、自分は産業開發の意味で茲へ移り荒地を開拓したのだとも語られ、且余が佐平翁の始め勤王家であつたことや、その爲人を話すと、是非一度逢ひたいからなどと語られた。

殊に勤王のことに及ぶと、子爵は容を改めて種々のことを語り、且尊王攘夷の同志を祀り、或は其遺物などを保存するため尊攘堂を造り置くと共に、産業に努力した有志のためには、同じく念佛庵といふを建立し置くとも語られた。

談話に熱があり、田舎出の少年記者だからとて別に隔心があるのでもなく、如何にも感じが宜いで余は何ともいへず好い氣持ちに浸つた。

後に佐平翁も往訪し、痛く傾倒されたやうだ。子爵からは翁へ萩焼の陶器類などを數々贈られたが、後に余が一家を構へてからは、毎年のやうに代々木邸で出來たのだとて、恐ろしく大きな而して味の

肥美な筍を贈與された。

中央新聞時代からは、子爵の本邸たる九段横の富士見町に往いたが、當時子爵は主家の方を或る外人（獨逸人か）に貸し、自分は側の路次に入つた別棟に住まはれた、格子戸附の立關ながら客座敷は廣くて其別間を念佛庵とされてあつたが、子爵終焉の場所も實に茲であつた（今は添田壽一博士邸となつて居る）

子爵邸で時刻だからとて、晝食など供せられても、頗る質素なもので、唯漬物などは自作の物として一寸珍しい野菜を用ひ、子爵自ら説明される。客に銚子を添へられるけれど、子爵自身は決して盃を手になれぬ、唯菓子嗜好で齒と胃とを悪くすると始終話して居られ、飲食の給仕は總て若い書生さんで假染にも婦人を使はれたのを見たことがない。

唯困つたことには、如何なる場合にも坐を崩してくつろげなどと言はれなんだことだ。余が長坐でシビレを切らし、這ふやうにして立關に出るのを子爵は送りながら見遣つて、今の若い者は其れだから困るのうと哄笑されたことが一二度でなかつた。

煙草盆を抛らる、痢癘玉の破裂

煙草盆を抛らる、痢癘玉の破裂

品川子爵が始めて内務大臣となられたのは、明治二十四年五月に成立した松方内閣で、最初は西郷侯（當時は伯爵）が内相だったが、六月品川子が任命され、翌二十五年三月まで勤められ、子爵が辭職されると、後任に副島種臣伯、河野鑣敏男が成られたが孰れも永持ちがせず、其八月松方内閣の總崩れとなつた。

内相の秘書官としては、大學出の若い柴田家門氏が任命された。晩年の氏こそ相當肥満されたが、壯年時代は瘦細つて、ニコ／＼した元氣の宜い人だつた。或る日富士見町の子爵邸で待合せ居る内、氏から余に、足下は此頃、大臣の癩癩に觸れたといふでないか、何か危険はなかつたかと問はれるから、余が巻煙草函を放り付けられたと語ると、柴田氏はイヤ其位なら未だ／＼安全だ、僕などは火の入つた煙草盆を抛られようとしたことさへある、何しろ物騒千萬だから、お互に氣を付けるが宜いなどと話された程だ。

余は大橋佐平翁から菓子鉢を投られ、ムシヤ／＼その菓子を拾ひ喰つたと博文館の人達は語り觸らしたそうだが、翁と激論したことこそあれ、左様なことは一度もない、併し何の議論でか、子爵から巻煙草函を抛られたは事實だ。

後年國民協會が設立され、西郷侯が會頭で子爵が副會頭となり、侯が罷めて入閣されて、子爵が會頭になられてからのことだ。佐々友房氏から時の伊藤内閣引退勧告の決議案を提出した時、余は其不

條理で不徹底であることを主張し、大分茨城方面の老年議員なども共鳴するので、子爵へ其事を申立て、子爵が抑へられるのを尙も論じ立てると、子爵は青筋を立て、小僧ツ、何を知つて議論に及ぶかと一喝されたが、數日の後佐々案撤回と事定まるや、子爵は大勢の人々へ之を申渡し。松井ツ、君の論が宜かつたなあと哄笑されたこともある、其癩癩は疾風迅雷的だが、併し止めば光風霽月だ。

子爵の内相時代に、殊に余を呼んで、警察官を優遇せねばならぬことを告げ、凡そ水火の難を始め盜賊兇徒の危険にも、猖獗な傳染病の危険にも、挺進して之に當るのみか、其勤務は晝夜寒暑を通じ冬期拂曉に大川端などを巡行中耳から出血するもある、平時の勤めさへ是だ、然も清廉潔白で而して俸給も甚だ薄いとて、熱涙を揮はれたので、鈍感な余も覺へず肅然襟を正さざるを得なんだ。

子爵が御料局長時代、佐渡金山の鑛夫が窮困して騷擾した時、子爵は皇室の御經營の鑛山だから苟くも皇徳を累してはとて思ひ切つた措置を執つて、之に善處されたのは、當時世間の揚げて賞揚する所であつた。

濃尾大震災は子爵の内相時代だつた。之にも子爵は緊急事件として迅速に救助の手段を立てられたが、總て其當を得たので、何人も異言を挾まなんだ。蓋し子爵の至誠と政治家的手段の凡庸ならぬことを徴知し得られるであらう。

特種部落に就ても、子爵は平等主義から可なり苦慮されたい、内相を罷められてからズツと後の

ことだが、其談に、自分が内相當時宮相の土方（久元伯）が来て、皇后陛下の思召に宮中奉仕者に部落出身の者を用ひては如何やとの御内旨があつたが、何とか工夫がないかとのこと、陛下の難有い此思召に付、密に大學方面と師範學校方面へ部落出身者の有無を調べさせた處、唯往年師範出身にそれが有つたに過ぎぬとのこと、何とも致しようが無かつたとて、聲淚共に下る趣があつた。

トコトンヤレ節、其死面

子爵は勤王主義の一面、また大の産業獎勵家で、そのため念佛庵を設けられたことは前節にも述べ置いたが、産業の發達にも亦協力を必要とし、夙くから産業組合、信用組合等の必要を高唱された、組合主義の開祖否少くもこの熱心な鼓吹者としては、實に子爵を推さざるを得まい。

子爵は明治初年に獨逸に留學されたから、同じ留學者たる平田東助男をして獨逸における諸組合の法規や事業等を翻譯させ之を我國に獎勵された。今日産業、信用等の諸組合の發達も、平田男の努力は勿論ながら、特に子爵に負ふ所が少くない。

子爵はそのため全國に涉つても氣概のある實業家を激勵し指導された、我松江に於ける先代の佐藤喜八郎翁が半農半仙として子爵の知遇を享けたのも其一例だ。

去れば子爵の葬儀に際して、東京市の諸組合は勿論、全國の有力な組合から、孰れも代表者を參列

させ、且放鳥籠や、立派な生造花を寄進したので、その行列の長く且華々しかつたことは、幾んど先例を見ぬ程で、國葬にも劣らぬとて觀る者をして感嘆させたのも洵に偶然でない。而して子爵の彼の堂々たる銅像も、亦實業界感謝のシムボルであらう。

余が博文館の依頼により、太陽の初號に名家評を掲ぐべく大隈侯の談を求めた處、侯は先づ子爵の人物を評し、その政機を視る點に於て、恰も神の如き所がある時まで激稱されたものだ、是は太陽初號の讀者に記憶が存するであらう。

然るに其後、大隈邸に參つた時主人侯と黒塗の小卓を對して縦談し、腰から火の用心と太く書いた紙製の煙草入れを取出し、ナタ豆煙管でスバリ／＼煙を吸ひつゝ、人も無氣な態度で、自分の如き貧乏者は菜ツ葉ばかり喰つて居るから、瘦細りもし、病氣にも能く勝てぬが、富豪や政權者共は反對ぢや、唯陸奥宗光伯品川丈けはエキセプトだが、併し品川も狂人染みて居るネなどとまくし立てると、主人侯も調子を合せて、ウン彼の品川の頭の格好を見い、全く缺けて居るから狂ひぢやナなどと臆面もなく罵倒されるので、先日余に彼れ程まで激賞されたのにと、余は呆れもし驚きもしたが、後に火の用心氏が誰あらう、中江兆民先生であつたことを主人侯から聞かされたものだ。品川、大隈、中江此三幅對だものと余も少からず興がらざるを得なんだ。

余が外遊前、告別のため歸省すると、子爵から特に郵書を賜つた。それは多年精勤の賜だから能く

親父をも悦ばすやうにと頗る獎勵の主旨なので、余は子爵の好意に深く感激した。子爵が余を信用された原因は、彼奴曾て愚痴と錢の事を言つた例がないといふ點にあると、後に或る人から聞かされた事がある。子爵は彼の三菱征伐に、共同運輸會社などを設けられた故でもあらう、岩崎彌太郎が死ぬと實は運輸會社と對抗のため、政府の大官共を馳走し、餘り馳走を喰過ぎて命を縮めたのだなどと笑つて居られた事もある。

子爵は中々文雅に長ぜられ、錦の御旗のトコトンヤレ節などは全く其作だといふ、高杉晋作のよしこの節などと共に、實に千古の絶唱であらう。

文字も亦達者で、同じ枯淡の妙を極めながら、山縣公のよりは潤ひもあり、美しくもある。余が曾て吉田松陰先生の遺訓を新聞に書いたのを悦ばれて、其遺訓の一節を大畫箋に書いて郵寄せられたこともある。そは子爵の最も晩年の書なので、今も家寶として珍藏して居るが、曾て子爵の畫幅の展覽など催した事のある柴田家門氏も此幅を傑作と激賞した。

余が外遊から歸ると間もなく子爵は病に罹られ、竟に起つことが出来なんだ。余は代議士の朝倉親爲氏や和田彦次郎氏や柴田家門氏などと通夜もし、入棺式も拜するを得た。白羽二重に包まれ、側に黒鞘の短刀を置かれ、容顔眠れるが如くであつた。斯る人の死顔を拜したのは、是が始めであるから、特に今も判然と記憶して居る。

第十一 西郷侯爵

南洲と柏軒、活た達磨さん

西郷從道侯が國民協會の會頭として遊説部員の一行を率ひ、北海道から青森を経て秋田縣に入られた頃、余は初めて侯に進調した。一行は侯と其家從の外、古莊嘉門、大岡育造、早川龍介、新井毫、川村惇、山名次郎、安達謙藏（今の内務大臣）の諸氏だ。

秋田縣の五十目では、自由黨の棟梁大久保鐵作氏が采配を振り、葬式の行列を作り、額には三角の白紙を當て、身に麻上下を着、足に冷飯草履を穿き、或は白張提灯を捧ぐる者、生首黨尊靈と記した幡や位牌を捧げる者などが群を爲して一行を取巻いて送り込むので、多勢に無勢、一行は勿論、警官さへ手が出し得ぬ。侯爵はと見れば白いヘルメット帽を被り、薄鐵色の羽織を着たまゝ、例の如く俯向き勝に綱引車に乗つて居られる。

當時政黨の敵を待つもの實に斯の如くであつた。後に一行が仙臺で演説會を開いた時も、警戒其他手配が十分なので、自由黨は策の施すべきものが無かつたけれど、草刈親明氏等の指金で、會場たる

劇場外へ多くの石油の空罐を持ち込み、辯士が何かいふ毎にガン／＼叩き立てるので、到頭演説會を
押潰した（仙臺は余參會せなんだが話に聴いた）。

秋田市では、五十目に於ける虐待が餘りに酷かつたので、反動的に歡迎熱が勃興し、可なり盛會裏
に成功した。

安達謙藏氏は、古莊翁の意を承けて一行より二三日前に行く先き／＼を巡つて豫め其狀況を内偵さ
れた、此頃から既に黒幕的人物であつた。勿論一行と共に演説などは一度もされぬ。

秋田でも言語の能く判らぬに困つたが、酒田では、旅宿の質樸ながら甚だ美しい女中に煙草を註文
するとナイといふ、無いのかと思へば實はハイと云ふ意味だと判つたなどの珍談もあれば、本間耕曹
氏の案内で、余と早川龍介氏と一流處の揚屋へ一泊したこともある。後に茲で御所遊びの眞似をして
遊女に緋の袴など着せたとかで、不敬問題の起つたことを聞いて、今昔の感に打たれた記憶もある。

鶴岡では侯爵が土地住まひの酒井伯を訪問された外何もなく、硯海先生は雪村の畫幅や古代切れな
どを買ひ入れられた、未だ／＼帝都骨董商の手が廻らぬので、大分珍物もあつたようだ。

最上川を舟で渡る時、西郷侯はツク／＼余の姿を見下し、アナタは不自由はせぬが錢を持ってぬなど
と評されたので、硯海先生ハタと手を拍ち、御評洵に適中ですなどといはれたので、一行ドツと哄笑
された。余は雨具を持たぬので、油紙を買つて洋服の上に被つて居た。侯が一行へ話されるのに、自

分の兄も丁度此様な調子であつたといふ、余も飛んだ南洲もあつたものだ自ら苦笑を禁じ得なんだ。

思ひ出したが、余は酒田で一ツ演説を試みた、何でも酒田築港論だ。硯海先生は一行中余の初舞臺
なので、師匠が弟子の成績を見る具合で、舞臺後から覗いて居られたが、何分にも、余は當時尻と脚
に腫物が出来、屁ツ放腰で舞臺に立ち、剩へ聲量が不十分なので盛んに彌次られる、幸に論旨が簡短
なので、平氣で終結はしたものの、先生は新聞の名譽にも關するから、自今貴公の演説を封じると言
はれたので、願つたり叶つたりで爾來演説をトンと止めてゐるが、後年先生の何かの會で岡崎さんな
ども出席された時、先生から余にも何か驕舌つてはといはれたので茲で始めて前のことを挙げ、封が
解けたからと挨拶したこともある。

侯爵は圓顔で眼が太く髪や髯の具合までが繪にかいた達磨で、殊に腕には太い鐵の輪を穿めて居ら
れるので、其羅漢的な風貌など何としてもソツクリ達磨だ、その腕輪は征臺役の際、蕃人が献じたの
で、輪を腕に穿めてから叩き縮めて抜けぬやうにしたのだ。當時蕃人の蠻性で侯は腕も何も打碎かれ
ようと危ぶんだ人も多かつたが、侯が平氣で蕃人の爲すが儘に任せられたその豪膽振りには、流石の
蕃人等も心から侯に服するに至つたので、征臺にも効果が多かつたとのことだ。

難有さに大粒の涙、從軍記者優待

西郷侯を中心とする遊説一行が山形市へ行つた時、旅館とされた紫山樓といふのは、料理屋兼帯で内藝妓の總てが東京ッ兒なので、久し振りで齒切の宜い言語を耳にし、今まで東北辯に惱まされた連中孰れも大元氣となつた。

酔に乗じて面白半分、藝妓を追蒐け廻して、丸で鬼兒ツ子のやうな騒ぎもあつた。中にも新井毫氏などは部屋々々を探し廻り、余と早川氏と寝て居た室へ、藝妓が逃込み余の幕中へ愚れたのを蒲團を捲くり、余をして途方もない色男たらしめたこともある。

山形政客の先輩たる佐藤里治翁の令息（早稻田出身）が余の旅情を慰める好意から、山形隨一の揚屋へ案内して呉れたは宜いが、敵娼の美人がズーム／＼辯で、全く外國へでも行つたやうなので、余は這々の體で引上げた。

此新井毫氏は群馬縣選出の代議士で、無邪氣でもあり大元氣でもあつて、薩人たる山名次郎氏に類と打掛るが、山名氏は若いに似ず、柳に風と受流すので、毎度喧嘩にも成らなんだ。新井氏は相當の豪家ながら、自由黨の初めから政治運動に産を亡ぼし、終に利根川に飛込み自滅した。其義兄たる和田彦次郎氏が官途に就き、今も勅選の貴族院議員として存するに比べれば、巧拙はあらうが、亦人世の變化に慥然たるを禁じ得ぬ。

米澤市では佐藤忠信繼信の遺趾に近い處に宿泊した。重に士族の經營するといふ製糸會社も見た。

米澤市は市でありながら、部落の集結したもののやうで、トンと商家櫛比の街衢を成して居らぬ。士族邸は隣家から隣家へ一貫した清い流れがあり、茲に極つたやうに鯉を飼ふて置く、又豚も相應にある、山國では是も當然であらう、此縣で養鯉の盛んなのも一特色だ。

米澤に近い確か小松といふ處で懇親會があつた。出席者四百二十餘名、中にはチヨン鬚の老人もある。西郷侯は懇親會といへば必ず座席を一巡して銘々に献酬されるが、當時の宴會では、種々の盃があつて中には一合近く入ると思はれるものもあり、其れを侯は一々受けて飲んで返盃される、名にし負ふ内務大臣伯爵のお盃といふので、質素な田舎老人など、難有さに手も慄ひ、大粒の涙をポロ／＼流すのさへ少くない。

余も二十六七歳の血氣盛んで、酒で侯爵などに負るものかと、侯の跡へ着いて同じく献酬し廻つたが、酔ふて二階の自分の居室へ戻ることが出來ず、お負に下痢までして醫師の厄介になつたが、醫師の説に鯉の調理が行届かず、其餌たる蛹に中毒したのであらうとのことだつた。

侯の酒量は四升に上つても平氣だと聞いて驚いた。侯は征臺役以來の習慣で、毎朝幕中で嗽ひをし、宴會で大酒の場合など、食事をされぬとののだが、酒量の大なのは余も舌を捲いた。

演説會などでは、侯は大抵旅宿に残つて居られるので、同じ余は能く侯の室へ伺候した。スルと大小の妓が大一座で靜かに冗談など承つて居るが、やがて一人消え二人去つて隻影も亡くなるが例だ。

侯はヨク／＼基督信者と記者が嫌ひと見へ、酔ふと屹度之を繰返された。

米澤では九月の末であつたが、時々霜など降るので、侯から一統へ米澤耕の綿入を給せられた。何分盛夏東京を出たのだから、防寒の用意なしとの思ひ遣りだ。

侯の邸は三年町に在つた、廊下の隅々には美しい鳥籠など据ゑられて、室の飾りも立派で有つた。侯爵夫人は頗ぶる華麗すきで、侯が政黨運動で多く出資されるのには弱られたらしい。侯が間もなく國民協會を去つて入閣されたのは、親族會議の結果、退ツ引ならなんだ爲と聞く。

或る日余が侯の邸へ飛込むと、主人公は恐ろしく鼻の大きい見も知らぬ仁なので、余が質問すると川村伯であつた。實は間違へて隣家の伯邸に入つたので余が粗忽を詫びると、伯も大笑された。

日清戦役が終つてから、西郷侯は從軍記者が可なり難苦を喫しながら、政府からは何等酬はるゝ所ないのを憐れみ、林田龜太郎氏（衆議院幹長）と計り、美術學校の意匠と製作で出來た鉛筆（銀いぶしの大砲型に、金の鳩を浮す）を海軍模様を表はした函に入れて銘々に贈られた好意と用意とは、感謝に餘りある。

第十三 勝海舟伯

お恵みは平等に四十錢、日本人の漢文はダメ

福澤先生は瘦我慢の説で當付けたもの、兎に角大西郷と立談の間に江戸城の引渡しを取極めて世界有数の大都市たる東京を慘禍から救つた勝安房伯は、何としても一代の俊傑といはざるを得ぬ。

余が伯を訪ふたのは赤坂氷川町の邸で、立關の左右に高張提灯が立てられて、式臺など全く昔風で少しも當世式がない。剩へ取次も年若な女中で、伯自身は小屏風を背に、安火らしいものを抱へて居られる。爛々たる眼で余を見遣りながら、少し腸を痛めたから此爲體だとお斷り、其癖障子など大抵明け放して、古風な庭が能く見られる。

コレラが流行つた時、ワシも罹つたよ、彼の築山の蔭へ水風呂を湧かさせてネ、それへ浸つてヂツ我慢して下痢をこらえたヨ、そりア家内の者に傳染させぬ用心サ、其れでスツカリ治つた、醫者のいふことなんかより、此下痢を辛抱することが一番秘訣だヨ、トいふ調子で話される、是が餘程お得意と見えて、後藤新平子なども初對面から聽かされたと、子爵の話が何かに載つて居るのをも見た。

船舶の噸數に就て、此頃も國會議員が來て質問したから、斯うく説明し聞かせたとか、露西亞人でも支那人でも、大國人丈け度量が大きいとか、李鴻章や丁如昌の人物を褒めたり、話は繭から糸の出るやうに縷々として盡きぬ。

余が時事問題で何か吹き掛けると、それアお前が政府を取つてから實行して見りア宜いとばかり鼻の先で遣られるのは、中々皮肉だ。

徳川家康などと呼び捨にしようものなら、黙りこくつて碌々ものも言はれぬけれど、家康公とか権現様とかいへばホク／＼して種々なことを話される、徳川氏の衰へたのは、日光廟の建築でシタタカ費用を遣つた爲だとも決論された。

近く井上陳政氏(後に榑原姓)が支那から來たが、彼は清代の大學者俞曲園に師事したので、日本人の漢文は僅に阪谷朗蘆(芳郎男の父君)のが稍成つて居るのみで、重野成齋のなどダメだと話したことなど語り、陳政氏が齒磨粉と楊枝とを贈つたのを曲園が悦んで、感謝の詩を記したのを置いて往つたとて、太い朱罫のある美濃型唐紙三枚に書いたのを余に與へられた(是は其後永い間保存し居たが松江へ來た留守で孰れへか紛失したと見えて亡くなつた)。

伯は又大西郷を褒めちぎつて、其絶筆の詩に伯自ら解説を附せられた石摺や、伯の編輯された亡友帖なども余に與へられた。

壯士などが毎日の如く怒鳴り込んだり貰ひに來たりするが、取次は若い女中に限る、壯士連も是には亂暴出來ぬからネ、それに貰ひに來る奴には、乞食にでも壯士にでも一様平等に四十錢遣る、是は自分が樞密顧問で頂戴する年俸四千圓から割出したのだなどと話された。

木下川の梅屋敷が伯の所有と始めて聞き、遊びに遣つて來いといはれるまゝ、一度探梅に出掛けたこともある。

食事時には食膳を出されるが、驚ろくべく質素で、伯はまた老女(確かお糸と呼ばれたと記憶す)に何か味噌やうの物を飯に塗らせて小供のようにならされる。

余が揮毫を求めた時、伯は請はれるまゝ盛んに書いて、印は然るべくと例の老女に命じたまゝ、サツサツと自席に戻られる、揮毫は若い女中連がお腰元然とズラリ居並ぶが例のようだ。而して老女が印函を持出し、大小に應じて適度の印を押す、余が畫箋半切の歌書にも印を求めると、老女から和歌には用ひぬが作法ですといはれて、一言もなかつた。

徳川家康の遺訓(上野東照宮にある)を伯が中央新聞の附録のため記されたのも、余が依頼したものだ。

第十四 矢野次郎先生

飄逸で親切で大人望家、タツタ一圓札二枚

中央新聞の編輯局へ、ヒョッコリと遣つて来て、ヤアと突如挨拶も何もなく、俺が矢野次郎だとばかり話しかけられる、如何にも態度が面白いばかりか、談話がまだ甚だ面白い。

然も一頭立の馬車を新聞社へ横付けにするなど、當時では珍しいので、途行く人も、社中の人も目を見張つたものだ。

矢野先生の容貌もまた頗る揮つたもので、瘦て鶴の如く、身長がヒョロ高く、目がクル／＼して鼻高く、齒を結んで然も齒切れ能く、滑稽突梯百出する、容貌言語兩つながら飄逸で、人間世界のものと思はれぬ。

何が氣に入られたか知らぬが、頗々遣つて來られ、來られる毎に余の卓の向ひ側にドツカと腰掛けて、お得意の話を連發されるので編輯局全部笑聲恰も湧くが如くだ。大岡先生も懇意だから、最初の程は能く横合から應酬されたものだが、或る日餘り來られても編輯の邪魔に成らぬようにと例の疝癩

でキメ付けられたので、矢野先生、ウン宜し／＼と然も恐縮らしく答へられる態度が亦至極妙だつた。

先生は名にし負ふ高等商業學校の校長で、實業界にも聲望が高い、令兄の富永冬樹翁も、飄逸無双、奇人として名高いし、令妹は益田孝男の夫人である。

余が先生の麻布廣尾の邸へ伺候した時、先生は畑へ出掛けて居られたが、邸が途方もなく廣いに似合ず、家は五六室しかないと見ゆる極めて質素なものだ。先生やがて室へ余を延き、例の種々の話をせられた序俄に聲を潜めて、オイ君、金を持つてるかい、持つてるなら二三圓貸して呉れるといはれる、余が吃驚してタゞの二三圓ですかと問ふと、ウン、それで宜いヨといはれるから、懷中を見ると丁度一圓札が二枚あつたのを差出すと、エへと笑つて之を受取られた。後に臼井喜代松氏に此事を打ち明けると、ア、先生は時折さうされるんだと話した。先生が清廉で金錢に淡泊なことは是れでも判る。

先生は高等商業の卒業生を銀行會社へ入込ませる爲、自身セツセと例の一頭立の馬車を驅り、先方が留守な時の用意にと、自身認めた先方宛の書狀を懷中されるが例だといふ。

余が渡米して、船中黒死病患者があつた爲、檢疫期間、天使島に逗留した時、三井物産の小田柿捨次郎君かち町重な見舞を贈られ、桑港着の際も種々世話されたが、是は益田男から文通があつたのみでなく、實は矢野先生から特別の沙汰があつた爲と判つた。

小田柿氏は非常な敏腕家で、又精勤家で、メーブルデーの前夜などは極つて徹夜して本店への報告書

をかいたものだ、川上晋次郎と貞奴が渡米して失敗したのも此頃で、小川といふ料亭へ小田柿氏と余と貞奴を呼んだこともあり、貞奴の姪の鶴子といふ少女(今の早川雪洲の妻)が養父の青木畫師と時々氏を來訪したこともある。(貞奴が困つたので青木氏が貰つて遣つたのだ)

其頃から話があつて、瓜生繁子さん(外吉男爵夫人で益田男の妹君)の媒酌で、小田柿氏と益田克徳氏の令嬢絹子さんとの縁談が纏つたので、氏は歸朝の支度しつゝ、頗る桑港名産の銀器や、馬車に取付けるヘッドライトなどを買集めて居られたが、皆矢野先生へ贈る心入れの深い物だ。

日本海上保険の倫敦支店長であつた平尾夙三郎氏や、余と紐育まで同行した櫻組の町田豊千代氏なども、皆高商出身で、矢野先生を崇仰せぬはない、先生は當時の卒業生の中では、實に人望の集中點として輝いて居られたが、小田柿氏の縁談なども、蓋し先生の親切から出たのであらう。余も外遊中、何かと先生の餘光に由つて多くの便宜を得たか測り知れぬ。

第十五 益田孝男

朝吹英二翁の珍妙談、百萬圓など夢想も出來ぬ

一時は三井家の重鎮として東洋隨一の月給取りと唄はれた益田孝氏は、明治の初期から三井物産に入つて、外國貿易を開拓した功に由り、男爵に叙せられた。中々の綿密家で、曾て余を三十間堀の大岡邸に訪ひ、何か實業上の話をして新聞に載せるようにとのことで、余が認めて物産會社へそれを持參すると、更に種々の統計など舉げて若干事項をも挿入され、殆んどズボラな余をウンザリさせるまで訂正に訂正を重ねたものだ。

男の令息太郎氏は早くから白耳義へ留學して、人造絹糸のことなども父君へ報告されたので、余もお蔭で夙くから人絹糸のことに感知し居た。此太郎君は今や實業界の立役たる傍、帝國劇場の喜劇作者としても名が高い、叔父に富永翁や矢野先生がある丈け、ユーモア氣分の豊かなも天賦であらう。

男爵は自身新知識を吸集するに鋭意すると共に、又之を余等に頒つにも吝であられなんだ、曾て物産の倫敦支店長渡邊専次郎氏が歸朝された時、氏から英國の石炭と鐵との話を聽かうとて、大岡先生

と余とを烏森の待合榊田家へ招かれ、男は渡邊氏と朝吹英二翁とを伴ひ來られた。待合でありながら、藝妓一人呼ぶでもなく、唯淡泊な酒飯が出た丈で、渡邊氏の説明が主であつた。氏はデブブリした極めて訥辯家だが、談は流石極めて要領を得て居て、余等の益を受けたことは少くなかつた。

餘談だが、氏は倫敦で、英國佐官の未亡人を娶り、その間に二人の子供を設けられた。行く／＼は日本人たるべきなのに、子供が全く日本語を知らぬとて、夫人が泣いて心配するので、日本から教養ある保母を聘して日本語の教授をさせられた。夫人は極めて貞實で、渡邊氏が少し加減でも悪いと、他で食事しては宜くないとて、自身辨當を調理し、自身でオフィスまで持參して夫君に供せらる程だといふ。

朝吹翁は其容貌からして珍妙至極だ。曾て令息の常吉氏（今の帝國生命社長）が赤坂の一族亭で散父君の顔をコキ卸して、儲小用にと階下へ降りると、手水場で測らず翁に出會つた。翁がヂロリと氏を睨めて、コラ餘り馬鹿口を利くなと言はれたので、常吉氏一言もなかつたといふ程、翁の顔面は珍なものだ。翁がチンチクリンなのに似ず、常吉氏は身長も高く、風采堂々たるもので、余は松江で今の佐藤喜八郎氏を見る毎に、能くも肖たものと常吉氏を想ひ出す。

常吉氏が話談に巧なと同じく翁も亦極めて旨い。彼の容貌でありながら、新橋お茶羅の情夫として零落時代お茶羅の仕送りでおホンを極て居たといふから、其才物たることも推測されやう。

榊田家の會で、翁の話といふのが面白い。翁は毎月十圓宛拂つてマニラの富籤を買つて居た。實は自分一代で十萬圓の富を作ることなど夢想も出来ぬが、一度富籤に當れば一躍十萬圓の主人と成り得るから、強て算段しても買續けて居るが其れでも時々三圓五圓といふ餘興籤位には當るとのことだ。

憶へば當時は實に翁等としても十萬圓の身代を夢想だにされなんだのだ、其れが實際は如何だ。日清戦役以後、三井家もメキ／＼太つたが、其重役の一人たる朝吹翁なども屈指の富人となつて、一個の茶釜や、一畫幅にも、幾萬圓も惜まぬ大身代となられたではないか。人の一生は夢の如しといふよりも、總てが最初の理想通りに往くのでなく（有つても極めて稀だらう）大抵は運命の神に弄ばれて好いのは何處までも成上るし、悪いのはドン底までも落込むのだと申すべきであらう。

益田男なども、今は世外に優悠して、日本無双と稱せられるのも、素より聰明と勤勉との賜であらうが、また好運の致す處と曰ふても差支なからう。

後進誘掖の好意、碧雲臺は恩賜物

余が外遊すると聞かれて、男爵は其品川御殿山の本邸なる碧雲臺で一會を催された。

余が大岡先生水田南陽氏と品川驛へ下車すると、益田家から迎への馬車がある、それで碧雲臺へ伺

候した、此碧雲臺こそ頗る由緒のある建物だから一應記し置く。

やんごとない上皇が御眼を煩はせ玉ふた時、京都の醫師で治せぬとあつて、殊に名古屋藩の眼科醫を召されたが、首尾能く御全治あらせられたので、叡感の餘り、其方の好きな物を申せ、屹度叶へ取らせるとの御詔で、醫師から木曾御留山の檜の名木のみで一家を構へ、是に當時の名畫家圓山應舉をして存分腕を揮はせ度いと申上げた處、上皇が勅許あらせられて出來たのが所謂桂の御殿だ。然るに其建物が附屬物(襖障子の類)と共に賣物に出て、明治初年ソックリ深川本場の材木屋の手にあつた。

益田男が之を見て値段を問はれると三百兩とのと、其頃三百兩が男の力で出來ぬので、遺憾ながら其まゝとなり、後年更に行いて見られると依然買手もないと見ゆるので、更に問糺すと價八百圓とのとで、男は飛び立つ程喜んで即座に買取つて、之を御殿山に建てて碧雲臺と名づけられたのだ。

勅許の建築だから、正面の屋根瓦には、金色の菊の御紋章が有つたのを品川警察署から矢筈敷取除方を嚴命され、男から件の由緒を申立て、も埒明かなんだとは、先年余も耳にし居た。

碧雲臺の正座敷は別段に廣くもないが、床の壁張には、應舉の墨繪なる巨松を主として、腰障子には、龜や雁があり、板戸などにも總て應舉が名腕を揮つて居る、謂はゞ國寶とも申すべきものだ、如何に貨幣價格の高い頃でも、是が八百圓とは實に驚くの外はない。

當日の客として、先着の野崎廣太氏(幼菴、當時は中外商業新報の主筆だつたと覺ゆ) 白井喜代松

氏があり、睡で物産の紐育支店長岩原謙三氏(椿菴)も見えた、是は折節歸朝中で余と同行の筈で引合はされたのだ(併し都合で同船はせなんだ)。

徳富蘇峰先生も見え、又主人公の末弟英作氏(多問店主)も見えた。お取持圓遊を始め、お貞其他の芳原新橋の老妓連も見えた。

蓄音器の吹込器が出て、硯海、蘇峰兩先生も挨拶を吹込まれ、圓遊も短い落語を吹き込み、直とそれを披露されるので、未だ蓄音機の珍しい頃なので、一統興に入り、中にも圓遊など、鼻を撫つつ、自分はお饒舌で飯を喰つて居ながら、此年まで自分で自分の話を聞いたことが御座いませんとて、恐ろしく感に堪えて居た。

英作氏が彼の雄大な體で突つ立ち上り、英國は愛蘭の豪傑オーコンネルの議會に於ける雄辯を模されたのには、余等も感嘆と喝采とを禁じ得なんだ

主人公は余に、外遊したらば其見聞を盛んに新聞紙に發表するようにとて、朝比奈知泉氏の例を引いて忠告に及ばれた。其話に朝比奈君は極めて筆豆で、汽車中でも、一等室の卓で頻に筆を走らせるその筆豆さに人を驚かしたものだに、外遊してからは、トンと何も書かぬ、是では讀者も失望したらうから、其響に倣ふ勿れとの主旨であつた

然るに余は外遊中、幾んど筆を執らなんだ。其見物する所が餘りに意外といふよりも、日本では比

較すべき工場など曾て觀たこともないから、何とも見當が立て得ぬ。といつて新聞研究は公然發表すべきものでないからだ。

併し男爵の好意は感佩に堪へぬのみならず、三井の外國に於ける各支店では、本國の官民を問はず極めて懇切に世話するので、其便を受けたものの多いのは勿論、余の如き到る處で赤毛布の失敗を減じ得たのも、同じく主人公餘光の致す所と感謝する。

男爵は晩年食物の眞價値を經濟的に領取すべく頻に研究を重ねられ、又余等に、老後安定の地を作す爲、耕作の出來ぬ荒蕪地や砂礫地を手に入れ、茲に養豚業や、その副産業でも營むようになど懇切に勧められる。其惠世救民と後進誘掖に眷々たられる厚情實に亦欽ぜざるを得ぬ。

第十六 伊藤春畝公

威海衛還附の眞意、公の揮毫

我伊藤博文公が東洋有數といふよりも、世界的政治家の一人で、特に明治時代に於ける立憲政治家として、他の追隨を許さぬことは、公論の一致する所で、其點で余等が彼是批評がましいことを申すのは實に恐しい蛇足である。依つて政治家たる公其人の面目などは一切省いて、唯余の凡眼に映つた公の側面觀を記するに止める、之を春畝公と題したのも其爲だ。

公は曾て條約勵行論の熾に起つた時、余に或新聞を示し、彼の記者が面會を求めたから、快よく引見して、勵行論に對する自説を隠す所なく申述べた處、その全體を書かずに唯彼等の都合宜い點のみ摘出して、而して盛んに攻撃を加へてゐる、不徳といはうか何といはうか、實に言語に絶した次第だ。依つて自分も是からは彼等に對するオープンドアの主義を捨て、或る程度まで信用の置ける記者丈けに面會することに決心したと聊か昂然として語られたが、首相官舎の説によれば、それからは面會許可の記者として、東京日々の龍居頼三君を筆頭に、余等數人を指定されたとのこと。

其頃は首相の談と銘打つて、政治的談話を新聞に掲けても、大抵は表面上のことに限つて、多くはまた秘密を保つ約束なので、余は寧ろ公の生活振や、官舎の内部模様などを報じてこそ讀者の興味を惹かうと存じ、其次第を公に陳べて許しを得たことがある。即ち首相官舎の立關から應接室、公の居室などを細かに覽て詳記したが、當夕は恰かも三月二日即ち雛の節句の前夜なので、晚餐の膳羞に蛤の吸物やら、公魚やらがあり、席上には一紳士が居て、余が之を眉目清秀の士人と記した處、後に龍居氏が恐ろしく褒められたと話されたので、始めて其れが氏たることを知つた。

公は午餐に大抵軽い洋食を取られるが晩は日本食が主で、時として洋食だとのこと、酒は葡萄酒と日本酒であつた、葉巻煙草は當時の價で一本五十錢位なのを吹かし髯の焦るまで吸はれる

威海衛を返附して英國の手に引渡された時、侯は彼の三國干渉で遼東半島を還附した以來の露獨の忌憚なき態度を挙げ、之に對しては何處までも隱忍して、三國に悪意をさせぬ程度に成るべく其連鎖を寛めねばならぬ、随つて威海衛の租借を放棄し、其代り我安全を保つ一面、露獨を牽制する爲英國を引入れた次第を打明け、其邊を能く呑み込んで議論をするが宜いと訓戒されたこともある。

公は少年時に井上馨侯と洋行し、洋上では英國水夫の手傳へまでされた程だといふから、英語は素より達者であり、漢詩漢文から筆札も巧なので、其秘書官たる者は骨が折れぬやうで實は一方ならぬ氣苦勞で、容易な人には勤まらぬ、伊東巳代治伯の如き人物なればこそ秘書官も書記官長も勤まると、

一時公の秘書官となつた頭元元貞氏がシミ／＼語られたこともある。

會て紅葉館の席上で、公が大醉淋漓として、久保田米仙畫伯が梅花の上へ富士山を畫がいたのに、都々逸を書擲つて余に與へられたことがある、余が持返つて床上に飾つて置くと、何時の間にか紛失した。後年之を話すと、人々は實にタイした代物なのに、惜しいことをしたと評したものだ。

公の大磯邸へ伺候して書を願ふと、左らば墨を磨れと命ぜられ、別室でセツセと大硯に墨汁を作つて居る處へ、末松青萍男が來つて、また書かせるかと笑つて居られたが、やがて公は小畫箋紙十二枚に、臺灣に於ける得意の七律二首を認められた。青萍男が一覽して、ホウ是はお爺としても傑作だねと評せられた

一律の方は大岡長峽君と頌つたが、一律は後に歸省した時或る家へ贈つた處、翌夏再び歸省した時金屏風に仕立て、展覽したが、何ぞ圖らん、詩句が前後して居る。表装師が判らぬので、土地でも物識の或る寺僧に問ふて順序を正したのだといふ。余の忠言で更に改めたが、其家が没落して賣物に出でし、買った人が寫眞として余と硯海先生に眞偽を問合せたことがある。更に後に聽けば、最初六百圓で賣られ、轉々して幾千圓にか上つたといふ。

皇太子殿下の御事、その天成の健康

余は曾て伊藤公へ紅葉館の野邊地老を紹介したことがある、老は本野盛亨氏、子安竣氏等の後を承けて、紅葉館經營の任に當つたので、前身は實に盛岡藩（南部）の名家で、維新前から英學に通じ、芳川顯正伯に之を教授したといふ珍しい履歴をも持つ由緒ある老人だ。

此老人は長い白髯の所有者で、容貌から見ても士魂あることは疑はないが、商才の有無は確實か如何か判然せぬようだ、それでも芝公園の紅葉館として、抑もの發祥から一種上品な格式（最初は見物人から十錢宛の入場料を徴して室々を巡覽させ、茶と紅葉を打出した干菓子を供し、宴會を催ふすものは、總て本野子安諸氏等と縁故ある出資者か、左もなくば其等の紹介に由る者と限られてあつた）あつても、兎に角料理屋たることに相違ないから、酒肴をも仕込まねばならぬとて、野邊地老人平生通り羽織袴で手車を飛ばし、毎朝日本橋は白木屋の前まで堂々と乗着け、其前で下車して袴を脱ぎ、前垂姿と早替りして魚河岸に入り、右に揉まれ左に押されて魚を買込んだといふから、其熱心と忠實とは放せざるを得まい。

多くの客が料理の善悪は我慢するとしても、我慢の成らぬは酒の良くないことだと、頻りにその改善を忠告しても、野邊地老人、イヤ館の酒は何處のよりも上等で御座る、拙者實地に諸處の料理屋を巡りてその酒を試飲に及んだけれど、一として本館のに優さるものは御座らぬワイとて、頑として聽き入れぬ。何分にも斯く熱心に各料理屋に往いて、自身飲んでの上といへば、老人その人の舌の機能不

完全に歸するより外に仕方がないとして余等も此話を聞いて、酒の改善を斷念した。

斯る風格の老人だから、伊藤公に紹介すると、直ぐに女中を案内として公等が會飲中の處へ遣つて來た、袴は勿論ながら黄八丈の羽織を着て、白髯をしごく處、何としても古い學者とより外は見えぬ公の問ひに應じて芳川伯との關係などを語り、ために話も相當に合ふたと見えて、一時間餘も談笑して悠々と引上げた。

余は公が料理屋待合などで飲まれたことを一度も見ぬ、公の邸（大磯の滄浪閣には夫人も居られるから本邸であろうが、又別邸のようにも見受けられた）の外は、紅葉館で酣醉淋漓能く歌ひ能く遊ばれたのに會したのみだが、公は大盃を傾むけながら、時々女中に命じて番茶を求められる、それは飲まれるのでなくて入齒を抜いて、番茶と碗の底で洗ひ、そのまま亦自身で中へ箆められるのだ、是は明治二十五年頃公が人力車で霞ヶ關の小松宮邸から推參の歸り掛け丁度歸來られた若宮妃殿下の御馬車と門前で衝突し、人力車顛覆のため下齒數枚を折られたので、義齒を用る居られたのだ。

公當時の負傷は前額に二ヶ所、後鬢と口中とで可なり重傷であり、一時は失神されたが幸ひに總理大臣官舎が間近なので速かに昇ぎ歸ると共に、夫人の氣轉で傷處繃帯と同時に公の口中へ葡萄酒を注がれたので、公を能く識るものは、夫人の機智と、公の重傷に斃られぬその強健さに感嘆を禁ぜぬはなかつた。

公の身體は先天的に強い上少壯から鍛へに鍛へられた爲か、驚ろくべき頑健振りで、咽喉病に罹られた場合など、醫師の與へた濃茶褐色の藥液をば、公自身毛筆に浸して無造作に口中へ突込み、グルグル掻き廻し、跡を嗽ひして、又々煙草も吸ひ酒も飲み續けられるといふ状態で、余はその無茶と健康とに舌を捲かざるを得なんだ。

茲で申すも恐れ多いが、大正天皇陛下が未だ皇太子殿下としての御幼少時代、能く葉山離宮から公の滄浪閣へ臨ませられた、會て殿下が御成の際、庭上で揚弓を射させられ、その矢取りをされた夫人が眼疾で一方に繻帶されて居るのを御覽じ、お梅（公夫人の名）何故目に褌を掛けて居るなど問はせ玉ふた、御歸り掛けに公が葉山まで御送り申上げると、車中で種々の御下問があり、立憲政治とは何の事かと仰せられたには閉口し、追つて順序を正してヨク／＼申上げると御答へされたこともありとて殿下に對する種々の事實を話された。

尙ほ後年殿下の御輔導役とならせ玉へる有栖宮威仁親王殿下が、皇太子の妃の宮を取急がせられ、且その御選定などにも一方ならぬ御苦勞を重ねさせられたこと、それに對する官僚心理なども公からシミ／＼話されたこともあつた。

公が開放的で、公明で、政權になど執着されぬ美點は、別に傳るものがあるから、余の申すを待たぬが、公は辭職をして悠々野鶴を學ぶと、やがて體重一貫匁位忽ちに増加するよと云はれたことが一再でなかつた。以て國家に奉公の苦心の尋常ならぬことが知られると共に、余などは自然に頭の下がるを禁じ得なんだ。

水揚物語、附たり井上侯の半面

公と夫人間には唯一女がある、即ち末松青萍男夫人育子の方だ、が公には多く世の知らぬ所謂御落胤なるものがある、今の男爵伊藤文吉氏なども其一人で、男の容貌も大いに乃父に肖、才略も亦傑出して居られ、而して其夫人は桂公の令嬢だ、外に一人の男子もあり、日高榮三郎氏（元の宮崎縣多額納稅議員）の婚だが、此仁は身長こそ高いが瘦型だと聞く。

公は子供がないとて、早くから井上公の養嗣子勝之助氏の弟勇吉氏即ち今の博邦公を養嗣子とし、之に高島嘉右衛門翁の女を迎へて夫人とされた、博邦公は養父に似ず恐ろしい子福者だ、其容貌が極めて秀麗で俳優にも稀な程だけれど、素行謹嚴で型の如く子福者なのだ、此點から視れば不肖の子（良意味の）だ。

長州の元老は概して子の福運が薄い、山縣公などは、早く長男を喪はれ、僅に今の船越光之丞男夫人松子の方があられる丈けだ。

井上侯も唯一人の令嬢だけで、之に勝之助氏（今の侯爵）を迎へ嫁せられたが、後に千代子といふ

御落胤があると知れ、之を勝之助侯の養女即ち侯爵自身の孫分とし、桂公の三男三郎氏を迎へて養孫とされた、勝之助侯には不幸で子が全く無い、伊藤公は實子があつても、家督は全く別人だ、山縣公も亦夫人の甥伊三郎氏を養嗣子とし、其夫人としては加藤弘之博士の女を迎へられた、唯井上侯丈けは實の女をして連綿家を嗣がせられるので、比較的が一番幸福といはば言ひ得よう。

序に井上侯のことを附記する、伊藤公は最も淡泊で、盛んに女にこそ戯れられたけれど、何等の執着を持たれぬ、曾て朝鮮に遊ばれた時、仁川に素ばらしく美しい雛妓がある、其水揚を公にと抱主の希望で、殊に衣裳まで心を籠めて新調した、公は氣輕に良しくと肯はれたが、其手當の段となつて隨從の森槐南、矢土錦山の諸氏が衣裳代から見ても三百金以下ではといふと、公は怫然として、餘り人を愚物扱ひにするナ四五十金も遣れば十分だといはれるので、流石の槐南も酷く弱つたといふ話もある、それで公には財産は勿論、家さへなかつた、又それを氣にもされなんだ。

山縣公は伯爵なら伯爵、公爵なら公爵としての體面を保たねばならぬとて、其れ丈けは注意されたが、井上侯に至つては、書畫骨董の鑑識も傑出されたであらうが、明治の初期、未だ何人も注目せぬ頃から、盛んに名器を蒐集され、畫の最上乘と稱せられる、佛畫さへ少からず所有される、即ち其襲什の名畫名器のみでも、鬱然たる産を爲すであらうと傳へられる。

侯は又夙くから茶道の嗜好が深く、茶會の料理にも拔群の手腕があつた、現に客など招かれる場合には侯自身臺所へ出張して、一々鹽梅を嘗め試みて、矢笠しく板前を指揮されたといふ、侯の薨後同家の料理人は麻布櫻田町へ興津菴（侯の生前別荘のあつた地名に因んだのだ）といふ料亭を出したが流石に侯から仕込まれた庖刀の腕前で、食通を悦ばせて居る、來客にも侯と縁故のあつた人々が多く山縣公、杉孫七郎子その他の連中も皆來客帳に自署し居られ、今や手狭ながら帝都名物の一ツとも成つて居る。

井上侯は三井家に取つて再興の大恩人だといふので、侯の三井系に於ける勢力は素ばらしいものであつた、益田孝男なども、侯の最大限の信認を得ると共に、能く侯に私淑して、書畫骨董の嗜好から食通は勿論茶道にも深く入込んだのであらう、侯の秘書官だつた早川千吉郎氏なども、三井に入て一躍重位に据つたが、氏も侯から雪舟の眞行草の三大畫（九尺二枚の襖繪で計六枚）を贈られ、之を用ゆるため番町に彼の廣壯な家を作つた、余等が早川家へ招待された時口惡の小泉三申氏（策太郎）は、此襖繪を一覽して感に堪え、主人から取替え引替え見せらるゝ諸幅を前にドウも襖より良いのが無いであらうなど、無遠慮な批評を浴びせたものだ。

長州人は總じて料理に一種の見識があるが、併し井上侯の如きは其殊に尤なるものであらう、茶道と料理との發達は、素より太平の餘澤ながら抑もまた井上侯に負ふ所大なりと申すべきだ。

新氣樂のお金、またこれ一の女豪傑

公は大隈板垣の憲政内閣や其他に刺戟されて、政黨組織を思ひ立たれ、下準備の一ツとして信州へ赴かれたことがある、随員には大岡先生や、自由黨の長老石塚重平氏、及同黨の龍野周一郎氏なども居、外に尾崎男父子、帝國ホテル支配人横山孫一郎夫妻、宮内省御用商杉田幸五郎夫妻、新氣樂女將おきん、榊田家女將おふでなどで、余も、石塚剛毅、大橋乙羽氏等と参加した、何しろ表面は善光寺詣りで女連もあるので、殷々しいといつたらなかつた。

出發の朝、上野停車場へは末松男、伊東子なども見えた、末松男は例のヌーボー式で、ニヤ／＼笑つて突立ちてゐられるが、伊東子は機鋒縦横だ、公がステッキで子を突きながら何か冗談口を利かれるなど如何にも親し氣であつた。

列車中では、公は帝國ホテルから持參の葡萄酒などを盛んに仰られる、此分ではやがてなくなりそうなので、横山氏へ電報でホテルから早く長野へ代りを差廻し置くようなどと言付けられる

其晩は輕井澤の雨宮敬二郎翁の別邸へ泊つた、三月下旬ではあつたが、名にし負ふ寒い高地で、朝は霜柱が建つて居た、雨宮式の大構へで、坐敷に大きな圍爐裏を切つて置き、茲で槽など盛んに燃やして中々趣味がある。

雨宮夫人や其令嬢夫婦なども接待役として居た、夫人は雨敬翁が脂切つた大男なのと反對に極めて病身けながら、中々大膽で頗る内助の功があつたといふ。

翁は随分人を喰つた豪膽家で、公が西の方を指して、彼の蒼い山は何といふと聞かれると、槍ヶ岳ですと答へる。更に東北の方の聞かれると槍ヶ岳ですといふ、信州には幾個もの槍ヶ岳があると見えると余が吹き出すと、翁はヂロリ見てニヤ／＼して居る、翁は伊藤公など眼中にないといつた調子で、公と並んで膳に着きながら、公に構はずサツ／＼と飲食するは勿論、支那人の如く、魚骨などをベツベツと公の方へまで吐き散らす、實に傍若無人だ。

翁は輕井澤附近の蝦夷松の美しい林を指さして、彼れは皆自分が植林したので、一本一圓づゝとしても一千万圓以上の價格は確にあるなどと説明し居た。

杉田夫人も黒人上りらしいが、極めて淑やかだ、横山夫人は夫が髯もちやの黒面漢（併し非常な美音家で其清元など人をして恍然たらしめる、夫人も之に打込んだのだと聞く）なるに似ず、素敵な美人だ、おきん婆さんは、猿芝居のお弓と余が評した程の格好で、頗る飄輕ながら、東京では兩國福井樓のお金、向島入金のお金と、三お金といはれた程の女將で、腕も如才なまも實に傑出して居る、此新氣樂のお金に就て興のある事實を申添え置かう。

信州から歸京してから間もないことだ、余が京橋側から電車に乗らうとすると、お金婆さんが杉田